

何だか違うDB

パンチ拳血

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めまして、今回が初投稿となります。

ドラゴンボールZの内容が少し変わってきたりする作品です。劇場版の敵も出すかも。

この世界では各キャラのセリフ、性格、強さが変わってきました。もしかしたらキャラ自体が変わってきたりするかもしれませんので、ご容赦下さい。

駄文ですが、読んでいただけたら嬉しく思います。

目次

サイヤ人編

兄貴、来る	1
史上最強の戦闘民族	10
兄貴 vs 総力戦	21
更なる絶望、そして困惑	36
修行の始まり	50
予期せぬこと	63
サイヤ人襲来 恐るべしサイバイマン	76
!	76
それぞれ変わる事	93
激動	109
怪物化した化物	124

覚悟とは	141
これからの運命	156
ナメック星編	

叶える為に	173
到着	188
軍勢	198
恐ろしきはサイヤ人	210
最長老宅にて	224
来るべき	238
止められない怒り	250
特戦隊 + α 序	265
閑話：あの世の悟空	282
特戦隊 + α 中	295

サイヤ人編

兄貴、来る

ピッコロとの闘いから約5年が経ち、暫くの平和が続いた。

しかし、平和ボケなどいざ知らず、悟空は日々の鍛錬に打ち込んでいた。

今、悟空は神の宮殿での修行中。神様には、次にピッコロと相見える時の為と承諾してもらったのだ。

ピッコロは悟空を殺し、世界を征服する為に必ず強くなって現れるだろう。その為に鍛えているのだ。

しかし、それだけでは無い。

純粹に、自分がどこまで強くなれるのか試してみたいとも思っている。どこまで高みに登れるか、限界まで強くなりたいと思うのも悟空が闘いに身を置いてきた者としてそう考えるのは極々自然であった。

一つの修行を済ませ、汗をタオルで拭う悟空。

フーと息を吐き、徐に道着を脱ぎ始める。悟空はだらしなく脱いだ道着を地面に投げ捨てるが、落とした音が尋常ではない。

まるで砂を詰めた袋を落とした様な音が出ており、空気抵抗なんか無いような速さで落ちるのだ。

リストバンドと靴も同等であり、総重量は約100kgだとのこと。そんな物を着けて修行しているのならば嫌でも強くなるだろう。

「ふうい〜、かりいかりい」

久々に脱いだのか、目一杯に背を伸ばし、自分の身体を確認するかのよう to 闘いの型の動きをする。

暫くして動きを終えると、ミスター・ポポが確認しに来た。

「準備、いいか？」

「おう、バッチリだー」

悟空が応じるとポポは頷き、誰かを呼ぶ様に手を招く。

すると、悟空と全く同じ姿をした人物が目の前に現れた、……目だけはポポとそっくりなのだが。

現れた事を確認したポポは始め、とだけ言う。

次の瞬間、二人は消えた。

いや、消えたのでは無い。高速で動いているのだ。互いを打ち合う音が響き渡り、衝

撃で砂煙が舞い上がる。

大きな衝撃が起きたかと思うと、今度は力比べ。指を絡ませ、暫く間の均衡状態が続く。

共に一步も譲らぬ中、その均衡を破つたのは悟空であった。脚を浮かせ、蹴りを前に繰り出す。だが相手もそう易々と蹴りを受ける訳もなく、片脚だけになった悟空を力任せに地面に叩きつけた。

だがその際に緩んだ指同士が離れ、一瞬の隙を見つけ起き上がりざま蹴りを食らわせた。

次の瞬間、両者はその場から離れ一定の距離を取った。

悟空は両手に気を溜める。その動きは悟空の得意技である『かめはめ波』の構えであった。すると相手も同じ動きをし、鏡写しのように構えてくる。

撃ち出されるタイミングは同じであった。両者の間でぶつかり、競り合う気の塊。やがてそれは相殺し、眩い光を発した。

いきなり聞こえてくるドンツという重々しい音。光が止み、その様子を見ると又両者がぶつかり合っていた。連続攻撃の応酬が始まり、暫くは互角の勝負をし続ける事だろう。

その様子を、ポポは何時もと変わらぬ顔で見守っていた。

~~~~~

結果的には悟空は勝った。いや、引き分けの方が正しいだろうか。

説明をすると、悟空が相手をした悟空のそっくりさんは、実はポポがつくった人形であつた。

生命の水と粘土、そして悟空の髪の毛を使い、ポポがつくり上げたそれは言葉を発せない事以外は殆ど本人と同じになる。

それは強さも例外ではなく、髪の毛を抜き取った日と全く変わらない強さを持った偽悟空がそこに誕生することになる。

さらには人形という事で疲れも感じない。体力に制限がある生身と違い、ずっと動くことが可能なのだ。

しかし欠点もある。

一つは生命の水がなくなると元の粘土でつくった人形に戻ってしまうのだ。いつ切れるかはポポにしか分からないので詳しくは分からないが、恐らく数時間程度で動きを止めるだろう。

もう一つは人の感情を持たない事だ。仕草や大体の動きは本人と変わらないが、戦闘などの読み合いでどうしても人形としての限界がある。

だからこそ悟空は相手の動きの裏をかき、一瞬の隙をついてボディブローを決めたのだが、その時に生命の水が切れてただの人形に戻ってしまったのだった。

「もう少しやりたかったぞ……」

と、悟空も残念とばかりに肩を落としていた。

それにしても驚くべきは悟空のタフさか。別の修行を終えた後すぐに始めたというのにまだ余裕が見える。疲れが見えない事はないが如何に以前の悟空の偽物を真似た人形とはいえ、強さはそのままである。

驚きを通り越して呆れる程、今の悟空は鍛えられているのだろう。

ふと、悟空はカメハウスに用事がある事を思い出しポポに一声かけようとすると、そこにポポは居なかった。

辺りを見渡すと宮殿にいたのだが、そこには驚愕した顔の神様と、心配するポポがいた。神様が震えながら口を開く。

「……私は、ナメック星人だったのか」

「ナメック星人？」

何を言っているのか分からない悟空なのであった。

くくくく

宇宙から飛来してきた一つの宇宙船が地球に着陸した。着陸した衝撃で、周囲はまるで隕石が落下したかのような有り様になっている。

そこから出てきたのは一人の男。筋肉質で、尻尾が生えていた。

「ここが、地球か。人類が生き残っているという事はカカロットはどうなったのか……。まさかやられるなんて事は無いだろうが」

男は目に付けている機械を動かし、辺りを見渡す。

「む？ 強い戦闘能力が此方に向かってくる。カカロットか？」

だがそれは予想とは全く違う、別の人物だった。

「何？！？ 孫悟空ではない。何者だ貴様」

「ほほう、ナメック星人か。こんな星にもいたのか」

「ナメック星人だと？」

突然現れた人物、ピッコロはいきなりの言葉に困惑する。だが、まず問題なのは目の前の男の事だと意識を切り替え、男の前に立ちはだかった。

だが、男は興味も無いと言わんばかりに言う。

「俺の目的はカカロットだ。失せろ」

「何だと!？」

大魔王としてのプライドを傷つけられたピッコロは不意打ち気味に気功波を放った。山をも削り取るそれは男に向かっていき、着弾する。

思わずピッコロは口元を歪ませる。だが、煙が晴れた先には無傷の男が立っていた。

「下らん技だなあ。ただホコリを巻き上げるだけか」

ピッコロが驚愕する。まさか自分の攻撃が全く効いてないとは思っておらず、驚きの余り身体が硬直してしまった。

次の瞬間、男が視界から消える。

と、思ったら腹に拳を叩き込まれていた。あまりにも重い一撃に、ピッコロは動けなくなってしまう。

「俺は忙しいのだ。お前の相手をしているほど暇では……む？ あちらの方向に強い戦闘力、しかもこの星で最も高い戦闘力だ。見つけたぞカカロット!」

男は飛んでいってしまった。それを見たピッコロは、悔しいものの何も出来なくなってしまう今の自分の醜態に、ただ叫ぶしかなかった。

~~~~~

悟空は宮殿から降り、カメハウスに向かっていた。これも修行だと筋斗雲を使わず、舞空術を使い空を飛んでいく。

暫くして、カメハウスに着いた。そこではクリリンや亀仙人、ブルマなど付き合いの長い知り合いが外に出て出迎えてくれたのだった。

「悟空！ 久しぶりだな！」

「全く、呼ばないと来ないんだから孫くんは」

「いやあく、わりいわりい」

カメハウスからも懐かしい顔ぶれが出てくる。

「おお、天津飯に餃子！」

「天下一武道会以来か、孫」

「久しぶり」

「あれ？ ヤムチャは？」

「あいつなら来ないわよ、野球の試合だったさ」

ブルマは明らかに機嫌を悪くし、近くにいた亀仙人が2、3歩ほど後ずさる。余程機

嫌が悪いのだろう。

流石の悟空もこれには苦笑する。

暫く雑談に花を咲かせていたが、突如現れた大きな気に悟空は顔を強張らせた。

ピツコロか？ 邪悪な気が迫るのでそう考えたが、現れたのは全く違う人物だった。

「やっと見つけたぞ、我が弟よ」

史上最強の戦闘民族

悟空達の目の前に突如現れたのは、大柄でとても髪の毛の量が多い男だった。見たこともない服装をしており左目にはレンズのついた機械がついている。

なにより悟空のことを「弟」と言い張ったのだ、皆啞然としている。

暫くの間沈黙が続き、やっとそれを破ったのは悟空であった。

「……誰なんだ、おめえ？」

「ふむ、まあ知らないのも無理はない。お前は産まれてすぐこの地球という星に送り込まれたのだからな」

「送り込まれた、じゃと？」

それは驚きの声であったものの、男の言葉に反応したのは悟空ではなく亀仙人だった。その顔はいつものお気楽な雰囲気などなく、その額には油汗が滲んでいた。

「悟空よ、その昔孫悟飯が言っておった。谷底に落ちた丸いカプセルの様な物の中に、お前がおったのじゃ。悟飯はお前を育てようとしたが性格が荒く、懐こうとしなかったよ
うなのじゃ。だがある日誤って谷に落ち、頭を打ち付けた後いい子になった……」

「それがオラか」

「なに、頭を打ち付けただと!？」

悟空が答えると同時に、男もショックを受けた様に反応した。

かと思えば、焦った様に男は悟空の肩を掴み問いかける。

「カカロットよ、頭にショックを受けた事があるのか!？」

「うわわ、ある! あるからなんだってんだ!？」

その問いに男は納得したかの様に落ち着きを取り戻し、悟空を離した。

「そうか、それで何もかも忘れてしまったというわけか」

「忘れただって?！」

悟空が反応する。なにせ頭を打ち付けたのは赤ん坊の頃だ。忘れるにしても、忘れ去る記憶、思い出が少な過ぎる。だからこそ悟空は疑問を持った。

「そうだ、ならば思い出させてやろう」

男が笑う。その瞬間、周りの空気が重くなる様な圧力が悟空達に襲いかかった。立つことすらままならぬそれは、皆の心に恐怖を宿らせる。

「お前は、この星の人間では無い」

悟空達は驚愕した。

「産まれは惑星ベジータ。誇り高き全宇宙一の強戦士族、サイヤ人だ」

「サイヤ人!？」

驚きの余り、声が重なる。

「そして、お前の本当の名はカカロット。俺はその兄 ラディッツだ!!？」

彼らは何度驚けば良いのだろうか。

まずは悟空の兄を名乗る男。

次にその男の圧倒的強さ。

そして、悟空は宇宙人であったこと。

こんなに一気に詰め込まれると理解が追い付かない。そして何よりも、目の前の男の存在感が大きすぎるのだ。理解をする前に恐怖が先に来るなんて普通じゃない。

「そうだな。ならばここの人間が生きているのも、この星の者共と仲良くしているのも納得できる」

ラディッツが何かブツブツ言っている中、クリリンが叫んだ。

「ゴ、悟空が宇宙人なら、何で地球にいるんだよ!？」

「ふん、丁度良い。折角だから教えてやる。カカロットはこの星に住む人間共を絶滅させるために来たのだ」

男は言った。宇宙を巡って環境の良い星を探し、その星の人間を絶滅させてから他の異星人に売り込むのだという。さらに地球などのレベルの低い星ではサイヤ人の赤ん坊を送り込み、成長させながら絶滅させるのだと言う。

クリリンも「ピッコロが可愛く見える」と言うほど、その事実には怒りと恐怖を入り混ぜさせていた。

「それにはここにはもしもの為に月まであったのだからな。月と尻尾があれば、如何に下級戦士でも……てああ!」

ラディッツはいきなり驚き出した。よく見れば、ラディッツは悟空の尻を指差していた。

「し、尻尾は?!」

「ずっと前に、切れて無くなってしまった」

その事実を聞くと、ラディッツは膝を折り項垂れた。それと同時に尻尾が垂れ下がった。よく聞けばまた何かブツブツと言っている様だが。

悟空が口を開く。

「よく分かんねえが、オラはそんなサイテーはことはしねえ。サイヤ人だとかおめえが兄ちゃんなのかは分かんねえが、オラはそれに手を貸す気はねえぞ」

「それがそうも言っておれんのだ」

ラディッツは立ち上がり、数歩近付いてくる。

「我々サイヤ人は絶滅の危機に陥っている。ただでさえ少数民族だったのに、我々の母星に隕石が衝突して大変なのだ」

更に近付く。

「カカロットよ、この兄に手を貸せ。さすればお前もサイヤ人に流れる血のままに暴れられるだろう」

「言ったはずだ。手は貸さねえ」

ラディッツは「そうか」と言う。と明後日の方向を向いた。このまま帰ってくれるのか、と思いきや。

「ところで、この玉は綺麗だな」

「!?!」

それは悟空が腰に下げてあった形見、四星球だった。

気付かなかった。気付かなかった。すぐに取り返そうとするべく、悟空は動き出した。

だが貰ったのは四星球ではなく膝蹴り。悟空の鳩尾に思いつ切り叩き込まれ、身体が宙を浮く。そして、動けなくなった。

天津飯が「そ、孫が一撃で……!!」と驚愕し、皆が動けなくなる。

「カカロットよ、二日だ。二日待とう。それ以上は、幾ら弟でも待つておれん」
ラディッツはそう言うと、凄いスピードで飛んでいく。その間、暫くは皆固まったまままだという。

~~~~~

やっと動き出せる様になっても、まだ信じられないといった表情だった。

そんな中、喝ツと声を張り上げたのは亀仙人だった。

まずは連絡と回復が最優先だと見たのか、クリリンにヤムチャを呼んで貰い、天津飯と餃子にはカリン塔へ仙豆を、ブルマには四星球を持っていったラディッツの場所を頼んだ。皆が出ていき、悟空の心配をしながら「武天老師の名も地に落ちたのう……」と呟いた。

幸いして二日。いや、二日しかないのだ。どうにかしなければ、この地球は一卷の終わりである。

今はただ、待つことしか出来ない自分に亀仙人は歯噛みした。

数時間後、ヤムチャも含め皆が集まった。

先ほどあったことをクリリンはヤムチャに話すと半信半疑でせせら笑っていた。だ

が他のメンバーの顔を見て、ヤムチャも真面目な顔になる。

こうして、悟空達の地球の存命をかけた会議が始まった。

まず最初に口を開いたのはヤムチャだった。

「ご、悟空が一撃なら、俺達なんか役に立つのか!」

怖気付いた様にも聞こえる台詞。しかし、正論であった。これに悟空が返す。

「尻尾だ。奴には尻尾がある。それを握れば……」

そうか! とヤムチャやクリリンが叫ぶ。確かに悟空も尻尾が弱点であったのだから

通用するだろう。それにと悟空が付け加える。

「オラはさつき疲れて油断してたんだ。次は大丈夫さ」

その一言に周りの空気が少し軽くなる。

「お、俺はやるぞ」

天津飯が立ち上がる。それに続きヤムチャやクリリンも立ち上がった。なお、餃子は

浮いていた。

クリリンがブルマにもしもの為にドラゴンボールで生き返らせてくれる様に頼むと、

「駄目なんだ。神龍には同じ願いは二度と頼めねえって神様が言ってた」

天津飯やヤムチャは兎も角、クリリンや亀仙人、餃子は生き返れないということであ

った。

皆が絶望に打ちひしがれる。死ねば一巻の終わり、だが負ければ全てが終わりだ。ならどうすればいいか。……答えは吹っ切れる。だ。絶望がなんだというのか、死ねば全てが同じだ。ならみせてやろう、地球の意地を。

皆、覚悟のある顔をしていた。それ以上言うのは野暮だろう。

「よし、いくぞ。勝負は最後まで分からねえ！ オラが正面きって闘うから、尻尾を頼む！」

こうして覚悟は決まった。決戦は明日、生きるか死ぬかの戦いが始まる。

~~~~~

その頃ラディッツは食料を調達していた。サイヤ人は大食いらしく、大型の獣の骨が置いてあったのにも拘らず更に大量の果物に手を出していた。

ある程度腹を満たしたラディッツは少し思いつめた顔をする。

「二日後か。……寝るか」

それだけ言つて、ラディッツは眠りについた。

~~~~~

遂に決戦の日、移動は体力の温存も兼ねて飛空艇で移動している。

皆雰囲気が重く、しかし諦めの無い目をしていて。決心は付いている。

「皆、着いたわよ」

それは死の宣告に近い言葉。死なずに勝つなんて甘い考えは要らない。

「よし、いくぞー！」

悟空の一声で全員が飛び出した。

……までは良かったのだが。

「……………ね、寝てるな」

ヤムチャの一言。しかし今の現状を示すにはこれで十分だった。

何とも言えず、手が出しにくい状況である。

どうしたものか、と思ったその時。

「この俺がただ眠っていたかと思っっているのか？」

ラディッツが、瞳を見開きそこにいた。

一番近くにいたヤムチャは「ヒイイ」と立ち退き、悟空達は身構えた。それに比べのっそりと起き上がるのは、自分を強者と思つてのことか。ゆつくりと左目の機会に手を触れスイッチを入れた。

「ふむ、じじいが180、三つ目の男は308、白いチビは174、その男は208、ハゲが266、そして……」

ラディッツは驚いた表情で言葉を詰まらせ、そして。

「カカロットは、907か」

だが驚いたのも一瞬。いつもの顔に戻り、悟空に向けて言う。

「同じサイヤ人でありながら、断るのか」

「そうだ」

「この兄に逆らうのか」

「そうだ」

「そうか、分かった。ならばお前を仲間と思うのは辞めよう」

そしてラディッツは気を放出し、

「貴様等に恐怖というものを教えてやる」

## 兄貴 V S 総力戦

皆が戦慄する。

以前にも感じたが、とてつもない圧力である。あまりにも圧倒的であり、今にも相手の気に吞まれそうだ。

だが、吞まれない。否、吞まれてはいけないのだ。吞まれればその時点で”負け”なのである。

するとラディッツは突然何か気付いたように宇宙船へと飛び、何かを取り出した。

「ほれ、カカロット」

持っていたものを投げ渡すと、悟空の掌にスッポリと収まった。それは四星球、ラディッツが悟空から奪った物だった。悟空は意図が分からず、ラディッツに問いかける。

「何で返してくれたんだ？」

「そのボールは囷だ。確かに美しかったが、カカロットが大事そうに持っていたのでな。それを気にしては戦えまい」

ラディッツはニヤリと笑い、理由を話す。

するとヤムチャが。

「な、なんだ。願いが目的の為に奪った訳じゃないのか……」

「何い？ 願いだと？」

墓穴を掘った。遠くの方で「ヤムチャの馬鹿あ！」という声が聞こえる。だが確かに盲点だった。昨日の意見でドラゴンボールの願いを言えばどうにかなるというものは出たが、それはラディッツが四星球を持つていった為に即却下された。だがしかし、悟空を連れ戻す方ばかりに気を取られ、相手がドラゴンボールを使うという可能性を見出していないかった。

あまりにも不覚。悟空は四星球を隠しながら構える。だが、ラディッツは動こうともせずこちらを見ているだけだった。

「それが何だかは知らんが、そんなに大事な物ならさっさと仕舞うんだな。この戦闘で割れてしまうかもしれんぞ」

待つてやる、と言わんばかりに腕組みをし、ただ無表情だ。悟空はなるべく早くブルマに四星球を渡し、そしてラディッツの前に立つ。

「終わったか？ なら、始めよう」

ラディッツは悟空に向かって走ってくる。悟空はすかさず防御の姿勢を取った。疲れていたとはいえ、一撃でダウンさせてきた相手だ。まともに食らえばタダでは済まないだろう。

ラディッツの攻撃は肘打ち。悟空はしっかりとそれを防御しカウンターを決めようとして、

消えた。

いや、消えたのではない。悟空はその答えを探し出そうとして左右を確認した。だがそれよりも早く、

「後ろだ」

さつきよりも更に強い肘打ちを背中にまともに食らう。悟空は吹っ飛ばされながらも何とか体勢を立て直す。まさか前から来たのに後ろから攻撃を食らうとは思わなかった悟空はそのスピードに戦慄した。

「や、野郎っ！」

クリリンがラディッツの後ろ姿を隙と見て飛びかかる。意識も悟空に向いているだろうし、大丈夫だと思つた。

だが、甘い。

突如現れた謎の攻撃により、クリリンは弾き飛ばされる。

クリリンは何が起きたのか分からないまま、吹っ飛んだ。

「し、尻尾か……！」

天津飯が言い放つ。確かに腕も脚も全く動いてなど無く、代わりに尻尾がゆらゆらと動いているのみ。天津飯も、過去の天下一武道会で悟空に一杯食わされていたのですぐに分かった。

しかしこれでは弱点の尻尾に迂闊に近づく事は出来ない。悟空が隙をつくってくれるのを待つしかないのが、悔しい所であった。

「ほう、よく耐えたカカロットよ。これから少しずつパワーを上げていくぞ」

なんと、これが最大のパワーでなかったのだ。今のパワーでも限界に近いというのに、更にその上があると言う。現にクリリンは弾き飛ばされてから、まだ立ち上がれて

いない。

これがサイヤ人、これが戦闘民族か。まるで次元が違う、違い過ぎる。

「ちよつとタンマ」

皆の絶望の色が濃くなった中、軽い声でそんな台詞を言ったのは悟空だった。だがこれは本当の戦いである。天下一武道会とは違い、ルール無用の戦場。人生にゲームデータのセーブが無いように、この場でのタイムコールなど何の意味もなさないはずなのだが。

「なんだカカロット、まさか休憩などではあるまい」

「いや、汗でベトベトだから服を脱ぎてえんだけどさあ」

ラディッツはこの言葉を聞き取ってくれたようだ。さつき四星球を返したこともあり、彼は意外と正々堂々と戦ってくれる紳士的な戦士なのかもしれない。

それはまあ兎も角として、ラディッツはまさかの答えに啞然とした。こんな時に着替えたいと言い出したのだ。この戦場では何とも場違いな台詞であり、もしこれを真面目に言っているのだとしたら緊張感がなさ過ぎると言わざるを得ない。

「真面目に言っているのか？ 本当に戦いに来ているのかお前は」

「オラ真面目に言ってるぞ」

「……」

ラディッツは何とも言えない表情で悟空を見る。悟空の顔は真剣そのものだった。暫くして「さっさとしろ」とだけ言ってくる。恐らく色々と諦めたのだろう、ラディツ

ツはその場に座り込んでしまった。

悟空は相手の気持ちなどいざ知らず、早速自分の作業に取り掛かる。

「流石じゃな」

「？ 何がですか武天老師様？」

いきなりの発言にいつの間にか立ち上がっていたクリリンが問いかける。

「わしらが彼奴の気に呑まれていることを知って、悟空はあんな芝居を打つたのじゃ。芝居自体はヒヤヒヤしたが結果的に皆の緊張や恐怖も取り除かれたじゃろ？ あんな

機転は中々出せんもんじゃ。それに今悟空が脱いでいる物は……」

「そこまで言って天津飯は気付く。」

「そうか！ 重りを外す為に！」

その一言に、皆もハッと顔を合わせる。

「そうじゃ。悟空のことだから、どこまで自分が通用するか試してみたかったのじゃろう。いかにもあいづらいわい。悟空にとつてはこの世の中の事は大した事ではないのじゃろう」

「こ、今回は本当にやばい感じなんですけどね……」

クリリンが苦笑する。それは他の戦士も同じであり、今回は世界征服などではなく人類滅亡の危機なのだ。

絶対に勝てる自信があるのなら話は別だが、あの悟空でさえ仲間の助けを借りたと言った相手。出来るものなら危険な賭けなどしたくない。

急いで道着を脱いでいる悟空を見て、そう思うのだった。

~~~~~

数分後、重りを脱ぎ終えた悟空。

その姿を見てラディッツは立ち上がる。すると、悟空はラディッツだけに聞こえる声

で言い放つ。

「本当はこれを脱ぐのはもつと後になると思ったんだ。けどおめえがあまりにも強ええから、今脱ぐことにした」

「ほう、まだお前には余裕があつたということか？　ホラを吹くのもいい加減にしろ」
「なら見せてやるぞ！」

悟空がラディッツに向かって走り出す。そのスピードは雷よりも速く、油断したラディッツの間合いまで一気に距離を詰めた。流石のラディッツもこれには驚き、防御の姿勢を取る。

悟空の回し蹴り。それは綺麗な弧を描き、ラディッツの腕を叩いた。

その瞬間、爆風が起きる。一発で起きる威力にしては、今までの悟空より一味も二味も違っていた。

ラディッツはそれを弾き、左目の機械の数値を見る。そして、初めてこの闘いにおいて驚きを露わにするのだった。

「戦闘能力、1210……だと？」

だが驚いている時間もない。ラディッツは自分の方から悟空に突っ込んでいく。悟空も負けじと前に出て、一対一の攻防となった。

突きが、蹴りが、互いの身体に刺さり、めり込み、叩きつけられる。

やや悟空が不利ではあったが白兵の打ち合いはほぼ互角。それはラディッツが悟空の突然の強化に困惑しているのも幸いしてのことだった。

暫く打ち合いが続き、このままでは不利と判断した悟空は強引に打ち合いを解き、後ろに下がる。そこにいたのは天津飯だった。

「太陽拳ッー」

眩い光がラディッツの視界を潰し、選手交代。クリリンとヤムチャがかめはめ波を撃ち込む。

だが流石は戦闘民族か。咄嗟に身を守り、自分の身体に当たる瞬間を狙い相手の方向に打ち返した。

「マジかよッ？」

通用しない事は分かっていた。だがまさか寸分狂わず自分の方向に向かって弾き返すとは思わなかったクリリン達は驚きを隠せなかった。

不運にもこれを食らってしまう。

ラディッツは上空へと飛び、左目の機械の音を頼りにエネルギー弾を撃ち込む。

「皆回避しろお!!」

悟空は兎も角、他のメンバーではこの一発に当たただけで即死だ。

その攻撃はラディッツの視界が回復するまで続き、平地だった所が空爆された後のように穴だらけになる。

「クソッ、あんな技を持っていたとは……」

視界が戻りかける、その瞬間を見計らってか誰かが攻撃を仕掛けた。

「かめはめ波じゃあ!!」

正体は亀仙人であった。その姿は老人とは思えないような筋肉質の身体となっており、撃ち出されたかめはめ波は先ほどの二人のかめはめ波よりも数段速く、そして太かった。

不意を突かれたラディッツは避けることも出来ずに真正面に食らう。しかし戦闘力差があり過ぎるあまり、身体へのダメージは無い。……身体は。

亀仙人が狙ったのは機械の方だった。その気になれば月さえ破壊できるそれは、機械を破壊するのに十分なものであり、ラディッツは悔しそうに声を唸らせる。

「(このじじいがあ!!)」

先ほどより大きいエネルギー弾を亀仙人目掛けて放つ。

亀仙人は反動が来たのか動いていなかったが、ギリギリの所で悟空に救出された。無傷とはいかないが、何とか無事のようなのだ。

ラディッツは二撃目を放とうとしたが、それは思わぬ攻撃に阻止される。

「気功砲!!」

ラディッツよりも上空から撃ち出された天津飯の決死の攻撃は、見事ラディッツを地面へと撃ち落としした。

悟空が溜め込んだかめはめ波を撃ち出す。それは一直線にラディッツへと向かっていった。

「舐めるなッ!」

ラディッツは素手でそれを抑え込み、消滅させた。これを見た悟空は、「な、なんて奴だ……まだあんな余裕があるなんて」と驚愕する。

「今度は俺がプレゼントしてやるッ!」

ラディッツはバチバチと掌に気を溜め、瞬時に撃ち出した。

悟空は避けること叶わずに真面に食らい、動けなくなってしまう。勿論ラディッツがこの隙を逃す訳がなかった。

近くにいた天津飯や亀仙人は動けない。万事休すか、と思ったその時。

「な、なんだ……力が、入らな……」

悟空に攻撃が当たる直前、ラディッツが止まる。

なんと！ 餃子が尻尾を掴んでいたのだ。更に餃子の超能力で、金縛りの状態となり動くことが出来ない。絶好のチャンスだ。

「よっしやあああッ!!」

悟空が立ち上がり、ラディッツ目掛けて突進する。ラディッツの予想以上の攻撃にロボロであったが、ラディッツに通用するのは悟空しかない。

ここぞとばかりに悟空は連撃を見舞う。

スタートダッシュからのボディブローが綺麗に決まると次は蹴りの嵐。やがて突きと蹴りが入り混じるコンボへと移行する。

ラディッツの鎧のような服に穴が開き、ひびが入る。

悟空の決死の猛攻。勝負はついたと思った。

だが、ここでもささかの展開だった。

「兄を舐めるなよカカロット」

ラディッツが餃子を振り払い、悟空の腹に蹴りを決める。既にポロボロだった悟空はそのまま吹っ飛んでいき、空中に千切れた道着が舞った。

「ここまで成長しているとは思わなかったぞカカロット。だがこの勝負、俺の勝ちのよう……」

「まだまだぜ、悟空のお兄さんよ」

重ねるように言い放ったのはヤムチャだった。先程自分のかめはめ波を返されポロボロになっていたが、絞り出すように自分が編み出した技を使う。

「繰気弾！」

一つの気弾がラディッツを襲う。それは一回当たただけでは消えず、何度も何度も殴り付けるようにぶつかっていく。

だがそれは一絞りの力。徐々に小さくなっていき、消えていく。だが、それで十分。十分気は逸らせた。ヤムチャは叫ぶ。

「今だ〜ッ!!」

ラディッツはヤムチャの向いた方向を向く。そこには、ポロボロになった悟空とこれまたポロボロになったクリリンが、かめはめ波の姿勢を取っていた所だった。

「波————ツツツ!!」

二人のかめはめ波が重なり、大きなかめはめ波となる。最早ラディッツは避けられない。が、諦める選択もなかった。

ラディッツの両手から撃ち出されたエネルギー波は悟空達のかめはめ波に衝突し、競り合った。最後の力を振り絞り、エネルギー波が互いを食い合う中、ラディッツは言っ

た。

「カカロットよ、強くなったなあ」

悟空達のかめはめ波がラディッツのエネルギー波を呑み込み、ラディッツを光が包んだ。

更なる絶望、そして困惑

ラディッツと悟空達の戦いが終わったその頃、遙か彼方の宇宙では――

「ラディッツめ、スカウターが破壊されたところを見ると殺されおったか」

「情け無い奴だ、まったたく。たかが戦闘力10000ちよつとの奴らなんか、殺されるなんてな」

そう言い放つたのは屈強な男達。片方は髪のない、ラディッツよりも更に大柄な男。もう一方は、小柄ではあったが異様な気を身に纏う得体の知れない男だった。

大柄な男が口を開く。

「どうする？ この星を後回しにしていきますか？」

大柄な男の言葉が低く響く。

その男の問いにもう一方の男は。

「一つ、気になった事がある。願いを叶える球とかなんとか……」

「それは地球人の出まかせでしょう」

「いや、分からんぞ？ 思い出してみろ。ラディッツが最初に会った人物を」

大柄な男はその言葉を聞き、少し考える様に俯くと何かに気付いた様子でいきなりハッと顔を上げる。

「成る程、ナメック星人か……」

「そうだ。そしてあの地球人の慌てる様な声、これは何かあるかも知れんぞ？」

男はニタリと笑う。

「それで、もし願いが叶うとすればどんな願いを？ まさかラディッツを生き返らせるんですか？！」

「冗談言うな、あんな役に立たん奴はもう要らん」

その言葉に大柄な男は不思議そうに首を傾げ、「では何を？」と付け加える。それを聞いた男は不敵に笑い、こう返した。

「俺達がこのまま歳も取らず、永遠の命を。てのはどうだ？」

それは不老不死の願い。生きとし生ける全ての生き物を否定する願いだった。聞けば世の若き女性や野心家の多くがそれを求めるだろうが、そんなに簡単な話では無いのだ。永遠に死なないサイヤ人、最早人間ではなく恐るべき怪物になってしまう。

だがそれを知ってか知らずか、

「そうすれば永久に戦闘を楽しめるぞ」

などと言ってしまうのだ。

大柄な男もそれを聞き「成る程、そりあいいい！」と言い、卑下た笑い声と笑みを浮かべる。

それはまるで悪魔の笑い声。遙か彼方の地球まで響く様な、低い声を上げたのだ。た。

「ところで、ラディッツが生きていた場合はどうするんです？」
「構わん、負けて生きているならばサイヤ人の恥だ。殺せ」

~~~~~

ラディッツは弱かった。

サイヤ人は生まれつきの戦闘力で地位を決められる。サイヤ人にとって、強さこそ正義。強さこそが全てであった。

バーダックと言う、下級戦士のサイヤ人の息子であるラディッツは、やはり下級戦士であった。しかし、その父親のバーダックは何度も死線を潜り抜け、一部のエリートを越す戦闘力を身に付けていた。その強さは噂になり、ラディッツも父親の様な戦士にな

りたいたと思った。

だが、現実是非情である。

他のサイヤ人からはその戦闘力の低さに笑われ、”弱虫ラディッツ”と呼ばれ続けた。

サイヤ人にとって、弱さとは罪である。だからこそ文句も言えないのだが、それが辛かった。

ならば強くなればいい。そう思い、必死に戦ってきた。

戦って、戦って、戦い続けて。

だが余りにも父の背中が遠かった。

もう、諦めようかとも思った。越えることの出来ない壁は、ラディッツを立ち止まらせてしまう。

これ以上は強くなれない、と諦めてしまった。

「俺は……サイヤ人失格だな……」

「バカヤロウが……それでもオレのガキか」

聞き覚えのある声がラディッツの耳に響いた。ラディッツはハッと顔を上げ、声のした方向を向いた。

そして目にしたものは、今まで目指してきた親父の後ろ姿。驚きの余り、言葉を失ってしまった。

ラディッツは手を伸ばし、しかし届かない。どんなに伸ばしても、更にその背中が遠くに行く。どこまでも遠く、小さくなっていく。

ラディッツは叫んだ。自分に気付いてもらえるように。手が届くように――

~~~~~

「――親父ッ」

「おお？ オラはおめえの弟じゃなかったっけ？」

ラディッツは目を覚ました。どうやらさっきのは夢だったようで悟空の、弟のカカロットの顔が父親と重なって見えた。

悟空はラディッツが目覚めたことを確認すると、仲間にも報告するのか一旦部屋を出た。

数秒が経ち、やっとラディッツは自分の現状を把握する。恐らく、この部屋は最初に悟空を見つけた時の家だろう。少なくとも拷問部屋ではない。身体は縄みたいなものに拘束されており、幾ら力を入れても千切れないところを見ると、どうやらかなり弱っているようだ。

「そうか……俺は負けたのか」

多勢に無勢とは言わない。これでも命令を受けた時は、惑星の連中の殆どを相手取った事もあったからだ。

暫くすると、悟空とその仲間が部屋の中に入ってくる。

「……何故俺を殺さなかった？」

「お前を生かしたのは、これから先の出来事とお前らの情報を得る為だ。答えてもらうぞ」

「オラはもつとオラの小さい頃とかを教えてもらおう為だ」

天津飯と悟空の二人が言う。因みに悟空達は生かそうと思つて生かしたのでは無い。悟空とクリリンのかめはめ波を受けても辛うじて耐えたラディッツには衝撃を受けたものだ。しかしその後力尽き、倒れたのでどうにか、といった形で今の状態に出来た。ラディッツは少し黙つた後、ゆっくりと口を開く。

「これを知ればきつと後悔する事だろう。それでもいいならば教えてやるが」

「ああ、頼む」

受け答えをしたのは悟空。他のメンバーは皆真剣な表情で固まっている。

「俺の仲間であるサイヤ人はお前を含めてもたつたの四人しかいない。恐らくは俺が死んだと思つてこの地球に来るだろう」

サイヤ人が二人。一人でもこんなに苦戦を強いられたというのに、二人だとなつてしまうのか、と思うと皆身体が震える。

そして、

「その残ったサイヤ人は、俺よりも戦闘力が遥かに上だ」

皆は絶句した。

この次元を遥かに上回る相手がこの地球に来るのだと言う。ヤムチャが焦った声で叫んだ。

「そいつらが来るまでの時間は!？」

「遅くとも一年後だ」

一年。たったそれだけの時間で奴等はこの地球に来る、その事実には悟空も、

「へへ、流石にオラも、今度ばかりはワクワクしねえや……」
と呟くのみ。

あの悟空がそう言うのだ。他のメンバーも顔を真つ青にし、絶望している。突然、ヤムチャが又焦ったように皆に話し出した。

「そ、そのサイヤ人とこいつが組んだらヤバくないか!？」

「あ、ああ。ここであるべく危険性を減らしておくに越した事はない……」

天津飯もヤムチャの意見に同意した。何故なら、ラディッツの息の根を止めるのは今しかない。今回はどうにか勝てたが、次に勝てるかどうかは分からないからだ。

「無駄な事は止めろ」

ラディッツが言った。

クリリンが「どう言う事だ!？」と疑問をぶつける。

「もし俺が生きていると知れば、奴等は俺を殺しにかかるだろう。……負けたサイヤ人

は死んでも同然、一切の容赦も無いだろうな」

余りにも理不尽。いや、これがサイヤ人の鉄則なのか。

「これで十分だろう……殺せッ！ 一年間このまま無様に生き続けるよりは、今ここで死んだ方がマシだ！」

死を受け入れた、それなのになんという迫力か。余りの迫力に、皆はたじろぐ。

だが、悟空は違った。

「おめえは殺さねえ。そんなことしたら、オラの過去とか聞けなくなっちゃうかんなく」

その言葉に、ラディッツの迫力あった顔が固まった。そんな事は、御構い無しに「それによ」と続ける。

「サイヤ人としてのおめえは死んじまったんだろ？ なら死ななくても大丈夫じゃねえか」

悟空の言ったことは屁理屈であった。

当然それを聞いてハイそうですかと納得するほど、ラディッツも馬鹿では無い。

「何を馬鹿な……、そもそも俺は下級戦士なのだ！ あのと二人に勝てる訳が無いッ!!」
「なら、強くなれば良いんじゃないやねえか？」

なんて簡単に言ってくれるのだろうか。しかし、奇しくも、昔の自分が持っていた考えと同じ思いであった。

次の悟空の言葉にラディッツは揺れる。

「オラだつてずっと負けてばっかだよ。オラもサイヤ人なら、既に死んでらあ。それによお、一人で無理ならオラ達と一緒に修行すればいいじゃないやねえか」

もう、駄目だった。

先程見た夢を筆頭に、ラディッツの感情は不安定であり、揺れに揺れていた。辛かったのだ。弱い自分が。

そして、弟からのこの言葉。最早誇り高いサイヤ人の幻想は崩れ去り、溜め込んで来た物を吐き出すかのように大声で、笑った。

悟空達はいきなりの事に驚き、身構えたが。

「全く、こつちに來てからというものカカロットには調子を崩されっぱなしだなあ。……いいだろう。お前の口車に乗ってやろう、俺は負けた身だからな」

ラディッツの迫力ある気はいつの間にか消え去っていた。

これでサイヤ人と戦う際に敵になることはないだろう。むしろ、その二人のサイヤ人と対立し、こちらの仲間のような存在になるかもしれない。ここまで強かった存在だ、途轍とてつもない戦力になるだろう。

悟空達も構えを解き、安心した様な顔付きになる。

と、ここで頭の中に突然声が響いてきた。

『話は聞かせてもらった。悟空よ、皆を宮殿に連れて来るがよい』

「お？ 神様かあ!？」

なんと、この声は神様の声であるという。

悟空達はあの天下一武道会の一件により知っていたが、頭に直接伝わる声に動揺している様子。ラディッツの方は辺りをキョロキョロと見回す位には困惑していた。

しかし今度は、悟空の放った一言に全員が驚くことになる。

「みんな、オラと一緒に神様の宮殿に行くぞおっ!!」

修行の始まり

悟空の発言により、神様の宮殿に行く事になった地球の戦士達とラディッツ。

しかしその道中は過酷なもので、特にカリン塔と神様の宮殿を繋ぐ如意棒の道のりでは、皆雷に打たれながら何とか到着するのであった。

因みにカリン塔で仙豆を齧っていたヤジロベエも半分無理矢理で連れて来た。

宮殿に辿り着き、そこで出迎えたのは神様とミスターポポ、そして意外にも占いババであった。

「ね、姉ちゃん!？」

「久しぶりじゃな。しかし相変わらずスケベな顔しとるのう」

「ほっとけ!」

亀仙人との再会に、辛辣なことを言う占いババ。

それはともかくとして、神様がこの宮殿に下界の人間を呼び寄せるのは前例がない事だった。二代に続いて神に仕えたミスターポポも、悟空が初めて来た時に「ここに来た

人間初めて」と言っていたので、かなり珍しい事なのだろう。

全員が集まった事を確認すると、神様は言った。

「よく来た。さて、では孫悟空とその兄よ。こちらに来るがいい。ミスターポポ、後は任せたぞ」

ポポは「はい」とだけ返事をし、戦士達の方を向く。

悟空とラディッツは言われるがままに神様に付いて行き、占いババもその後を追う。

悟空等が行ってしまい、暫く時間が経った後、クリリンが口を開いた。

「あのく……、俺達はどうしたら?」

「お前等、ミスターポポと試合する。勝ったら神様の修行受けられる」

神様の修行。その言葉に、ヤジロベエ以外の皆が驚いた。悟空があそこまで強くなつた修行を、勝てば受けられるのだと言う。

皆が歓喜する中、亀仙人はミスターポポに質問する。

「悟空とその兄はどこへ行ったのですかな？ 出来ればその理由も」

「神様達、あの世に行った」

「あの世っ!?」と、皆が先程の歓喜も忘れて反応する。死に行った、という訳では無いだろうが、そんな言葉を聞いたら誰だって困惑する。皆が騒ぎ立てると、

「お前等せつかち。話は最後まで聞く」

どうやら続きがあるらしい。

そう言えばそうだ。亀仙人だって理由を尋ねたし、皆早とちりしたのだ。落ち着きを取り戻すと、ポポは続きを話し出した。

「悟空とその兄、強い。神様の修行では足りない。だからあの世で界王様という偉い方に修行受けに行く」

どうやら神様の修行よりもっと凄い修行を受けに行くらしい。皆は納得し、そして疑問に思った。

「ならば何故俺達も連れて行かなかったのですか？ 一年後の戦いの為、更に強い戦力が必要ならばそれが一番なはず」

どんな厳しい修行にも耐えてみせる、そう言わんばかりの面構えで天津飯は尋ねた。

「そんなの簡単。お前等弱い。だから無理」

単純明快。しかしそれは残酷な言葉だった。最早訪ねる訪ねないに関係なく、会うことすら出来ない立場にあるらしい。

勿論それを聞いて黙っている彼等では無い。悟空やラディッツには及ばないものの、天下一武道会ではそれなりの実績を残し、この地球でも屈指の武闘家だと自負している。

それを思った一人であるヤムチャが、ポポに物申す。

「それは聞き捨てならねえな。俺だつて借り物の身体とはいえ、神様に一発与えてるんだ。舐めてもらつちや困るぜ」

「ならばミスターポポに勝つて証明する。出来たら行けるかもしれない」

ポポは「いつでも来い」と言う。

ならばお言葉に甘えて、と言わんばかりにヤムチャは飛びかかった。

その構えはヤムチャの代名詞、狼牙風風拳だ。それは悟空をして疾いと言わしめた技であり、ポポに無数の打撃を浴びせる筈だった。

だがそれは空を切り、逆にカウンターを受け、ヤムチャは気絶してしまった。

余りにも早い決着に、皆は茫然とした。

「次の奴、来い」

この後めちやくちや負けまくった。

くくくく

神様に連れられ、悟空とラディッツが来たのは閻魔大王の目の前であった。

ここに来る前にラディッツが「また別のナメック星人か……」と言い、「やはり私はナメック星人なのか……」という会話があったのは省略する。

今、神様が閻魔大王に長々と話しているが、どうやら何かの許可を得ようとしているらしい。

「———と云う訳で修行させたく、生身のままで伺った訳です。どうか閻魔大王様、界王様の下へ伺う事をお許し下さいませ」

その言葉に、閻魔大王は唸る。

「ううむ、孫悟空とその兄、ラディッツか……。孫悟空の実績は素晴らしいが、兄の方がなあ……」

ラディッツは確かに昔、多くの惑星に住む生物を襲い、殺してきた。当然それは死んだら地獄行き待った無しの罪である。閻魔大王はそれを案じて悩んでいるのだろう。

閻魔大王が悩む。その長さに遂にラディッツも我慢出来なくなり、力尽くで界王の居場所を突き止めようとした。

だが、

「大人しくしている。このまま地獄行きにして欲しいか」

と言い、たった数分でラディッツを取り押さえてしまう。それを見た悟空は、

「へえ、あの兄ちゃんをいとも簡単に取り押さえるなんて凄えなあ。オラ閻魔大王様に修行つけて貰おうかなあ……」

と感心していた。もつとも神様はその余りの無礼さに「敬語で話せ」と焦っていたが。閻魔大王は純粹に凄いと言われ悪い気がしなかったのか、照れているようにも見えた。

神様は続けて「界王様の方が凄い」と内緒話の様に悟空に言ったが、それを閻魔大王

に聞かれてしまう。

「ほお……、地球の神よ。ラディッツと一緒に地獄行きにしてやろうか？」

ギクツと飛び跳ねたのは神。

その後センスの無いギャグで誤魔化そうとしたが、余りのセンスの無さに茫然とされてしまった。

そして閻魔大王は何か諦めた様子で、

「よかろう。そんなに行きたければ行くがいい。だが、蛇の道から落ちても、わしやあ知らんからな」

「あ、ありがとうございます！」

閻魔大王の許しを得て、悟空とラディッツは占いババに連れられ蛇の道の出发点、蛇の頭に連れられていく。

神はただ、悟空達と地球の未来を祈るのみだった。

~~~~~

かくして、悟空とラディッツは蛇の頭に到着した。

「ここが蛇の道じゃ。界王様はこの先におられる」

「長えなあ〜」

それはどこまでも続く一本道。道の先は雲に隠れ、見えない。

二人は早速走り出そうとすると、

「おっと、言うのを忘れとった。雲の下には落ちるなよ。そこから下は地獄じゃ、落ちたら二度と戻れはせん」

占いババからの遅い忠告。

悟空が立ち止まり、答える。

「この蛇の道でどのくれえの長さなんだ？」

「詳しい事は分からんが、噂によれば、およそ100万kmだったかのう？」  
「ひゃ、100万!? 辿り着いた奴いんのか？」

「確か、閻魔大王様が一人くらいだと言っておった」

あまりの長さに悟空は驚いたが、到達した人物がいるならば行けるか、と楽観的に考えた。

要するに、この蛇の道から落ちずに辿り着けばいいのだから。

「それっ、舞空術」

「ほう、カカロットの所では飛ぶのに名称があるのか」

飛んで行ってしまえばいいのだ。

呑気な話をしながら、悟空とラディッツは瞬間に飛んで行った。

そのあまりの速さに、暫くはポカーンとしていた占いババなのであった。

~~~~~

何日が経過したのだろうか。

一週間、いや一カ月かもしれない。それほどの長き間、悟空を除いた地球の戦士達はポポとの試合に明け暮れていた。

しかし、一人としてポポに打ち勝つ事は出来ずにいた。

天津飯が四人に増え、同時にかかっても避けられ。

餃子の超能力も当たらなければどうと言う事はなく。

クリリンはかめはめ波を放つがポポに食われ。

亀仙人の深い読みも疾さに負け。

ヤジロベエの不真面目さにポポは頭を殴り。

ヤムチャは練気弾で狙い撃ちするも、遊ばれ、拳げ句の果てに自分に当たる様に誘導されてしまった。

最初はどうにかいけるだろうと思っていたが、今ではどう勝つかも分からない始末。意気消沈した彼等を見て、ポポは言った。

「みんなダメ、無駄な動きが多い。だからミスターポポに当たらない」

心を無にする、とポポは言っていた。

だが、意識してどうこうするものでも無い。オマケに空気も薄いので、疲れも倍増だった。

ポポは更に言う。

「お前達は目だけでモノを見ようとすることから、ポポの動き読めない。物の気配や微かな空気の動き、そして勘。見るだけではなく、感じるんだ。コレ凄く大切なこと」

一心不乱に技術を上げてきた彼等も、これは盲点だっただろう。運動神経も動体視力も関係なく、無我の境地。悟空もこれに至った。ならば超えなければいけない。

沸々と闘志を燃やし、クリリンを筆頭に立ち上がる。

弱音なんか吐いていられない。サイヤ人はすぐそこまで迫っているのだ。いつまでも悟空に任せ切りののが可笑しいのだ。自分達がやらないで誰がやるのだ。

それを見て、ポポは言った。

「お前達、いい顔になった。でもそれが分からなければミスターポポに勝てない」

だからどうした。ならば証明してみせよう。何度倒されても諦めない心で。かくして、全員の修行が始まった。その結果がどうなるのか、それは誰にも分からな
い。

サイヤ人が地球に到着するまでの時間は、刻一刻と迫っていた。

予期せぬこと

悟空とラディッツが界王様のいる場所を目指して二カ月が経ち、やっとの事で最後の方まで辿り着くことが出来た。

しかし、界王様が見当たらない。どうしたものかと上を見上げると。

「おいカカロット、あれがそうじゃないか？」

「おお？」

小さな星が見えた。ずうつとそれを見ると、なんだか星に引つ張られる様な……いや、引つ張られている。

流されるがままに、悟空とラディッツはその星に引き寄せられた。

悟空は地べたにめり込み、ラディッツは普通に着地する。この差は一体なんだろうか。

「な、何だか身体がすげえ重いぞ……」

「恐らくは重力の大きい星なのだろう」

悟空はそのあまりの重さに膝を突くが、ラディッツは平然としていた。

と、その時何者が姿を現した。界王様か？ それにしては随分と野生的で、というか猿の様な姿をしていた。

そいつは二人を見ると、不思議な踊りをしながら移動する。

「へえあれが界王様かあ。ああ見えて凄えんだらうなあ」

「本当にそうか？」

悟空は挨拶をし、あれが修行の一つだと自己解釈する。ラディッツは「違うと思うぞ」と言うのだが、悟空はその不思議な踊りを真似し、確かにキツイので界王様(?)の後ろに付いて行っただ。

ラディッツは、そんな姿の弟を冷やかな目で見ていた。

「なくにをやっつてんだ、お前」

そして響くのは、本物の界王様の声だった。

「あ、あれ？　じゃああいつは？」

「ああ、あれはな〜ペットのバブルス君だ」

陽気な声で説明してくれた界王様。

ラディッツもホッと安心した様な顔になっていた。

この後、界王様の自己紹介で一悶着あったが、修行を受ける為にはギャグの天才である界王様をギャグで笑わせなければ受ける事が出来ないらしい。

最初は悟空の番なのだが、

「布団が、吹っ飛んだ！」

勢いに任せて言い切る。これは酷い。この間の神様と同レベルだ。

だが意外にもツボにハマったらしく、口元を手で押さえる界王様が目に映った。

「猫があ、寝転んだっ！」

最早ゴリ押しである。

その後、ゴリ押しに次ぐゴリ押しで笑ってもらったので見事修行をしてもらえる事となった。

……因みにラディッツのギャグは「父さんは通さんツ!!」だった。

さて、界王様の下で修行が始まったのだが、界王様が地球から来たという事実を聞き、まずはこの重力に慣れる事から始めると言った。

その方法とは……。

「このバブルス君を捕まえる様になるまでは、ワシの修行は教えてやれんなく」

とのこと。

ラディッツは元々惑星ベジータの重力で慣れているのだが、悟空は初めてだ。この重力を克服する為にも、この遊びみたいな修行が必要なのだろう。やはり、と言うべきか悟空はバブルス君に翻弄され続けた。

「クソオ……よし、見てろよ」

悟空は重りを脱ぎ、身軽になったと思つたら瞬く間にバブルス君を捕まえてみせた。

界王様は啞然とし「な、中々のもんじゃ」と評価した。だが、重りを脱いだ所を見ていたので、今度は重りを着てバブルス君を捕まえてみせろと言い出す。なんでもそちらの方が効果的とか。

そして、数時間後。

「も、もう駄目だ……腹減った……」

悟空が空腹により倒れたのだった。

悟空が食事を取っている間（界王様からぶん取った）、ラディッツがバブルス君を捕まえる事になったが、重りを脱いだ悟空と一緒に見事捕まえてみせた。

界王様はまたもや啞然とし、悟空は流石だと褒め称える。

そんなこんなで修行は続くのだった。

くくくく

数ヶ月が経ち、地球。

不滅の闘志と不屈の精神が彼等を鍛え上げ、見事ミスターポポに勝利する事が出来た。

そして、神様の修行。それは過酷なものであり、辛くて弱音を吐き出そうかとも思っただが、皆己を省みず鍛え続けた。悟空が着たのと同じ重装備をつけ、今まで以上の動きをしてみせる。

自分の身は自分で守れる様になる為に。

かつてライバルと言わしめたあいつに差を広げられない様に。

自分が護りたいと思つたモノを護る為に。

彼等は今、互いに組手をしていた。その顔に余裕の笑顔は無い。少しでも先に進みたい、自分の壁を乗り越えたいという思いが彼等の甘さを消す。

真面目に修行内容をこなす、では駄目なのだ。それ以上を、もつとその上を。

「辞めッ！」

神様の合図で鬨気に溢れた動きがピタリと止まり、神様の方を向く。

神様はそれを確認すると、頷きポポを呼び寄せ答えた。

「お主達はとうに私を超えてしまった。私やミスターポポが教えることは最早何も無い。運命の対決の時までは地上に降り、各々の技を磨くが良い」

その言葉に皆は決心した表情だ。

神様もそれに答える様に。

「未来を頼んだぞ」

皆は返事を返し、その場から地上に降り立った。だがヤジロベエは。

「この重たあゝシャツ、脱いでもええだべか？」

「……好きにするが良い」

こいつだけは中々締まらないものだった。

~~~~~

悟空とラディッツも総仕上げの時。

二人のサイヤ人が来るまで後僅かとなったが、焦っても意味が無いということで、今は休憩の時間。

悟空は相変わらず大食らいで、その光景にラディッツは食事の手を止めていた。

「どうだ二人共、調子の方は？」

「おう！ もうバツチリだっ！」

「戦ってみないと分からないからん」

それぞれ返事はバラバラだったが、少なくとも不満を持った感じでは無かった。ふと、悟空が何か思い出したかの様に言い出した。

「そういえば、オラ兄ちゃんからサイヤ人としてのオラの話聞いてねえぞ」

「ああ、言い出しにくいことは言わないのだ、俺は」

「ならばワシが教えてやろうか？」

その一件に、界王様が植物にじょうろで水をやりながら割り込む。

「知ってんのか界王様？」

その無礼な言葉にグレゴリーは注意しようとするも、界王様がそれを止める。

「孫悟空よ。そちらのラディッツもそうだが、お前達もサイヤ人だったな」

その発言に、途中から参加したグレゴリーは面食らった。その時には悟空達が、自身

をサイヤ人と告白した後なので聞きそびれたのだ。

界王様は自身の知っているサイヤ人の情報を、歴史を語り出した。

かつて、惑星ベジータにはツフル人とサイヤ人が存在した。ツフル人は多く、体は小さいが高度な科学力を持ち、サイヤ人は数は少なかったが大きな身体を持っていた。サイヤ人は強靱な肉体でツフル人を侵略し始め、その技術を取り入れながらツフル人の数をどんどん減らしていったという。やがて全てのツフル人が死に絶えた時、戦いの視野を外宇宙にまで広げた。そこからは以前ラディッツが言った内容と同じようだ。

しかし、それに反論したのはラディッツだった。

「俺達の祖先が侵略だと？ 笑わせるな、俺達サイヤ人は奴隷として扱われていたから反抗したという歴史が真実だ」

サイヤ人として死んでも、誇りは捨てきれていなかったラディッツは余程自分の誇りを信じ続けたのだろう。

その様子に、何か暗い所も見えた気がした。

「とにかく、オラは地球を守んなきゃならねえ。早く飯食って修行しなくちゃな」

悟空は持っている丼の中身をかきこむと、修行の為に立ち上がる。

と、その時界王様の顔が変わった。

真剣な顔付きになり、ラディッツに尋ねる。

「ラディッツよ。お前は確か約一年後にその二人のサイヤ人が来ると言ったな」

「ああ、確かにそう言ったな」

「どういう訳か、予定よりも三カ月早く地球に来そうだぞ？」

「何だと!？」

界王様は触角のようなモノをピコピコと動かし答える。

三カ月といえば地球に来るのは明後日になる。このまま間に合わなければ、地球は終わりだ。

何故ラディッツの予想が外れたのか。

「……成る程、新型のポッドに乗ってやがるなクソツタレ」

なんと、新型のポッドでスピードが上がっているという。

界王様も序盤のスピードで測っていたため、それでは分からない訳だ。

とにかくこのままでは不味い。急いで地球に戻るよう悟空が界王様に頼むが、

「か、界王様ならオラ達のこと下界まで、ビュンて飛ばせんじゃねえの!？」

界王様は焦りながら首を横に振る。

その言葉に悟空はますます焦り、ラディッツを連れてさっさと地球に戻ろうとした時、界王様が悟空を呼び止める。

「良いな、元氣玉は一発までなら許可する。でない地球も破壊してしまいかねん」「うん、分かった。色々ありがとう界王様!」

「カカロットよ、俺は少し遅れる。先に行つてろ」

ラディッツが言った言葉に悟空は疑問を持つのだが、今はそんな時間も惜しい。

分かったと一言だけ残し、猛スピードで蛇の道に戻り出すのだった。  
そして、

「界王様よお、話がある」

ラディッツが界王様に声をかけた。

サイヤ人襲来まで、後二日。

## サイヤ人襲来 恐るべしサイバイマン!

地球に、かつてない恐怖が訪れようとしていた。

——東の都にて。

住民たちはいつもの通りに生活をしていた。車のクラクションが鳴り、人の声が騒がしい。

そこに、二つの飛来物が近付いていた。

そして、墜落。いや着陸か。

ビルを貫き、車道を破壊してその二つは日が傾き、薄暗くなっていた都に落ちた。

人々は騒ぎ、その飛来物に近寄る。

すると、飛来物の扉が開き、誰かが出て来たではないか。しかも彼等は空中に浮き、ゆつくりと地面に立つ。

人々は更に騒ぎ立てる。

「地球で言つてたな、まあまあな星じゃないか」

まるで品定めする様に見渡していた。  
もう一人の大きい方は、

「ピーピー五月蠅いヒヨコ達に、挨拶してやろうかな」

「加減しろよ」

そう言うと、大型な男は開いた手をゆつくりと上に上げ、上げ切る時に人差し指と中指を揃えて天に向かって突き出した。

クンッ

瞬間、爆発。

東の都を大きな光が覆い、爆風を巻き起こす。その範囲は異常なもので、東の都全てを破壊し、そこは最早見る影もないクレーターと化してしまった。

そしてそれは、地球の戦士達にも伝わった。

「うわあああッ」

「なんだ!?? や、奴等、何をやりやがった!??」

天津飯と餃子が、

「い、一体ツ!」

ヤムチャが、

「桁外れだツ!」

クリリンが、

他の戦士にも伝わり、その爆風は広がっていった。

~~~~~

卑下た笑い声がクレーターとなった東の都跡地に響く。

「ハツハツハツ、ちよつと挨拶が丁寧になり過ぎちまったかな?」

「これぐらいにしとくだなナツパ。あまり派手にやらかすと、この星が高値で売れな

くなるぞ」

「そ、そうかあ」

ふと、ナツパと言われた男が何かを思い出す。

「そういやあ、どんな願いも叶う球も探すんでしたな」

「そうだ。先ずはラディッツを殺した奴等を探し出して吐かせるか」

「そうですねあ」

どうやらナツパという男の方が、立場は下らしい。口振りからしてもそれが伺える。

「だがもしその球がこの近くにあったとしたら、俺達に永遠の命をという願いはパーになるぞ。貴様のくだらん挨拶の所為だ」

「すいません、うっかりその事を忘れてたんで」

「ま、済んだ事だ。取り敢えず戦闘力が一番高い奴を探すんだ。そいつが例のカカロツトか、もしくはラディッツを殺した誰かだからな」

そう言うって左目の機械のスイッチを押す。だが、その時にナツパの顔が曇る。

「妙だ。戦闘力10000を超える反応が、一つや二つじゃあない」

ナツパは首を振り、戦闘力のある所を見て驚く。

「こんな星にどうして？」

「狼狽えるな、所詮俺達の敵では無い。取り敢えず一番の戦闘力を持つ奴を探せ」

ナツパはその言葉を頷き、辺りの戦闘力を見る。

だが「ん？」と唸り、ナツパが男に話しかける。

「どうやら、そいつらはこちらに来るようですぜ」

「フン、手間が省けたな」

男達、いやサイヤ人の二人はニヤリと顔を歪ませて夕暮れの空を見上げるのだった。

~~~~~

サイヤ人の元へ急ぐ地球の戦士達。

誰もかれもがこの時の為に自分を強化して来たのだ。絶対に負ける訳にはいかない。

「餃子っ！ お前はここに残っている！」

「ヤダ！ 僕も行く！ 折角修行したから行く！ 天さんと、一緒に！」

~~~~~

「天津飯達が動き出した！ 俺も早く行かなきゃ！」

~~~~~

「遂に来おったか……」

「どうかしましたか? 亀仙人様?」

~~~~~

「修行の成果を見せる時が来たか……!」

各人がサイヤ人の所へ飛ぶ。

それぞれの思いを胸に。

最初にサイヤ人の所へ到着したのは天津飯と餃子、そしてクリリンだった。

「来た来た、お強そうなのが三匹ッ」

「どうやら俺達のこととは、よくくご存知らしいぜ」

「あ、あいつらがラディッツより上のサイヤ人かッ……! な、なるほど、恐ろしい気を感じてるッ!」

クリリンが震えながら言う。その震えは武者震いか、それとも恐怖によるものなのか。

そのサイヤ人はラディッツと似た戦闘服を着ており、同じく左目にレンズの様な機械を付けていた。

何より証明するのは腰に巻きつけてある尻尾。ラディッツも言った、サイヤ人の特徴である。

「念のために聞くが、ここに一体何の様で来た……?」

天津飯が尋ねる。

すると大柄のサイヤ人、ナツパが答えた。

「一番の目的は願いを叶える球ってやつだ。俺達に大人しく寄越すんだな」
「だが持つてもいないようだし、知ってても教えるもんかって感じだな」

クリリン達が構える。

と、そこへ見たことのある飛空艇が上空に現れた。

そして、一つの影がその他に降り立つ。その正体は、

「お主達がサイヤ人か」

「む、武天老師様！」

クリリンが叫んだ通り、亀仙人が駆けつけたのだった。

だが、サイヤ人達は全く驚く素振りを見せず不敵に笑っていた。

「む？ その爺さんも戦闘力が1000を超えてやがるのか」

「ナツパよ、スカウターを外せ」

「なに？」

「そいつらは戦いに応じて戦闘力を変化させるんだ。こんな数字は当てにならん」

「そういうやあそうでしたねえ。弱虫ラディッツの馬鹿は、スカウターの数字に油断してやられやがった様なもんだったからなあ」

そう言ってスカウターと言われる機械を外し、地面に投げ捨てた。

クリリン達は弱虫ラディッツという言葉に反応して驚愕する。

「悟空の兄を、弱虫扱いだと!?？」

「弱虫ラディッツか、へへ……」

あの時のラディッツは自分達にとって圧倒的存在だった。それを弱虫とは……。

「そうだ、こいつらのお手並みを拝見させて貰おう。おいナツパ、サイバイマンが後六粒ほどあっただろう? 出してやれ」

「ベジータもお遊びが好きだなあ」

どうやら小柄な方のサイヤ人はベジータと言うらしい。

ナツパが懐から小瓶を取り出すと、地面の土を摘み、感触を確認するかの様に擦りながら落とす。

「この土なら良いサイバイマンが育つぜ」

そう言って指で穴をつくり、その中に粒を入れて緑色の液体を流し込むと、地面が盛り上がり薄気味悪い怪物が生まれた。

「標的はあの四人だ。痛めつけてやれ、サイバイマン」

ベジータの声が合図となり、サイバイマンが襲いかかった。

土埃が舞う。いつの間にかメデイアのカメラマンがヘリコプターから撮影しているが、速すぎて個人を映せていなかった。移動した軌跡が飛び交うだけで、何も見えない。ヘリコプターの音に機嫌を悪くしたのか、ナツパがその中の一機を破壊する。それを見た他のヘリコプターは蜘蛛の子を散らす様に逃げていった。

時間にして数秒間。一旦の打ち合いが収まり、再び構えるクリリン達。

「こいつら、中々できるぜ」

「その様だな」

ナツパが「痛めつけてやれッ!」と再度サイバイマンに向かうように言い放った。そのとき、

「ちよつと待った！」

クリリン達が聞き覚えのある声が響いた。その正体はひと吹き風の風と共に姿を現す。

「クリリン、それに皆、遅れてすまない」

「ヤムチャさんっ！」

現れたのは顔に傷をつくり、髪が伸びたヤムチャの姿だった。

ヤムチャは「サイヤ人は二人では無かったのか？」と尋ねると、クリリンが事情を説明し、ヤムチャはサイヤ人の方を向いて構える。

ベジータはその数を数えていた。

「ふむ、五人か。足りんが、まあいいだろう……。どうだ？ 貴様等こちらの兵と一匹ず

つ戦つてみんか？ ゲームだ」

「残りの一匹は？」

「カカロットにでも取つといておけ」

その発言に、クリリンは好都合だと思った。悟空も未だ到着していないこの状況、多対一にならずに済むこのルール、時間稼ぎには丁度良いと思った。

「いいだろう」と名乗りを上げたのは天津飯。かかってきな、と言わんばかりに拳を前で突き合わせた。

「お前からいけ、思いつきりぶつかるんだ」

「さあサイバイマンよ、遠慮せずに叩き潰してやれッ！」

二人の声に、サイバイマンの一匹は不気味な声を上げ、襲いかかった。

天津飯は向かって来るサイバイマンに合わせるように掌を突き出した。すると拳圧がサイバイマンを吹っ飛ばし、更に追い討ちをかけようとする。しかし、サイバイマンは体勢を直すと、頭が割れて謎の液体が噴出した。それは天津飯だけではなく、他の皆にも当たる量。

天津飯はこれ avoidance、皆の方に飛んだ液体は亀仙人が掌で風を起こして身を守る。ヤムチャも過去に受けた、”爽やかな風”だ。

隙を見つけた天津飯は、空中に逃げるサイバイマンに的確に肘をめり込ませダウンを

奪った。そのままサイバイマンの一匹は動けず、この勝負は天津飯の勝ちとなった。

「ば、馬鹿な。サイバイマンの戦闘力は1200だぞ。パワーだけなら、ラディッツに匹敵する！」

ナツパが驚く。それに対し天津飯は、

「そうか？ ラディッツの方が何倍も強く感じたが」

と言い捨てた。

ナツパは悔しがるが、事実だ。ベジータはそれに口出しする。

「奴の戦闘力はそれを超えると言うことだろう。ナツパ、どうやらあいつら少しは楽しませてくれそうだな」

ベジータはそう言うと、倒れたサイバイマンをバラバラにした。

地球の戦士達は驚き、そして納得した。やはりラディッツの言っていた事は本当なの

だと。仲間も仲間と思わない奴等なのだ。

ただ、ナツパは「なんてことを」と驚きを隠せなかったようだが。

「さて、次はどいつだ？」

その言葉にクリリンが前に出ようとしたが、ヤムチャがそれを止める。

何故ならクリリンはすでにドラゴンボールで生き返っているからだ。もしもの事があつた場合、取り返しがつかない。

「俺が出る。ここらでお遊びはいい加減にしろつてところを見せてやるぜ」

ヤムチャが前に出た。

サイバイマン達はナツパに「ハナっから飛ばしていけ」と怒鳴られ、真剣な面構えを取っているように見える。

そして一匹が前に出て、勝負が始まった。

ヤムチャとサイバイマンの打ち合い。最初から本気になったサイバイマンは簡単にはやられなかった。

ヤムチャの拳を見切り、ジャイアントスイングをかますサイバイマン。そのまま隙だらけのヤムチャにトドメを刺そうとしたが、その攻撃はすり抜ける。

それは残像拳であつた。サイバイマンよりも更に上に行き、溜め終わったかめはめ波をぶつけるヤムチャ。

その勢いは凄まじく、地面ごとサイバイマンを押し潰し、動く事は無かつた。

「お前達が思っているほど、その化け物は強くなかつたようだな。他の四匹もこの俺が片付けてやる」

ナツパは「なんだとツ」と反応するが、ベジータは不敵に笑つて、

「どうやら今度は貴様等がサイバイマンを甘く見たようだな」

「気付いた時にはもう遅い。」

死んだと思ったサイバイマンがヤムチャの身体に組み付く。

ヤムチャは「しまった」と言って剥がそうとするが、一向に剥がれる気配がない。すると、サイバイマンの身体が何やら怪しく光り、

ドオオオオン……

爆発した。

そして、爆発の後地には、

何も残っていないかった。

それぞれ変わる事

結論を言おう。

ヤムチャは死んでいなかった。

クリリン達の目に映るのは爆発に巻き込まれた筈のヤムチャの姿と、爆発した後に残る道着の切れ端とサイバイマンと思われる肉片。

ヤムチャはボロボロであったが何とか生きていたようだった。しかし、その姿は傷だらけと言うよりは汗まみれと言う言葉が似合う位には汗だくになっている。

「な、何とか成功したか……」

倒れ伏せながらも、ヤムチャは言う。

とにかく、ヤムチャは生きていたのだ。それは喜ばしい事である。

だがどうしても疑問が残る。

クリリンはそれを聞こうとしてヤムチャに近付き、肩を貸してやる。だが、クリリンが聞く前に、

「テメエ……一体何をしやがったツ！」

ナツパが怒鳴り散らす。

流石のベジータもこれには驚いたようで、興味津々とはいかないものの、ヤムチャの方を見ていた。

もちろん地球の戦士達も何が起きたのか困惑気味だ。ヤムチャはそれを察したのか、あの時何があったのか説明し出した。

くくくく

ヤムチャはピンチだった。まさかまだサイバイマンが生きていて襲ってくるとは思

いもしなかったの、油断した事もあり反応が遅れた。

身体に組み付かれ、身動きが取れない。何とか抜け出そうとするも、サイバイマンは手足をガツチリとホールドしてくる。

突然サイバイマンの気が高まり出し、その身体が熱くなっていることを組み付かれた身体が嫌でも教えてくれる。

このままサイヤ人も戦えず、かませ犬のようになるのか。

そんなのは嫌だ。

これまで何の為に修行したのだ。辛かったことを思い出せ、立ち上がった時のことを考えろ。

色んな思い出がヤムチャの頭の中で渦巻き交差する。これが走馬灯というものだろうか。

その中で鮮明に浮かび上がったのは、

(プーアル……)

長年連れ添ってきた一番の友、プーアルだった。

荒野で盗賊をしていた頃からずっと一緒に行動を共にしてきた。こんな自分なんかをずっと慕っていてくれた。一番辛かった時、側にいたのがプーアルだった。

こんな所で死んでは、死んでも死に切れない。死んでしまったら、あいつには会えな

い。

ならば死んでたまるか。火事場の馬鹿力でサイバイマンの腕と脚を引き千切り、何とか脱出出来た。

だがサイバイマンの執念は恐ろしく、残った腕と脚で組み付こうとしてくる。どちらこんな距離では即死だ。ならば出し惜しみをしても意味が無い。ヤムチャはこの状況で唯一出来る技を放った。

(繰気弾ッ！)

それは自分で編み出したオリジナルの技。それを修行で更に進化させたものだ。

繰気弾は見る見る内にヤムチャの身体と同じ形になっていき、本体の代わりにサイバイマンに組み付かれる。

そして、それを操作し自分を殴らせた。このおかげで爆発の範囲から脱出し、サイバイマンはヤムチャの形をした繰気弾と運命を共にした。

「———という訳だ。理解したか？」

ベジータ以外の皆は驚愕した。

まさかあの一瞬の間にそんな事があつたとは。なによりも凄いのはその機転だ。死にもぐるいで考えついたとも思えるが、それでも途轍も無いものだった。

ナツパは激怒した。

「クソ野郎があ！ 散々俺達を虚仮にしやがつてえッ！」

「待った」

ヤムチャはクリリンに肩を貸されたまま口を開く。

「まだ俺のバトルフェイズは終了してねえぜ？」

ヤムチャは肩を貸された方と逆の方の腕を上げると、開いた掌を握るかのような動きをさせた。

その時だった。残りの四匹のサイバイマンは頭を破裂させ、見るも無残な姿へと変わってしまった。

それをやったのは誰の仕業か、考えるまでも無くヤムチャの仕業だろう。

その証拠に、してやったりって顔だ。

「言っただろ、残りの四匹も俺が、片付けるって……」

遂に自分の力で立っていられなくなったのか、ヤムチャはその場に再び倒れ伏す。恐らくは気の使い過ぎとダメージであろう。なんとか言葉は話せるものの、身体は殆ど動かない。この状態でサイヤ人に襲われればお終いだ。

現に、ナツパは怒り狂っていた。

「よくもサイバイマンをお、そろそろ本番だ。俺が出る！」

その足取りはゆっくりと、まるで確実に殺す為に近付いているようだ。

「おいナツパ、一匹は残しておけよ。願いの球の情報が聞き出せなくなる」

「分かっています」

そう言いながらも、ナツパは怒りに震え、今にも襲いかかってきそうだ。

しかし、顔は怒っているというよりも、笑っているように見えるのは、やはり戦いを楽しむサイヤ人だからこそか。

次の瞬間にも戦いが始まりそうな時、亀仙人が何かを感じ取った。

「この気は……！ 近付いて来ておる！」

「ま、まさか!？」

その気は地球の戦士の誰もが知っている気。待ち望んでいた気の持ち主だった。

「待たせたなあ、みんな」

それは孫悟空。かつて世界を救った英雄であり、皆のよく知る仲間だった。
そして、

「お前に手を貸すことになるとはな……」

かつて世界を恐怖のどん底に突き落とした大魔王、ピッコロの姿があった。

くくくく

少し遡って界王星。

ラディッツが界王様と一対一になり、話していた。

ラディッツは言いづらそうに口を開く。

「なあ界王様、サイヤ人の歴史を知っていたな？　なんでそれを知って俺を鍛え上げた？」

自分もそのサイヤ人の仲間だとは思わなかったのか？

悟空については頭を強打し、サイヤ人としての使命を忘れているようなので大丈夫だと界王様に説明したが、自分の事についてはだんまりだった。

界王様は少し間を空け、ゆっくりと言い出す。

「お前の心の中に別のモノが宿ってきていると感じ取ったからじゃ」

「別のモノ？」

「そうじゃ。いうなれば『善』の気。清き者の気じゃ」

ラディッツはそれに反発して「馬鹿な、そんな事有り得ん！」と言い放つ。

しかし、心の中では大きくは反論出来なかつた。ここ数日、サイヤ人として生きてきた頃とは違い心に余裕があつた。その為、落ち着ける時間がありなんとも気が楽だつた。

「心当たりがあるようじゃな」

界王様の言葉にハツとするラディッツ。

「修行している時の必死さとワシがサイヤ人の話した時の、何かに怯えるような顔付きで確信を持ったのじゃ」

何かに怯えていた？

確かに心当たりはある。まず一人は自分の上司に当たるあの怪物。自分のような下級兵士なんか名前を呼ぶことすら怪しい、名前の言っではいけないあの人だ。

しかし、その人は恐ろしいとは思っているが、いつもは全く考えていない。いや、考えたら負け、というべきか。とにかくその人は違う。

では小さい頃の記憶か？

確かにあるかもしれない。だが、それもいつもは考えていないし、界王様の話でもそこまで考えていなかった。

なにより弟のあの一言でどこか吹っ切れたところもある。どうにも正解とは言えない。い。

ならば……。

「ベジータ達か……」

この修行をした目的であり、これから相手取る仲間であった二人のサイヤ人だろう。弟には色々情報伝えたが、もしかしたら震えていたのかもしれない。

「どうやら、気付いたようじゃな」

「ああ、まさか恐怖の原因が、かつての仲間なんてよお」

ラディッツは彼らが怖かった。

自分とは違い、エリート戦士の血を引くあの二人。仲間の中で生き残っている事が確定したのは自分とカカロット、そしてナツパとベジータだ。もしかしたら他の惑星に送られたサイヤ人がまだ生きているかもしれないが、カカロットは例外だったが探しに行く事は出来なかったし、送られた惑星で逆に殺される事も珍しくなかった。或いは事故死である。

地球でカカロットは死にはしないだろうと自分で言っていたのは、もしかしたら否定しなかったのかもしれない。

現にカカロットは生きていたが、死んでいる可能性もあったのだ。

もしかしたら親父の幻影をカカロットに被せて、心の拠り所にしたかったのかもしれない。同じ下級戦士として。

「情けねえよなあ、仲間に怯えるなんてよ……」

戦闘力とかは関係なく、ただ純粹にあいつらが怖かった。
カカロットを迎えに行く時も、

『戦力にならなければ殺せ』

弟を殺せというのか。

サイヤ人という種族では仲間殺しというのは珍しくない。子供が親にいいように使われて親殺しというのも結構な頻度であつたからだ。どこかのサイヤ人が『子どもが親を殺す、それがサイヤ人だ』と言つていたような気もする。

だが、今では数少ないサイヤ人をこうもあつさり切り捨てるとは。
それが自分の弟である分、余計に恐怖したものだ。

「それで、お前さんはどうする?」

界王様が尋ねる。

それに対しラディッツは、

「ああ、認めよう。俺は臆病だ。……だが、ここで行かなければ戦闘者の名が廃るわあッ
！」

恐ろしいが故に、ここで乗り越えなければ、そうしなければ、親父や弟のカカロットに顔向け出来なくなる。

「だから、これはケジメだ。臆病な俺への」

そう言つてラディッツは自分の尻尾を握り、そして、

引っこ抜いた。

それはサイヤ人の誇り。そして切り札。大猿化の為に必要な一手を自分で封じる。

だが、大猿になつてしまえば自分で自分のサイヤ人の血を抑えられなくなり、弟を殺してしまうかもしれない。

ともあれこれで決心した。ラディッツは一片の迷いも無く、戦場へと赴くのだった。

~~~~~

悟空と一緒に登場したピッコロ。

実はラディッツ戦前の五年間にすでに再開していた。

あれは300年前に今の神と神の座を争い姿を消したガーリック、その息子との戦いであつた。

ガーリック jr. は、自らも神の座を狙い、まずは永遠の命を手にする為にドラゴンボールを部下に集めさせた。

しかしそこで問題発生。

その内のドラゴンボールの一つ、四星球は孫悟空が肌身離さず持ち歩いていたので回収に失敗。更にそれが神にばれ、悟空と神様、ついでに襲われたピッコロに逆襲されタコ殴りにされた。勿論永遠の命の願いは叶うこと叶わず、ガーリック jr. の復讐は成功せず終わった。

その時、悟空とピッコロが対決するのかと思いきや、

「今はオラとおめえ、どっちも疲れてる。決着をつけんのは別の日にしねえか？」

この出会いは不本意であったピッコロは、その言葉にやむなく同意して別れたのだった。

そして、悟空が現場に向かう途中でピッコロと出会い、事情を説明する。

自分より強い奴がこの地球を襲撃してくる、と。

そんなことになれば世界征服どころでは無い。

「ならばそいつを殺した後、次は貴様の番だ」

と言ってこの戦いに参加するのであった。

今はピッコロを加えた地球の戦士組と悟空に分かれて戦っている。

何故そんな状況になったのかと言うと、いつの間にかスカウターという機械を付けていたベジータが、

「戦闘力、9000以上だあッ!？」

とスカウターを握り潰しながら叫んだ為だ。

ナツパも、

「それは何かの間違いだあッ！ スカウターの故障だぜッ！」

と驚愕していた為、この数値はナツパを凌ぐ数値なのだろう。  
ベジータも驚き、ナツパには荷が重いと考えて悟空に言った。

「カカロットよ、どうやってそこまで腕を上げたのかは知らんが、このベジータ様と遊ぶ資格があるくらいには強くなった。ナツパはそいつらを片付けろ、いいなッ！」

場所を移すと言ったのは悟空。二人は別の場所で戦うようだ。  
残るはピッコロを含む地球の戦士達とナツパ。

これから起こる戦いの結末は、例え神でさえも予測出来ない。

## 激動

悟空とベジータは睨み合う。

悟空が場所を変えろと言って選んだのは、切り立った岩壁が複数そびえ立つ、人や動物がいらないであろう場所だった。

ベジータは腕を組みながら言う。

「喜ぶがいい。貴様の様な下級戦士が、超エリートに遊んで貰えるんだからな」

ベジータは言った。サイヤ人は生まれてすぐ適性検査をされ、能力の低い者は大して敵のいない星に送り込まれるのだと。

「ようするに、貴様は落ちこぼれだ！」

「そのおかげでオラはこの地球に来られたんだ、感謝しなきゃな」

ベジータの暴言を、悟空は逆にそれで良かったとも言おうかのように答える。

そして、

「それによ、落ちこぼれだって必死で努力すりゃあ、エリートを超えることがあるかもよ？」

「くくく、面白い冗談だ。では努力だけではどうやっても超えられぬ壁を、見せてやろう

！」

互いが構え合う。

静かではあるが、気のぶつかり合いがもう始まっているのだ。

それに耐えきれなくなった一つの岩壁が崩れ落ち、そしてそれが戦いのゴングになった。

足元の岩を蹴り、互いが激突する。

突きや蹴りの連打。悟空は始めから全力のようだが、ベジータにはまだ余裕がある様に見える。

互いが打ち合う中、ベジータの前蹴りが炸裂した。悟空は上空へと打ち上げられ、なんとか体勢を立て直す。

今度は悟空から仕掛けた。だがベジータはそれをいとも簡単に受け、そして避ける。そして一瞬の隙を突かれ、ベジータの連撃が決まってしまふ。

「どうしたカカロット！ お前の実力はこんなものかあ！」

ベジータの蹴りが悟空の腹に突き刺さる。そしてダメ押しのアナツクルでの追撃。悟空は地面に叩き落された。

このままでは勝てない。そう思った悟空は奥義、界王拳を身に纏う。

瞬間、悟空を紅い気が覆い、身体能力が増強されていく。この奥義は多くの体力を消

耗し、上手くいかなければたちまち身体が崩壊してしまう恐れがある。

だが、ここで使わずいつ使うのだ。

戦いに危険が伴なうのは当たり前、この戦いでは必ず無茶が必要になるから。

悟空はすぐさまベジータに飛びかかった。出来るだけ短期決戦で勝負を付けなければ逆に不利になるのだ。

ベジータの顔を捉えた拳は、次にボディへと移行し、先程とは比べ物にならないほどの連打を叩きつける。

「調子に乗るなッ！」

だが、ベジータもそのまま喰らい続けるほど馬鹿では無い。

連打の隙を掻い潜り、反撃に出る。その疾さは界王拳の悟空を上回り、痛い一撃が悟空の身体に入る。悟空は堪らず肺の中の空気を吐き出して、岩壁に激突した。

悟空は体勢を整え、ベジータから距離を離して直ぐさま相手を見る。

いない。

「間抜けめ、後ろだッ！」

まともに回し蹴りを喰らい、岩石を砕きながら倒れ伏せる悟空。

まだ足りないのか。

まだ甘いのか。

後を残す界王拳の二倍は、自分で制御できる最大となる。だが、更に消費が多くなるのだ。これで勝てなければもう後は無い。

いいじゃないか、更に無茶しよう。

(こんなヤバい時だつてのにワクワクしてきたぜ……)

全力を、自分の全てを出し尽くさなければ、或いはそれでも勝てない相手。地球がピンチだつてのに、これを楽しんでいる自分がいる。

これがサイヤ人の血か。

何かを護る為では無く、ただ純粹に戦いを楽しむ。なるほど、今までの戦いでいつもワクワクしていた訳だ。

悟空は二倍の界王拳を使った。後の事は考えない。今を勝ちに行く！

更なる負担が身体にかかるが、まだ全然制御出来る範囲だ。……これ以上はどうなる

か分からない。

「だりやあああッ！」

「なにッ!？」

岩石の破片が、その気の膨大きに空へと浮かんでいく。悟空の周りの空間が歪み、紅い気が増幅される。

それに応じて、悟空の膨れ上がった身体も紅くなっていく。

血管が脈打ち、蒸気が風に乗って吹き荒れる。その風が発せられているのは、二倍の界王拳を纏った悟空の身体からだ。

悟空はベジータに向かって真つすぐに飛んでいった。

~~~~~

「ナメック星人が加わったくらいで、このナツパ様を倒せると思ってるのか？ いくらナメック星人でもよ、一匹かそこらじゃあ俺達サイヤ人にはハエみてえなもんだぜ」

「試してみるか？」

ピッコロも加わり、合計6名となった地球の戦士達。ヤムチャはまだ気の使い過ぎで戦闘には復帰出来ないが、この人数差に平然としているのがそれを相手取るサイヤ人のナツパだ。

ピッコロの反応に、笑いながら返す。

「そう死に急ぐ事もねえだろう？ お前は虫の息程度に生かしてやる」

それ以外は皆殺しだ、とも言った。

恐らくは願いの球、つまりはドラゴンボールの事を聞き出す為だろう。

奴等はナメック星人が不思議な力を持っている事を知っている。戦闘タイプ他に、魔法使いの様なことが出来るタイプもいる事を。

「ラッキードーナ、ドラゴンボールの情報を一番知っているのはピッコロ、あんただと思っているらしい」

「どちらにしても同じだ。どちみちこの勝負に負ければ、地球はお終いだ」
クリリンがピッコロに言う。

もし負ければ、なんて考えたくもないが。

ナツパが動き出した。

ナツパは力を込める様に握り拳をつくり、息を吐き出す。突如奴の気が高まり始め、

瓦礫の破片が浮かび上がり砕け散る。ナツパの身体は電氣の様なものを帯びて、まるで地震の様な大氣の震えが起きる。

「駄目だ！ 僕の超能力効かない！」

餃子がなんとか反撃に出るも、圧倒的な氣の震えに掻き消されてしまう。しかもそれがナツパの癩に障ったようで、腕の一振りで吹っ飛ばされてしまった。

しかしそれを心配している余裕は無い。皆今にも氣に吞まれそうであり、立つことすら難しいのだ。

「さて、覚悟はいいかあッ！」

ナツパは天津飯に狙いを定め、真っ直ぐに突撃してくる。

天津飯とナツパの腕同士がぶつかり合い、天津飯の腕が何かのエネルギーによつて痺れてしまう。

「天津飯ーッ！ 避けるお！」

ピッコロが叫ぶ。

しかしそんな余裕は無く、天津飯はただ受け止めようと受けの構えをするしかなかった。

ドツゴオオオツ

強烈な一撃。

しかしそれを受けたのは天津飯ではなく、

「う、ぐううう……！」

なんと亀仙人であつた。

身体を巨大化させ、受けた腕には気を纏わせている。

しかし体格差はなんとか五分のもの、気の差が激しい為押し負けてしまい、地面に身体を叩きつけられる事となつた。

「武天老師様ッ」

クリリンが走り出す。

しかし、亀仙人の腕を取り巻いていた謎のエネルギーは一瞬で消えていた。

否、亀仙人が消したのだ。

亀仙人の「大技である」かめはめ波は気を一点に集中して放つもの。ならばその応用で気を身体の一点に集中し、そのエネルギーを上回る気をぶつければ良い。身体の巨大化も、全体に気を送つたものだ。極めればどうという事は無い。

天津飯も気迫と気を全開にし、腕の痺れを打ち消した。

「こりゃあ少しは楽しませてくれそうだな」

ナツパはそう言うのと、一瞬で移動しクリリンと亀仙人に蹴りを見舞つた。

対応が遅れ、受け身も取れず吹っ飛ばされる。

「任せろッ！」

いつの間にか空中に移動したピッコロがエネルギー波を放っていた。それはナツパの隙を突き、背中に命中する。

だが、ナツパの歩みを止める程には効かなかったようだ。ナツパはピッコロのいる場所を確認すると猛スピードで飛んで行き、胴ごと回転させて蹴りを繰り出した。

その威力にピッコロは舞空術を保っていられなくなり、地面に叩き落とされる。

「吹っ飛ばす貴様らあッ！」

ナツパが腕に気を纏わりつかせ、そして薙ぎ払った。

爆発。

クレーターどころではない。爆風が戦士達を襲い、砂煙が舞う。そして、そこに出来たのは底の見えない大穴だった。

改めてサイヤ人の恐ろしさを思い知った。ラディッツ戦でさえ見なかった、この爆発跡。あれから腕を上げたのにも拘らず、これだ。絶望は捨て去った、しかしそれでも這い登ってくるのは悪寒である。

「……孫悟空との戦いの為に残しておいたのだが、そうも言っておれんようだな」

ナツパの予想以上の強さを感じ取ったピッコロは、

重りを脱ぎ去った。

ピッコロの気が爆発的に高まり、ナツパの身体から放たれるエネルギーとぶつかり合う。

「何だ?!? ピッコロも俺達と同じように重りをツ!?!」

天津飯の叫びに、皆も心の中で驚愕する。

ピッコロは空中へと走り、ナツパと互角の攻防をする。いや、疾さで言えばピッコロの方が上だ。

「このクソ生意気な……ツ! テメエ如きがこのナツパ様に……ツ!」

ナツパの怒りが溜まっていく。その証拠に、額には太い血管が浮かび上がっていた。その表情に余裕は無く、目の前のピッコロにしか意識が向いていなかった。

それが、大きな隙だ。

ピッコロが大振りの拳を躲し、頬に一撃見舞う。その一撃にナツパは大きく吹き飛ばされた。

「うわあああッ!」

その先にいたのはクリリン。

さっきのお返しとばかりに、ベアナツクルを脳天に直撃させる。勢いを消すこと無く、ナツパを地面に向けて叩き落とす。

更に、

「気功砲ッ！」

「どどん波ッ！」

天津飯と餃子がそれを追撃する。

まるで打ち合わせされていたかの様な完璧なコンビネーションだが、全ては彼等の修行と判断力の賜物だ。

ナツパはクリリン達に目を移し、怒り任せに暴虐の限りを尽くさんとするも、

「チエアアア!!」

隙を突いたピッコロによつてそれは阻止される。蹴りがナツパの顎を捉え、又もや空中へと戻された。

無防備なナツパに連撃を喰らわせるピッコロ。トドメとばかりに爪を用いた拳に気乗せて叩きつける。ナツパは堪らず、地面に落下して砂煙を舞い上がらせるのであった。

「やったか!？」

亀仙人が言う。

しかし、煙が晴れていき、そこにいたのは、

直立不動のナツパだった。

「ありがとよ、頭に上ってた血が少くし抜けて、俺のちっこい脳味噌が冴えてきた……」

よく見ればピツコロから受けたであろう一撃で、頭から血を流している。

先程とは違い落ち着きのある、しかし確かに憤怒している顔付き。

何かが変わったのか？ しかし気の大きさはさつきと全く同じ。気の大きさで言えば今のピツコロの方が大きい。

クリリンはチャンスと思い、自分のとっておきを右手に溜め始めた。円盤の様な気が手の上に滞空し、回転しながらだんだんと大きくなっていく。

「気円斬ッ！」

それはクリリンの新たなる技。

山程の大きさもある大岩を綺麗に切断出来るそれは、直撃すればサイヤ人の身体といえども簡単に切断するハズだった。

ナツパはそれを避けようともしない。

それどころか、手を前に構え、受け止めようとしている。

斬ッ

何かが切れた音がする。だがそれはナツパの身体では無く、

「くだらん技だ……」

クリリンの気円斬の方だった。

それは本当に呆気なく、気を纏わせた手刀で真つ二つに切断された。

ピッコロはその隙を狙い、気を込めた拳を突き出す。殆ど真後ろ、しかもナツパはそれに反応する素振りも無い。ガラ空きのその身体に、ピッコロの拳がめり込むハズだった。

受け止められた。

それどころか拳を握り潰され、その拳は使えなくなってしまう。

しかし、それだけでは終わらない。更にその腕を掴まれ、なんと腕ぎ取られてしまった。

蹴りを放つナツパ。避ける術もなく、ピッコロは吹っ飛ばされていった。

「今まで猪突猛進だったアイツに何が起こった!？」

動揺する戦士達。

気の大きさは今も変わってはいない。どうということなのか？ と考える暇も無く、

気付けばナツパが目の前にいた。

そして一撃。たった一撃で、皆が戦闘不能になってしまう。気も纏っていない、予備動作すら殆ど無しにして、この威力か。

皆辛うじて生き残ってはいるが、このままでは蹴り殺しだ。しかし動けるのは何とか腕を再生したピッコロのみ。

最早これまでか、と皆が思った。

その時、

「久しぶりだなあ、ナツパさんよ」

ラディッツが、そこにいた。

怪物化した化物

ベジータと悟空は激しい戦いを繰り広げていた。

（何故だッ!? 何故カカロットなんかがこの超エリートサイヤ人の俺様と互角なのだッ!?）

ベジータは困惑している。たかが下級戦士のカカロットがエリートの中でも最上位に位置する自分と戦えている事に対して、だ。

確かに殺し合いという戦闘においてはベジータの方が何枚も上手だった。子供の頃からの英才教育、強化サイバイマンなどの戦闘、時には一人で惑星の侵略を行った事だっであつた。

それに対し悟空は、数々の試合をこなしたものの、命を賭けたことがあまりにも少ないのだ。

だからこそ、命の奪い合いはベジータの方が圧倒的に有利なハズである。

しかし、この戦闘は互角。何故なのだろうか？

その真理は気持ちにあつた。

ベジータは悟空の事を侮りつつ戦っていた。同じサイヤ人で、自分に並ぶ者がいなかった為である。

しかし悟空は命の賭け合いこそ少ないものの、常に自分よりも強い相手との戦いの連続であった。挑み、戦い、そして勝利する。中には負けた事もあった。しかしながら、それも自分の力としてどんどん実力を上げていったのだ。

全ての身体を使って打ち合い、周囲の岩壁が殆ど無くなった頃、咄嗟にお互いに距離を取り合う。

悟空の顔に余裕は無く、ベジータはワナワナと震えていた。

(チンタラやつてると体力が尽きちまう。早いところ勝負を決めねえと、こっちが先に参っちまうぞ……)

悟空が肩で息をする。

「こんな、こんな事があつてたまるかあッ!!」

ベジータが叫んだ。

下級戦士と互角。それだけでベジータのプライドには深い傷が出来ていた。

そんな事はあり得ない。

あつてはいけない。

だから、奴を殺す。

「もうこんな星など要るもんかあッ！ 地球もろとも、粉々に撃ち砕いてくれるわあッ
!!」

「なんだとお?」

ベジータを大量のエネルギーが覆い、空へと飛び上がる。

更に、

「避けられるものなら避けてみろオ！ 貴様は助かつても、地球は粉々だア!!」

ベジータに途方も無いエネルギーが集まっていく。

予告通り、全てを破壊してしまうつもりだ。最早余裕など無く、カカロットを殺す事
だけを考えている。

「賭けるしかねえッ！」

悟空は自分に二倍の界王拳をかけ直し、かめはめ波の構えを取る。

膨大な気の上昇に、激戦で砕けた岩石が辺り一面に舞い上がった。

「かあ………！ めえ………！」

「俺のギャリック砲は、絶対食い止められんぞオ!!」

ベジータのエネルギーがスパークを起こし、更に高まっていく。

「はあ………！ めえ………！」

「地球もろとも、宇宙の塵になれエ!!」

両者のエネルギーが集まって、気のぶつかり合いが辺りを支配した。

最早地球上に、これを止められる者はいない。

「テヤアアアアアアアッ!!!」

「波アアアアアアアッ!!!」

そして、それは衝突した。

余りの激しさに、全ての岩壁が崩れていく。

空の雲が消し飛ぶ。

大気が震える。

その激しさは、今までとはまるで次元が違う。違い過ぎる。

悟空のかめはめ波が僅かに、少しずつ押し始めていた。

無理も無い。界王拳はそれ程体力を消費するのだ。如何に悟空といえども、体力は無限では無い。

ならば、

「界王拳三倍ツ!!」

自分のパワーを上げるしか無い。

自分が耐え切れる限界を超えて、身体に界王拳を上乗せする。

身体が壊れそうになり、肉体が悲鳴を上げ、不自然な膨らみ方をしていく。少しでも気を緩めたら身体が崩壊してしまいそうだ。

それでも諦めない。

悟空のかめはめ波がベジータのギャリック砲を呑み込み、そのまま押し返していった。

ベジータの直前まで食い込んで、迫る。

しかし、

「ウオオオオアアアアツツ!!」

ベジータも諦めてなどいなかった。

サイヤ人のエリートとしてのプライドが負けるのを許さなかったのだ。どこから出てくるのか、また更にエネルギーが増幅する。

押し切れない。

三倍界王拳でも、真つ向勝負では足りないというのか。

そして悟空は、

「四倍だアアアッ!!!」

~~~~~

「いかん悟空ッ！」

界王様が声を上げる。

倍。  
何しろ界王様が許しているのは界王拳の二倍までである。それを三倍どころか、四倍。

どう考えても負担が重過ぎた。下手をすればそのまま死んでもおかしくは無いのである。

しかし界王様は、ただ勝利を願う事しか出来ない。

~~~~~

悟空は更に限界を超え、四倍の界王拳を使った。

その衝撃に地面や自分の体勢が大きく崩れ、かめはめ波の勢い上がる。馬鹿デカくなつたかめはめ波は、遂にベジータのギャリック砲を全て呑み込み、

「お、押され……………う、うわアアアアアッ!!」

ベジータを空の彼方へ吹き飛ばしていった。

その光景は、さながら夜空を昇る流れ星のようだった。

「孫〜！ やったでねえかよ〜っ！」

無理をし過ぎた悟空が膝を突き、身体の痛みで呻いている時、遠くから声が聞こえた。それは聞き覚えのある声で、どんとどんと近付いてくる。

ヤジロベーだ。

悟空は気付いていなかったようだ。「何でここに？」と話しかけるとヤジロベーは笑い、

「なんだ〜気付いてなかったのかよ。おめえともあろう者がよっぽど必死だったんなや」

と言ってくる。

悟空はそれに軽く返事をして、ヤジロベーに話しかける。

「それよりヤジロベー、おめえ逃げた方がいいぞ……う？」

「え？ な、なしてだ？」

「奴はまだ生きてる。あれぐれえで死ぬような奴だったら苦勞は無え……」
「で、でもよく、平気でしょ。おめえの方が強かったでね？」

「オラは身体に無理のある技を使っちまってガタガタなんだ……。もしかしたら限界が近いかもなあ……」

ヤジロベーは唾を呑む。

悟空が真剣な顔で言った後、ヤジロベーの方を見ると既に遠くにいた。

「じゃ、じゃあなあ。頑張れよお〜！」

それだけ言うと、スタコラサツサと逃げていった。悟空はその後ろ姿を、ポカーンと見ているだけだった。

~~~~~

「クソオ〜ツ!! 何故だ?! 何故カカロットなんかには押し勝てないんだア!!」

ベジータは何とかかめはめ波から脱出し、遙か上空で浮き止まっていた。

「俺はサイヤ人だ！俺は全世界で一番強いんだア!!」

しかしその表情に先程までの余裕は無い。あるのはただひたすらに怒り。

自分はエリートのはズダ。同じエリートサイヤ人でも、自分に勝てる者はいなかった。それが、下級戦士の力カロットなんかには苦汗を舐めさせられるとは……。

こんな屈辱はない。

サイヤ人は戦いこそが全て。今まで不敗だった自分がこの戦いで負けるとなれば……そこまで考えて、思考を止めた。

その姿を考えてはいけけない。今敗北を考えてしまえば、それが現実になってしまう。

「こうなったら醜くて嫌だが、最後の手段だ……」

~~~~~

ナツパと対面したラディッツは、冷汗をかきながら笑っていた。

「久しぶりだなあ、ナツパさんよ」

弟のカカロットに教わり相手の気を読む事を覚えたラディッツだったが、やはり恐怖というものが残っているようだ。現に今もナツパの気を感じているが、自分よりも高くてどうにかなりそうであった。

しかし、立ち向かう度胸が無ければ戦うなんて事は出来ない。攻撃する気が無ければ、簡単に捌られるだろう。

「誰かと思えば、弱虫ラディッツじゃねえか」

”弱虫ラディッツ”、この言葉に反応する。

決心はしたが、やはり怖いものは怖いようだ。身体が勝手に震え出し、闘争心を削る。「ん？ ガハハ、お前震えてんじゃねえか。どうした？ 今になって俺様の事が怖くなったか？」

「冗談じゃねえ」

昔から怖かった、なんてことは口が裂けても言えない。

ここに来た理由は、自分の恐怖を乗り越える為だ。決して尻尾を巻いて逃げる為では無い。

……まあ、尻尾は引っこ抜いてしまったのもう無いのだが。

「そーいやあお前の事も始末しろとの御命令もあつたな。丁度良い、ここでついでに始末してやる」

「俺を舐めるなよ、ナツパ」

「たかが戦闘力1500の雑魚に何が出来るってんだあ？ お前よりもそのナメック星人の方が幾らか手強かつたぜ」

「なら、本当に俺の戦闘力が1500か見てみるがいい」

その言葉にナツパはスカウターを拾い、ラディッツの方へ向けてスイッチを押す。

「2400？ 弱虫ラディッツにしては中々のもんじゃねえか。だが俺様の戦闘力を忘れた訳じゃねえよな？」

ナツパの戦闘力は、4000。

そんな事は知っているのだ。昔のラディッツでは逆立ちしても勝てないのを目に覚えていた。

でも、今は違う。

「……ナツパ、お前らが地球に来る一年にも満たない間、俺は何をしていたと思う？」

「俺達から逃げる計画でも練ってたか？」

「戦闘力のコントロールを学んだのだッ！」

そう言つてラディッツは自分の気を高め始めた。身体中の筋肉を膨張させ、己の全力を解放する。

ナツパが付けていたスカウターの数値がどんどん上昇していき、そしてそれは、今までのラディッツの最大の数値を叩き出して止まった。

「せ、戦闘力……13800だとオオ!？」

この数値にラディッツ自身も驚いた。なにせラディッツのスカウターは悟空達との戦闘で亀仙人が破壊し、その後は戦闘数値など見ることもなかった。

そして、ナツパの口から言い放たれたその数値。それは自分が目指していた親父の戦闘力を超える数値であった。

「ば、馬鹿な!? スカウターの故障か!? 弱虫ラディッツに限ってそんな事……あり得るハズがねえ!!」

「試してやろうか?」

そう言ったラディッツは気を込めた拳をナツパの腹にめり込ませた。

あまりの早さにナツパは反応出来ず、腹を押さえて前のめりに膝を突く。

ナツパが口から胃液の混じった涎を吐き出した。サイヤ人の中でも圧倒的なタフさを誇るナツパが一撃でこれだ。

ラディッツの戦闘数値が嘘では無い事の証明として、嫌でも理解しただろう。

しかし、嫌な予感がしてラディッツは退がる。

臆病者であるが故の危険察知であろうか? しかし、そうでなくとも嫌な感じがする。

ラディッツは気を緩めず、ナツパを睨む。

「は、ハハ、どうやらその戦闘数値は本物のようだな……。だが忘れたか? サイヤ人の

本当の力をオ!？」

「な!?! ま、まさか!?!」

「尻尾を失った事を後悔して死んで行けラディッツツ!!」

~~~~~

ベジータは地上に降り立ち、再び悟空の目の前に現れた。

「やっぱ堪えてたか……」

悟空が焦りながら言う。既に身体は界王拳でガタガタであり、これ以上の戦闘で界王拳の使用は難しい。今の状況は、ベジータが圧倒的に有利であった。

この状況を打開する為には元気玉しかない。しかし、上手く精神集中できるだろうか。

ベジータがニタリと笑いながら言う。

「知っているかカカロット? 月の光は太陽光が跳ね返ったモノ。月に照り返された時

のみ、太陽光にはブルーツ波が含まれるのだ。そのブルーツ波が満月になると、1700万ゼノという数値を超えるのだ」

悟空は何を言っているのかさっぱり分からなかった。

ベジータは続けて言う。

「1700万ゼノ以上のブルーツ波を目から吸収すると、尻尾に反応して、変身が始まるッ！」

何を言っているのか分からないが、これだけは言える。ベジータは何か仕掛けて来るのだ、と。

「尻尾を失くしてしまった事を後悔するがいい……カカロットよおッ!!」

今宵、二人のサイヤ人が怪物へと変身した瞬間であった。

## 覚悟とは

サイヤ人の身体が、まるで心臓の鼓動の様に振動し、巨大化が始まる。

肌からは尻尾と同じ色や毛並みの体毛が生え、顔は人間のモノとはかけ離れた怪物の顔へと変化していく。

これがサイヤ人の切り札、大猿化だ。

しかし昔悟空が変身した大猿とは違い、エリートサイヤ人が変身した大猿には理性が宿る。だから本能のままに暴れまくるのでは無く、これまでの戦闘経験を生かした攻撃が繰り出される事になるのだ。

「クソオ……抜かったわあ……」

ラディッツが悔やむ様に大猿化したナツパを睨む。

今までも巨大だったナツパの身体が、更に巨大化して目の前に立ち塞がる。

それにしても恐ろしいのはナツパの判断力か。直ぐにラディッツの尻尾が無いと判断し、大猿化したのだから。

「油断したなあ……だからお前は弱虫ラディッツなんだッ！」

尻尾のないラディッツは変身が出来ない。

先程まではラディッツの方が断然油断であったが、大猿となれば話は別になってくる。何故なら、大猿化すると戦闘力が10倍になるのだ。

単純計算でナツパの戦闘力は40000となる。変身すれば同じサイヤ人同士で強化する倍率は変わらないが、カカロットを間違つて襲わぬ様にと、今までの自身のケジメとして尻尾を抜いてしまったのだ。

今まで大猿化する事は、月があれば当たり前前の事になっていた。だからこそ、気付かない盲点だった。

「こうなつてしまえばもうお前には打つ手立ては無いッ！ 諦めてさっさと死ねえ！」

「そう簡単にやられてたまるかッ！」

ラディッツはなんとかナツパの踏み付けを避ける。この巨体だ。どんな攻撃を受け

でもウエイトの差が出てくる、必殺の一撃だ。

「ラディッツはまず回避に専念し、作戦を練ろうとした。その巨体に張り付く様に動き、ナツパを攪乱する。」

「まず手始めに、エネルギー弾をぶつける。」

しかし、

「ちよこまかと動きやがってえッ！」

全く効いている様子が無い。

当たり前だろう。戦闘力の差もあるが、なにより元々のナツパの耐久力がおかしい。

元々サイヤ人というのは、宇宙から見ても全体の平均の戦闘力、戦いのセンス、そして強靱な肉体が並外れて強力な種族だ。

その中でも異常な耐久力を持ち合わせたエリートがナツパだ。少し戦闘力が上のサイヤ人でも、そのタフさに勝てず敗北したという噂は幾つか聞いている。

だからこそその強さならば上なハズのピッコロも、腕を挽ぎ取られるという結果になったのは不自然では無いのだ。

そんなナツパに小手先の技術は通用しないだろう。

ならば、

（尻尾を狙うッ！）

尻尾を切り落とす事に専念するしか無い。

大猿化に必要なのは月と尻尾。月を狙うには気を溜める時間が必要となる。しかし、そんな隙をワザワザ逃す様な奴でも無い。

ならば尻尾だ。尻尾を切断すれば強制的に大猿化の効果は切れて、元の姿に戻る。そうすれば勝てる。

ラディッツはワザとナツパの目の前に現れ、連続エネルギー弾をブチかます。

「ノコノコと目の前に現れやがったなラディッツッ！」

ナツパはエネルギー弾など御構い無しにラディッツに拳を振るう。

ラディッツは弾幕とその爆煙で視界を遮り、下に回り込む事でそれを避けた。そのま

ま、尻尾へ――

「バアカめえッ!!」

ナツパの肘打ちが決まる。

その威力に、ラディッツは地面に叩き落とされた。

地面に叩き落とされ、肺の空気を吐き出すラディッツ。なんとか立ち上がろうとするも、そこをナツパに踏み付けられ動けなくされる。

「お前が俺の尻尾を狙っているなんてバレバレなんだよオ！」

「く、クソツタレめ……ツ！」

「このままグシャグシャに潰れるオ!!」

ラディッツが死を覚悟した。

その時、何者かがナツパに攻撃を加えた。しかし、やはりと言つていいのかダメージを受けた様子は無い。

「お、俺を忘れるとは……馬鹿な野郎だぜ……」

その正体はピッコロであった。

腕を挽かれ、再起不能と思いきや、五体満足でそこに立っていたのだ。

ナツパの意識がピッコロに向く。

その隙を突いて、ラディッツは脱出を試みた。

「界王拳ッ！」

ラディッツの身体が紅い気を発し、ナツパの踏み付けから逃れる。

ナツパはいきなりラディッツのパワーが上がった事に驚いたが、まだ自身の方がパワーは上であると確信し余裕の笑みを浮かべた。

「まだそんな元気があったのか。そうだ、もつと俺を楽しませろ」

ラディッツとピッコロは突進してきたナツパから逃れる。

避けた方向は同じだったようで、互いに目線を合わせた。

ラディッツにとっては願いの球に係るナメック星人、としか感じていないだろう。しかし、かつての自分よりは手強いとナツパは言っていた。

そして思った。ナツパを攻撃した所を見ると、少なくとも今は敵になったりはしないだろう、と。

対するピッコロは昔の怒りを思い出していた。自分を敵とも思わず、無視していったこの男を。あの怒りがあったからこそ、今の強さがあると言っても過言では無い。しかし、こいつの力を借りなければこの怪物には勝てない。

少なくとも、今の自分では。

だからこそ、手を貸してやる。今回だけだ。次会うときは……。

目線を合わせたのは一瞬だった。

それだけで、言葉も交わさず、彼らはナツパに向かって飛んでいった。今は話す余裕も無いのだ。それ程までに、目の前の敵は強い。

だからこそ彼らは不慣れな、『力を合わせる』をしなくてはならないのだ。ナツパの攻撃をギリギリで避け、隙あらば反撃する。幾らナツパがタフでも、ダメージは積み重なっていくハズ。そして相手が鈍ってきたところを叩くッ！

ナツパはイラついていた。

回避に専念する奴らに攻撃が当たらない。

奴らからの攻撃は痛くも痒くも無いのだが、どうにも鬱陶しい。まるで牛に群がるハエが如く、だ。

やがてナツパの苛立ちが頂点に達した時、

「邪魔だア!!」

ここ、東の都にやったモノと同じ技が彼らを襲ったのだった。  
まるで自分の周りを全て破壊するかのよう。

~~~~~

ラディッツは目を覚まし、同時に身体中が軋む様な痛みを感じた。その痛み
に耐え切れず、呻き声を上げてしまう。

「やっと目を覚ましたかラディッツ。そーこなくちゃな、苦しむ顔を見ねえと面白
ねえッ！」

それと同時に握る力が強まる。

どうやらナツパの手の手の中にある様だ。両手で握られ、ナツパの顔の前に来る様に持ち
上げられている。

ラディッツの恐怖が再来した。もはや隠せない程に恐怖が抑えられず、それは表情に

も出てしまう。

「お、怖いか？　そうだろうなあ。もうお仲間さんもないもんなあ」

そういえばナメック星人がいない。……気も、感じなかった。

地球人はまだ微かに残っているモノが幾つかあるが、それは余りにも遠く、この気の小ささならば動けないだろう。

確実に来る”死”が怖い。

目の前のナツパが怖い。

ベジータが怖い。

名前も言えないあいつが怖い。

幼い頃のトラウマが怖い。

そして、”一人”が怖い。

ラディッツは、心を恐怖に塗り潰されていた。勝手に身体がガタガタと震え、抑えられなくなる。

あの時逃げていればよかったと思った。尻尾を抜かなければよかった。カカロット

の声を聞かなければよかったと、思った。思ってしまった。

後悔の念が押し寄せる。

情けなくて。

情けなくて。

そして、カカロットに、親父に、謝りたかった。

———
こんな駄目な奴でゴメン。

その時、不意に言葉が思い浮かぶ。

『兄ちゃんスゲーな！ オラなんか全然かなわねえ！』

『兄ちゃん少食なんだなく、オラが貰っていいか？』

『兄ちゃん、もつと自信持った方がいいぜ？ 兄ちゃんは、強えんだからっ！』

カカロットの声が。そして、

『強くなれよ、俺のガキなんだからな……』

親父の声。

恐怖に塗り潰された心に、小さな光が宿る。それが広がり、いつの間にか恐怖は消えていた。

「……ナツパ」

「お？ やつと死ぬ覚悟が出来たか？ 無くても殺すかなあ」

ナツパの笑い声が高らかに鳴り響く。

だが、そんなのは耳に入らない。

「確かに俺は臆病だった。いや、今でも臆病だ。だが、勝てるぞ」
「はあ？」

その言葉に笑い声が止まり、ラディッツを睨みつけるナツパ。
そして、

「戦闘力なんてのは、単なる目安だ。あとは………勇気で補えばいいツ!!」

——界王拳三倍。

ラディッツは拘束から力尽くで抜け出し、ナツパに連撃を仕掛ける。

いきなり重くなった攻撃に、ナツパは困惑した。何故大猿の自分よりパワーが上なのか。さっきまで恐れ戦いていたこの弱虫に何が起こったのか。

ナツパは反撃も出来ず、ラディッツの猛攻に押されていく。

何故今までラディッツが界王拳をそこまで使わなかったのか、それは精神統一にある。

悟空とは違い、今まで溢れる感情のままに戦ってきたラディッツは、安定した精神のままでの戦闘があまり得意では無かったのだ。一段階目の界王拳でも、制御し切れてい

ない程である。不安定な感情では、界王拳を極めるのが難しいのだ。臆病さも、そこに加わっていた。

しかし今、ラディッツは三倍の界王拳を身にまとっている。

普通ならば確実に心と身体が崩壊しているだろうが、今までに無い”覚悟”が、それを可能としていた。

絶望を乗り越える勇気を。

「俺はエリートの中のナツパ様だツ！ 負けるハズが無いイイ!!」

ナツパは口の中にエネルギーを溜め込む。

それはナツパの最高の技であり、圧倒的な火力を誇るモノだった。

ラディッツは迎え撃つ様に両手に気を引き、構えた。

「カカロットよ、技を借りるぞ」

それは、かめはめ波の構え。

同時に撃ち出され、拮抗する両者のパワー。夜だというのに、眩しい程の光が東の都跡地を照らす。

だが、次第にラディッツのエネルギーに押されていき、

「チクショーツ!!」

ナツパは呑み込まれた。

くくくく

満月であるのに、ナツパの姿は戻っていた。

理由はナツパを呑み込んだ気が、尻尾を焼き切ったことからである。ナツパ自身も、身体中が焦げた様な傷痕でいっぱいであったから、恐らくそうなのだろうと思った。

ともあれ勝負はついた。

ラディッツは力無く地上に落ち、肩で息をする。

界王拳を無理矢理上げたのはやはりキツく、一瞬でも気を緩めれば身体がおかしくなりそうだと。

——だが、一息付くのはまだ早い。

ベジータが、見るからにボロボロな姿でこちらに飛んで来る。片目を潰され、戦闘服も意味をなさなくなっている。

「ベジータ……!!? カカロットはどうしたッ!?!」

「ラディッツか、カカロットなら——」

「死んだぞ」

これからの運命

「死んだぞ」

その言葉に、ラディッツはピタリと止まってしまった。

怒りや悲しみなどの感情が爆発する前に、信じられないのだ。頭が事実を理解しよう
としない。そして、信じたくない。

「……ッ!!」

だが、否定の言葉は出なかった。

相手がベジータならばおかしくも無い。同じ修行をしていた自分がナツパ相手にこ
こまで全力を出し切ったのだ。その何倍も強いベジータに、カカロットだけで挑んだ
らこうなる事位予想出来たはずなのだ。しかし、自分の事ばかりを考えていた。こんな
結果になったのは……

「俺の……せいか……」

ラディッツは膝を突く。

それを見たベジータはニヤリと笑い、

「心配しなくても、直ぐに会わせてやる……あの世でなア！」

拳を振りかぶり、ラディッツを殴りつけた。

「いい加減にしろよ？」

なんと、ラディッツはベジータの拳を片手で受け止めていた。そのまま握り、ゆつくりと立ち上がる。

ベジータはこれを外そうとするが、ラディッツの掌から外れない。「何故ラディッツがここまで……」と驚愕するが、ラディッツは静かなままだ。

「調子に乗るなア！」

如何に先程の戦闘後だとはいえ、ベジータは認めたく無かった。カカロットに続きラディッツまでもが超エリートである自分にこうも追い付くのが、だ。

ベジータはもう片方の手で気弾をつくり、殆どゼロ距離でラディッツに放った。

しかし、

「……」

ラディッツはそれをまともに受けたというのに、動じない。それどころか、握り締める力が強くなっていく。

「チクシヨウめエ！」

ベジータは蹴りを繰り出す。流星にラディッツはこれを避け、拳を離してしまふ。ベジータは瞬時に距離を取った。

「もう、帰ってくれ。ベジータ」

ラディッツは構えずまま、それを言い放った。

ベジータは怒りの余りに震え「ふざけるな」、そう言おうとした。

その瞬間、

ベジータの腹を、ラディッツの拳が抉った。

ベジータは堪らず腹を押さえて蹲り、口からは血の混じった唾液が滴り落ちた。しかしそれだけでは痛みは治まらず、横に倒れる。

「帰れベジータ」

さつきよりも強く発せられた声は震えており、何かを抑えているように感じた。

寒気がした。

冷えた汗が背中を流れる感触が嫌にはつきりと感じ取れた。

これは不味い。恐怖にも似た得体の知れないこの感覚は、触れてはいけない何かだ。

ベジータはポッドに乗り込み、扉が閉まる時にラディッツに向けて言った。

「覚悟しろよ……次に会った時が、お前の最期だ」

そのままポッドはもの凄い速さで空へと飛んでいき、見えなくなつた。

しかしラディッツは見向きもせず、ただ黙つたまま立ち尽くすのみであつた。

くくくくく

戦いが終わり、脅威は去った。

しかしそれは、決して小さく無い傷跡を残していき、彼らはこの勝利を喜べなかった。いや、勝利と言つて良いのかも分からない。

ピッコロが死んで神様も死に、悟空も生き返らない。自分達は何も出来なかった。友人の死が、責任感が彼らを襲った。

どうにかしてこの結果を変える事は出来ないのか。これではどうしても、悔やんでも悔やみきれない。

しかし、どうしようも無い。

でも、どうにかしなければ。世界の為に戦い、二度もこの地球を救ってくれた英雄であり、友人だ。このままでは終われない。

クリリン達は皆病院へと運び込まれ、ラディッツは大丈夫だと言い張り何処かへ行つてしまった。お見舞いにはブルマやプーアル、ウーロンやカリン様などが来てくれたが、表情はやはりよろしく無い。

「これからどうします?」

クリリンの第一声。病室が嫌に静かであったから、はつきりと聞こえてくる。

「どうするつて言つたつて……」

ブルマが反応するが、どう答えていいかわからない。

それは皆だつて同じだ。この状況を打開する策なんか、簡単に思い付く訳がない。思いついていたらこんなに暗くなつていないだろう。

暫くの沈黙。

そして、再度クリリンが口を開いた。

「実は俺、考えついたんですけど……」

口籠った。

皆が疑問を持ち、ヤムチャが話しかける。

「どうしたクリリン？ 何か良い案が出たのか？」

「そうなんですけど、上手く行くかどうか……」

「発言しない事には判断出来ん。その案とは？」

天津飯が促す。

それにより、クリリンはやつとその内容を答えた。

「もしかしたら、悟空を生き返らせる事が出来るかも知れない」

その発言に、皆は驚いた。

何も解決策が出ない中、その発言で一気に注目がクリリンに向けられる。

クリリンが次の言葉を述べようとした時、

「何ッ!? それは本当か!」

聞き覚えのある声が聞こえてきたと共に、いきなり扉を開いたのはラディッツだった。扉を破壊する勢いで迫ってきたので、どうしていいのか反応に困った。

何故ここにいるのかは謎だが、聞いていたのなら話は早い。

クリリンは続きを話し始めた。

「ピッコロが宇宙人で、ナメック星人だと言ってたから、この宇宙の何処かに故郷があるのかも知れない」

戦士達はハツとした。

聞いていたのだ。神様が自分の事を「ナメック星人」とブツブツ言っていたのを。

「もしも……本当にもしもだけど、ピッコロの故郷にドラゴンボールと同じような物があれば、手に入れる事が出来れば……」

「成る程！ 神様が生き返れるということかっ！」

「そうだ、神様が生き返ればこのドラゴンボールも復活して、それで悟空も生き返れる！」

歓声上がる。

皆の顔が明るくなっていき、笑顔が戻ってくる。

「これはもしかすると、もしかするかも知れんぞ！」

そう言ったのは亀仙人。

クリリンも「でしょでしょ！」と反応して、互いに笑い合っていた。

しかしブルマが待ったの声を上げた。

「素人は単純でいいわねえ……そんな夢みたいな事できる訳ないでしょ、ガツクリよ」
要は何処にあるかも分からないナメック星を、どうやって探すのかという事だった。

探す方法も無いのに喜んでる姿を見て、ブルマは言葉のままガツクリといった状態だ。

そこで意外にも声を上げたのはラディッツだった。

「任せろ。……界王様よお、聞いていただろ。教えてくれ」

ラディッツが上を見上げながら叫ぶと、脳内に知らない声が響いてきた。

『ふむ、ラディッツよ。お前はもうちっと目上の者にかける言葉を考えて方がいいぞ』

「俺の上についている奴の事は教えただろう。はつきり言って、無理だ」

会話が成り立っているが、誰なのかがさっぱり分からない。亀仙人が恐る恐る声をかける。

「北の銀河で一番偉い界王という奴だ」

『これ！ その言い方はなんだ!?!』

界王様は不貞腐れつつも、ナメック星のある場所を伝えてくれた。

しかし、その場所を聞いて驚いたのはブルマ。どこからか電卓を取り出して一生懸命に数字を打ち込んでいた。

そして出てきた答えは……

「父さんが作った世界最高のエンジンを乗せた宇宙船で計算してみたら、4339年と3ヶ月かかるわ。長生きしなきゃねく……」

ブルマはへたり込んで、そう言った。

しかしラディッツは、

「心配はするな。宇宙船は俺のとナツパの物がある。それを使えば一週間もかからん」

なんとラディッツはあの後、ナツパの行方を探すついでに宇宙船を回収してきたそうなのだ。

ナツパのいる場所はどこか分からなかったらしいが、あれだけやられて又襲いかか

る程の馬鹿では無いと言っている。仮に襲いかかって来ても、大猿では無いナツパなら何とかなると言ってくれた。

皆から笑い声が飛び交ってくる。

ブルマが「その宇宙船はどこ!？」と問いかけラディッツがリモコンを取り出すと、ラディッツでも反応出来ないスピードでブルマはひたたくった。

それに対しラディッツが「な、なんて女だ……」と息巻いていたがどうでもよい話である。

「いける、いけるわ」とブルマが言ったと思ったらいきなり明後日の方向に指を指し、

「目指せ、ナメック星!!」

クリリンや亀仙人、ヤムチャも声を合わせてそう言った。

更に大きな笑い声が場を包み、それを見たラディッツは、

「お気楽な野郎共だ……」

と言っていた。

そして病室の人に怒られるのであった。

~~~~~

数日後、宇宙船を任せてほしいとブルマに頼みこまれたラディッツは引き続きナツパの搜索を行っていた。何でも数人を乗せる宇宙船を作るとか。

それは兎も角として、ラディッツは冷汗をかいて空を飛んでいた。どうやら何処かに急いでいるようだ。

(この大きい気は誰だッ!?)

感じた事の無い気に、ラディッツは驚きを隠せなかった。

これだけの大きな気ならば直ぐに気付くはずだ。上の者の関係上、此れ程の戦闘能力を持ち合わせている者ならば、奴は無視しないだろう。

暫くして到着した後見たのは、信じられない光景だった。

ナツパが何者かによってボロボロされている。

少なくとも目の前にいる者は、ナツパ以上の戦闘力を持ち合わせているようだ。

姿は古びたマントが覆っており、よく見えない。しかし相当の実力者である事は確か  
なようだ。

直ぐに相手は気付き、声をかけてくる。

「あんたは、かの有名な弱虫ラディッツ君ではないか」

（此奴、俺の事を知っているだ?!）

ラディッツは驚愕した。自分の知られたくない過去の一つをこの者は知っているの  
だ。

ラディッツは瞬時に身構える。

「おいおい、そう身構えるなんて。争う気は無いんだからさあ」

「どの口が言ってるんだ？ ナツパをこんなにして……」

自分を知っているという事は、サイヤ人であるか、奴の下についている者だけだ。

しかし、此れ程までの戦闘力を持っているならば忘れないはず。ラディッツはそういう奴なのだ。

「聞いたぜ？ 何でもエリート連中の奴らに革命を起こしたつて。中々やるじゃないかラディッツ君」

「何者だツ!? 姿を見せろオ!」

ラディッツが叫ぶ。

すると相手は笑いながらマントを翻し、姿を現した。

「私はターレスと言う。ラディッツ君と同じ、サイヤ人だ」

「……サイヤ人、しかも女か」

珍しいなと、ラディッツは言う。

自分達の他に同士がいたのだ、それは喜ぶべきであろう。それも女のサイヤ人である。

そもそもサイヤ人は男性と女性の比率を考えると女性は非常に少なく、4：1の割合で圧倒的に少なかった。だからこそ少数民族だと言われる原因の一つでもある。

今では数える程しかないサイヤ人の一人であるから、少なからず喜ぶべきなのが。

「何故ナツパを……?」

「理由は単純、私がエリートを嫌っていたからさ。私も君と同じ、下級戦士のサイヤ人だったからね」

「そんな事で……」

理由はどうでもよかった。下級戦士と言うならば、どうしてそこまでの戦闘力を持っているのが不思議でならなかったのだ。

「一応私もお前と同じとこの配下だけ? まあ、あいつには別に忠誠なんて誓ってないがな」

「何だ?!」

知らなかった。

同じサイヤ人が同じ所で生きていたなど、聞いたこともなかった。

如何にラディッツの耳に入らなくとも、ベジータには入って来るはずだ。なにせベジータは幹部の一人であつたし、奴に対してそんな情報を集めないなんて事もあり得ない。

ラディッツが悩む姿を見せると、相手がそれに反応する。

「あれはサイヤ人が力を合わせる事を恐れているのだ。だから私とお前らを会わせなかつたんだろう、変に数を増やされるのも面倒だと思つたんだろうしね」

ま、私はあんたらなんか惚れるなんてことはあり得ない、と付け加えてくる。

「ここに何しに来た？ 裏切り者の俺を殺しに来たんじゃなくのか？」

ラディッツは汗を流しながら質問する。このまま戦闘になれば、完全に回復している自分ならば兎も角、今では分が悪いのだ。

しかし、

「そんな事はしない。寧ろ逆、君を誘いに来たんだ」

逆とは？

ラディッツは疑問に思う。

「私と一緒に来る気は無いか？ 私達は生き残つたサイヤ人のわずかな仲間、仲良くしようや」

一緒に来い、と手を出す。

その意味とは、彼女は束縛を嫌い、欲するままに動く自由な性格であり、その為には奴の存在が邪魔だと言つていた。その戦力として誘つて来たのだ。

しかしベジータやナツパのようなエリートは嫌つており、どうにも誘う気分にはならなかつたと言う。

ラディッツは再度質問する。

「奴を倒す為に、俺を必要としていると？」

「そうだ」

「お前の自由の為に、俺を配下にすると？」

「配下とまではいかないが、ある程度言うことは聞いてもらおうぞ？」

そこまで言っつて、質問を止める。

「どうした？ こっちにつく気になつ……」

「だが断る」

ラディッツの答えは、NOだった。

「俺はいきなり出てきたお前が信じられないのだ。誘った所で油断した俺を殺す可能性も大いにあるのだからな」

ここまで言っつて、ラディッツは更に気を引き締めて構える。

相手の誘いを断つたのだ。「ならば、死ねえ！」と襲いかかってきてもおかしくは無

い。

しかし意外にも、彼女は直ぐに諦めた。

「そうか、まあ可能性は望み薄だったからねえ。我が強い種族であるサイヤ人を誘えるなんて思っただけ」

大人しく退散してくれるようだ。

一先ず安心したラディッツは、しかし次の台詞に驚愕した。

「同じ下級戦士のよしみで教えといてやろう。奴も願いの球……ドラゴンボールとか言ったっけ？ それを狙って来るぞ？ ラディッツ君も狙っているのならば気をつけるんだな……」

## ナメツク星編

## 叶える為に

——あれから一ヶ月が経ち、仙豆も怪我をしているメンバー分が出来たので全員が動けるようになった。

更にブルマの父親であるブリーフ博士が遂に宇宙船を完成させたということなので、メンバー全員がブルマの家に集まっていた。

そこで目にしたのは球体の物体が二つ、予想よりも大きい宇宙船が出来上がっていた。

「これが宇宙船か……」

「凄く……大きいですね」

「完成度たけーなオイ」

「地球の科学力も馬鹿に出来んもんだ」

皆それぞれの感想を述べ、宇宙船を見る。

と、そこへ一人の老人が近寄ってきた。その人こそが、この宇宙船を完成させたブ

リーフ博士だ。

「こつちが試作品でな。もう片方が完成品じゃ。でもスピーカーを何処に付けるか悩んでな? どうせならいい場所で――」

長々と話がが続くが、割とどうでもいい話である。

そんな事よりも、早く悟空達を生き返らせる為に準備をして来た皆は、すぐさま宇宙船を発進させたい一心であった。

「乗るメンバーは俺、クリリン、ラディッツでいいんだな?」

「私もよ」

ヤムチャがメンバーの確認をすると、ブルマが大量の荷物を携えて来た。

準備は万端の様で、宇宙服も着ていた。

それを見たヤムチャ達は、苦笑しながらの反応。どうにも反応に困ってしまふ。

「ま、まあとりあえず天津飯と餃子、武天老師様は地球の事を頼みます。ブルマは本当について来るのか?」

「私がいなきや宇宙船の運転とか行つた先でなんかあつた時対応出来ないでしょ」

呆れた表情のブルマ。

やむなしと思ひ、ヤムチャ達は宇宙船に乗り込もうとした。その時、

「待て。俺からの報告がある」

ラディッツが声を上げた。

するとラディッツは別の方向に声を掛けたかと思うと、思わぬ人物が現れたのだ。

「おお……宜しく頼むぜ」

彼らはその姿を見て表情を変え、一瞬にして構えた。

それは今回の襲撃者の一人にして、彼らが戦った相手でもあるサイヤ人、ナツパだった。

困惑した。額に汗が流れる。

何故今になって現れたのか分からないが、敵であった事は間違い無い。

宇宙船を奪いに来た。ラディッツが裏切ったなどの思考が巡らされていく中、直ぐに戦闘が開始されると思いきや、それをラディッツが止める。

「待て待て！ 今はもう敵では無い。これからのボール集めに協力する為に来たのだ。敵では無い」

ラディッツはそう言うが、皆はどうにも信じられなかった。元はと言えばこいつらが元凶だというのに、どういった心変わりなのか。

ラディッツはそれも含めて訳を話し始めた。

~~~~~

ターレスが去り、その場に静けさが戻ってき始めた時、やっとラディッツは動ける様になった。

衝撃的な事実にも、身体が固まって動けなかったのだ。

奴は、ベジータなんか足元にも及ばない程に強い。それも圧倒的にだ。

身体が勝手に震え出す。やはり本質は変わっていない様で、自分より強い者には恐怖を抱いてしまう。

「情け無えなあ……直ぐにこの有様だ」

ラディッツは自分の醜態に齒軋りをした。

すると、気を失っていたハズのナツパが笑う。

「おやおや、やっぱ弱虫ラディッツじゃねえか。ハハハ……」

しかしそれは乾いた笑い声。更に無理矢理声を出した様で、笑った後咳き込んでいた。

だが流石はサイヤ人の中でもタフさはピカイチのエリート、ナツパである。あれだけの戦闘力の差にも拘らずまだ息があり、しかもこの短時間で喋れる程まで回復するのは。

と、ラディッツは思っていた。

しかし、

「ラディッツよ、俺を殺せ」

咳き込みながらもナツパが言った。

その言葉に、ラディッツは言葉を失った。自身の記憶にある中で、ここまで弱々しいナツパは初めてだったからだ。

ラディッツが理由を聞く前に、ナツパは語り出す。

「俺はエリートサイヤ人だ。それだけは間違い無い。だがどうだ？ 弱虫と馬鹿にしてきたテメエに、大猿化無しのハンデがあつても負けた。更に続けて下級戦士と名乗る女サイヤ人にまで負けた。俺が、女にだぜえ？ テメエの弟のカカロットにも負けんだろうよ。サイヤ人の王子であるベジータがあんなになつてんだからよお……。あの後ベジータがスカウターの通信で言ったんだが、『負けたサイヤ人は必要無い』だつてよ？ 負けたサイヤ人はゴミだ。下級戦士に負けるエリートなんかいらねえ……。だからよ、殺せ」

絞り出すような声で、ナツパは言う。それは「命令」と言うよりも、「願い」のよう
に聞こえた。

ラディッツはそれを聞くと自身の手をナツパへと持っていていき……

——ナツパの腕を取った。

「な、何?！」

ラディッツはそのままナツパの腕を自身の首に回して支える。

かと思うと、今度はゆっくりと浮くように動き出した。

「……殺せるかよ。長い付き合いだっただ奴を、そんな簡単に殺せるかってんだ」

「こ、殺せ! 俺はもういらねえんだッ! ベジータにも見限られて捨てられたんだッ

! どっちにしたって死ぬしかねえんだよオオ!」

ナツパは叫ぶ。血反吐を吐きながらも、叫ぶのを止めなかった。

しかしラディッツは平然とした顔でそれを聞き流し、ナツパを何所かに連れていっ
た。

暫くして到着したのはブルマの家。

ラディッツは、ナツパを介抱する気だったのだ。

ブルマはいきなりのことと驚き、介抱するその存在が判明した時は叫びながら震えていたが、ラディッツの説得がどうにか通じて、家の中に入れてもらえた。

ナツパは客室用のベットに寝かせられた。この程度ならば寝ておけば回復するとラディッツが言ったからだ。

ラディッツは部屋から出ようとすると、ナツパが口を開く。

「……何故殺さない。テメエは俺たちが憎かったハズだ。サイヤ人なら、それだけで十分に理由になる」

「言っただろ。仲間だったからだ」

「それだけじゃ足りねえんだ。それ以外に、何かあるハズだ。それがどんな理由だからねえが、それだけは読めるぜ？」

ナツパはラディッツに問いかける。後ろ姿のラディッツを追い、ベッドから落ちそうになったが、その時ラディッツは立ち止まった。

「歴戦のサイヤ人であるナツパには分かっちゃうか。そこら辺は単細胞だから分からねえと思っただがなあ……」

「おい」

今の一言で不機嫌になるナツパだったが、実はそのことをベジータに陰ながら言われ続けていたのを知っていたので何とか耐える。しかし怒りは隠しきれないようで、身体がプルプルと震えていた。

しかし、ラディッツが話し出すとそれが止まる。

「んじや言つちまうが、ナツパにもやりたい事があつたんだろ? ……例えば、種族の再興とか?」

固まった。言われた事は正にそれであつた。つまりは凶星だつたのだ。

地球に向かう前でラディッツを生き返らせる提案をしたのも、王族であるベジータに下手でぎこちない敬語を使い続けたのも、全てはサイヤ人一族の復活の為であつた。

でなければサイヤ人がほぼ滅んだ今、一族の中でもプライドの高いナツパが誰かに従うなんてことはしない。例えかなりの戦闘力の差で脅されて、痛めつけられても従わなかつただろう。

「……なんで分かつた?」

「お、当たつてたか。半分は勘だつたんだがなあ」

「茶化すな弱虫」

「な……ッ!」

ナツパも仕返しとばかりに過去の悪口を言う。

バカバカしい理由で少しの時間睨み合いになったが、暫くして互いに笑い合った。乱暴だが、部屋に響く笑い声。二人の野太い声は流星に大きかったようで、後でブルマに怒られてしまった。

少し時間をおいて、ラディッツが続きを話し出す。

「言っただろ、勘だつて。だがまあ、昔のナツパと比べると違和感があつたぐらいだな」「テメエも十分鋭いじゃねえか。……確かに俺は再興が目的だった。だがよ？　もう手遅れだろう。奴も、『フリーザ』もいるからよお」

その名前にラディッツは固まり、笑顔が消える。

それは、彼の恐怖の一つ。今までいた所のボスであり、そしてそいつは圧倒的であった。

ナツパはラディッツの表情に気付かない。

「他の星を攻める仕事をくれたのはフリーザ様々なんだがよ？　でも駄目だ。宇宙でも随一の戦闘民族のサイヤ人が圧倒される程のあれじゃあな。だから――」

ナツパの言葉が続き、愚痴のような語りが長々と流れていくが、途中で言葉が切れた。ナツパが、ラディッツの様子にやつと気付いたからだ。

ナツパはラディッツがフリーザを恐れているのを知っている。ならば今のだんまり

な状態も当たり前だと思った。

だが、ラディッツから出た言葉は、

「俺は、フリーザと争う事になる」

ナツパは口を開けたまま動かなくなつた。額に汗が流れる。

その言葉を理解するのに数秒掛かつた。何故なら、その言葉の意味する事は余りにも無謀だから。自殺しに行くようなものだ。

「し、正気かオメエ……」

言葉が震える。

あんな奴に逆らつただけでもお終いなのに、挑もうとする。それがどれだけ愚かなことか。

「馬鹿言うんじゃねえツ！ 自殺願望でもあんのかテメエ!? 力をつけて変な自信でもついたか弱虫がア!？」

悪口も御構い無しに使いラディッツを止めようとする。

しかしラディッツは、

「命をかける程に価値のあるものを探しに行くだけだ。俺は、カカロットを生き返らせ

るッ……!!」

これ程までの闘志を滾らせるラディッツを、ナツパは見た事が無かった。拳をこれ以上無い位に握り締め、この部屋が熱気に包まれるのを感じる。

本気なのだ、ラディッツは。

「……知らんぞ。どうなつても」

「ああ、ナツパは自分のしたい事をしてくれ」

ラディッツは今度こそ部屋を出ようとした。

その時。

「気が変わった。俺もそれに手を貸してやるぜ」

扉にかけた手が止まり、ナツパの方を振り向く。

「よく考えれば俺も殺される一人じゃねえか。ベジータの野郎にも一発入れねえと気がすまねえ。それによ、少ないサイヤ人の一人だ。再興を願う俺が生き返らせるのに手を貸すのも筋が通つてるしな？」

「な、何を言っているのか分かつてんのかナツパ!?!」

本当に何を言ってるのか。ラディッツがこれから挑むのは一か八かの勝負である。

上手くいけば弟が生き返り、失敗すればそれは不可能。最悪死ぬ。

カカロットの仲間は大丈夫だろう。やる気十分だし、あいつらが死んでもこちらには関係無いのだ。まあ、カカロットには関係あるが。

ともかく、人のことは言えないが、これは生死を分けた勝負所。何の意味があつてか分からないが、ナツパが手伝う理由がよく分からないのだ。

「勘違いすんなよ？ 俺は貸し借りが嫌いなんだ。サイヤ人が減るのも気に食わねえしな。このまま何もしないよりも、動いた方がイラつかねえ。サイヤ人は戦場を好むつてやつだ」

「……いいのか？」

気楽にこの馬鹿げた戦闘旅行に参加すると言ったナツパ。幾ら何でも罪悪感が湧くというもの。

だが、

「別に拒んだっていいぜ？ 勝手に参加するだけだしな」

ガハハと笑うナツパ。ラディッツはもう何も言えなかつた。

こうして、ナツパがナメック星行きに参加する事が決まった。

「で？ 俺の宇宙船は？」

「あ、すまん。壊れてたから改造中だ」

「は？」

~~~~~

「……てな感じで頼むぜ」

ブルマの証言もあり、少々理解した戦士達。

正直、信用はしていない。だが、聞いた所によるとフリーザは相当にヤバい奴らしい。サイヤ人よりも恐ろしいとか考えたくもないが、悟空を生き返らせる為には衝突は避けられない、と言っている。そんなバケモノに対抗する為にはどんな戦力も欲しい所だろう。

しかし、ピッコロを生き返らせる為に、ピッコロを殺した奴が参加するのは何とも言えない気分になるものである。

こうして、地球人三名とサイヤ人二名を乗せた宇宙船はナメック星に向けて発進し

た。

~~~~~

「クソ、フリーザの野郎が目を付けやがるとは……」

何処かの星で治療を終えたベジータが、苛立ちを壁にぶつけていた。その威力により、その壁には穴が開く。何かに八つ当たりしないと気が済まない、それ程までに良くないことが起きたのだ。

” 願いの球の情報がフリーザに伝わっていた ”

フリーザが不老不死になってしまえばこの宇宙は完全にフリーザの手に渡ってしまう。そうならば、ベジータの ” 全宇宙を支配する ” 目的も、何もかもお終いだ。

すぐさまベジータは新しい戦闘服とスカウターを手にする。

フリーザ配下の下級の兵士の声を無視し、ポッドをナメック星へと飛ばすのであつ

た。

到着

「着いた、か」

一週間と掛からずにナメック星に到着した一行。全員が外に出て、ナメック星の土を踏んでいた。

しかし、その中で五月蠅いのが一人。

「着いたか……じゃないわよ！ 宇宙船内でも直前ギリギリまで修行しちやつてえ！

こちとら寝不足だつーの!!」

「……だから来ない方が良いと言ったのに」

この無駄に大きく造った宇宙船は、ラディッツの提案で重力装置を付けていた。ブルマは別室でその影響は受けなかったが、音や衝撃は消せなかった様だ。

修行する度にギャーギャーと抗議していたので、皆からの印象は“五月蠅い女”となつてしまった。

そして、皆の心が初めて一つになった瞬間でもある。

「……地球の女は皆こうも五月蠅いものなのか？」

「いや、彼女は結構肝が座ってるから……」

ヤムチャとラディッツがひそひそと話している。ブルマに気付かれないうちに、見えない所で隠れながらだ。そうしなければ、又五月蠅く怒鳴ってくるだろう。

それはさて置き、まずは状況の整理である。ラディッツはヤムチャやクリリンに確認する。

「一先ず、ドラゴンボールはこの機械でどこにあるか分かるのだな？」

「ああ、全部でボールは7個。一つでも欠けていたら意味を成さない」

「原住民のナメック星人は、およそ1000人と言った所だが、邪悪な気は一つも感じられないな」

「ならばフリーザもまだ到着していないのだろう」

それならば都合だ。交戦せずに願いを叶えられるならばそれが一番なのだから。

クリリンがドラゴンリーダーを取り出し、スイッチを入れる。

取り敢えず、一番近いドラゴンボールからだ。もしもの為に固まって動いた方が良さだろう。いきなりの事に対処する為には戦力を分散するのは良くない行為だ。もしもフリーザの軍が現れてしまえば数で押し切られてしまう。幹部やフリーザ自身が相手になれば、更に絶望的な戦力差になってしまうだろう。

宇宙船はホイホイカプセルにしまい、ブルマには直ぐに地球と連絡できるように小さ

なドーム状の家で待つてもらうことにした。何かあった時の拠点にもなるだろう。

ある程度気が多い場所へと地面を走って移動する。ラディッツとナツパ曰く、「スカウターで気付かれないようにする為」だと。

ヤムチャとクリリンは理解し、気を抑える。ナツパも、これまでの修行でコントロールを覚えていた。

静かに、そして素早く目的の場所へと四人は走り続ける。

~~~~~

——とある宇宙船の中、グラスを片手に不気味に微笑んでいる者がいた。

その名はフリーザ。宇宙の帝王とも呼ばれ、全宇宙から恐れられている存在だ。

「私に永遠の若さと命を、ですか……素晴らしいではありませんか!」

「ハッ」

フリーザの言葉にこうべを垂れたのは側近であるザーボンとドドリア。二人とも相当の実力者である。

フリーザはザーボンに尋ねる。

「ナメック星までは、後どのくらいで着きそうですか？」

「ハッ、後数時間もすれば見えてくるかと。先に兵士達を偵察に行かせました」

「ご苦労様」

ニツコリと笑うフリーザ。

ザーボンは更に頭を深く下げる。

「それにしても、願いの球ですか……噂には聞いていましたが、まさか実在するとは思いませんでしたよ」

グラスの中の物を飲み下し、椅子に座る。部下の一人が代わりに注ごうとしたがそれを止め、ザーボンとドドリアの前に立った。

「私の邪魔をする者は、全員殺してしまいなさい」

決して表情は変えず、しかし異様な殺気を持ち合わせているその言葉は、部屋にいるフリーザ以外の全員を震え上がらせるのには十分過ぎる程のものだった。

と、そこへ兵士の一人が部屋に入って来た。

「フリーザ様、ご報告申し上げます。ベジータが我々よりも先にナメック星に到着した様です」

その報告に数人がどよめく。

しかしそれを聞いた側近のザーボンとドドリアは全く微動だにせず、そしてフリーザが口を開いた。

「ベジータですか。どうやら私の為に球集めを手伝う雰囲気ではありませんね。無断で他の惑星に向かったり、破壊したりと……」

「どう致しますか?」

ザーボンが聞き、返答を待つ。

すると少しの間を置いてゆっくりと、

「殺してしまいなさい」

何度も聞いたその言葉は、しかしいつも冷酷であり身体がまるで凍てついたかの様なプレッシャーを感じる。全員は誠心誠意の敬礼を決めるのだった。

~~~~~

「な、なんで貴様がッ!!」

目の前の人物に驚愕するラディッツ。

その相手とは、自分と同じサイヤ人でありつい先日に対敵したエリート、サイヤ人の王族でもあるベジータだった。

まだ直接戦った事は無いクリリンとヤムチャはその圧倒的な殺意に恐れ戦いている。

ナツパが怒鳴る。

「ベジータッ!! あんな事を言っつてよくもぬけぬけとッ!!」

「ほう、まだ死んでなかったのかナツパよ。てつきりもう死んだのかと思っただぞ?」

「貴様ッツ!!」

サイヤ人の再興を願うナツパも、純粋な怒りが同族であるベジータに殺気を向ける。

瞬間、ナツパはベジータに襲いかかった。全身に気を纏い、真つ直ぐ突撃していくナツパ。サイヤ人の強靱な肉体とナツパのタフさを兼ね備えたそれは単純にして強力。宇宙船での修行でナツパは驚異のパワーアップを果たし、地球に来た時とは比べ物にもならない程のスピードを得ていた。

しかし、捉えていたハズのベジータが消える。急ブレーキをかけたナツパは辺りを見渡そうとして、急に頬に衝撃が走った。

吹っ飛ばされる。その際に見たのは、脚を振り切った状態のベジータだった。

「相当な力を手に入れた様だなナツパ。だが、俺は一步も二歩も更に上回っているのだッ！」

高笑いしてベジータは言う。

ナツパの実力は共に修行した仲である三人が一番良く分かっている。だからこそ、今起きた事が信じられなかった。

そもそも、何故ここにベジータがいるのか。フリーザ関連でドラゴンボールの事を知ったとするならば理解出来るが、それではフリーザがいない理由が分からない。

そして、ドラゴンボールの反応を追ってベジータと会ったということは……

「ベジータ……お前、ドラゴンボールを持っていないな？」

「ほう？ 良く気が付いたな。お前らに気付かれない様に地面に埋めたのだが……」

やはりそうらしい。

ベジータは笑みを消し、手を寄越す。

「さあ、お前らも持つているなら出せ。そうすれば命だけは助けてやろう」

少し焦っている様に感じる。

クリリンは持つてない事を正直に話すと「どうやら嘘や出任せを言っている様では無いな……」と諦めた。

そこで違和感に気付く。ベジータの手が生物か何かも分からない液体で濡れていた

のだ。それだけでは無い。よく見れば、同じ様な液体が所々に付いていた。クリリンは質問する。

「ベジータ、その手はどうした？」

「ハゲ頭、お前は察しが良いな。そうだ。そのドラゴンボールとか言うのを手に入れる為に犠牲になったこの星の住民のものだ」

なんと、ナメック星人を殺したのだ。

界王様によれば温厚な種族であるとされたナメック星人。確かな理由は分からないが、無理矢理にでも奪い取ったのだろう。

クリリンとヤムチャはベジータを睨み付ける。しかし、手は出せないので歯を喰いしばる事しか出来ない。

それを見てラディッツは、

「本当に地球人というのは不思議な種族だ。知らない者の為にそこまで怒れるのだからな」

ベジータへ向ける視線を変えずに感想を述べる。

ベジータやナツパも同意見の様だ。他族どころか、同族でさえ殺してしまうサイヤ人は感性そのものが違うのだろう。

暫くの睨み合い、というよりも停滞状態に陥ったが、突然ラディッツが声をかけた。

「ベジータ。俺たちに手を貸してくれんか？」

「なに？」

クリリンは素っ頓狂な声を上げて反対した。ヤムチャも正気を疑ったが、ベジータが笑いながら言った。

「気が触れたかラディッツ。今や敵同士である俺と手を組もうと言うのか？ 笑わせるなっ！ 誰がお前らなんか手に貸してやるものか」

「メリットならある。ドラゴンボールの情報を提供しよう」

「……ほう？」

笑いを止め、ラディッツの話に耳を傾けるベジータ。

ベジータもドラゴンボールを狙っている事は明白。願いの理由も、最大の障害であるフリーザの抹殺が目的の一つだろう。ならば無闇に敵をつくるよりも、少しでもフリーザに対する戦力が欲しい。

しかし、

「馬鹿めが！ 下級戦士のお前と手を組むかア！ それに、願いはお前らが横取りする作戦でも考えているのだろう。ならばここでお前らを半殺しにして情報を吐かせる方が性に合うぜ？」

その言葉を聞いて、クリリンとヤムチャは戦闘態勢に入る。ナツパも黙ったままだっ

たが、立ち上がり構えた。

しかしラディッツは、

「もう、遅い」

上を見上げて冷汗を流していた。

皆は上を見上げるが、その理由が何なのか分からない。しかし、ラディッツは上を見上げたままだ。

だが、直ぐにそれが分かった。分かってしまった。

地球人組はあまりの強大な気の大きさに膝を突いて息を切らし、ラディッツを除くサイヤ人は「遂に来たかッ！」とその方向を睨み付けた。

しかし、ラディッツが一番先に気付いたのは類稀なる危機管理能力の賜物だろうか。どちらにしても絶望が訪れた事には変わらない。

フリーザの宇宙船は、ナメック星に着陸した。

軍勢

どうしてこうなった。

いや、こうなる事は予想出来ていた。出来ていたのだが、まさか此れ程までの軍勢だとは思わなかったのだ。

ラディッツは迫り来るフリーザ軍の兵士を相手にしながらそう考えていた。フリーザの宇宙船から出てきた複数の兵士が、自分達目掛けて飛んで来る。

今相手にしているのは集められたフリーザ軍の中でも上位に位置する兵士達。戦力は10,000を超えるものの、惑星侵略の際に戦闘を繰り返して生き残って来た者ばかりが集まっていた。

かつての自分では勝てないレベルの兵士達を、一度に相手取るラディッツ。修行し強くなった事で直角以上の戦いを繰り返していた。しかし、こういった数の暴力はスタミ

ナが尽きた時が一番危険だ。どれだけ耐えられるかは分からないが、これ以上数が増える
と厄介だろう。

ナツパはと言うと、自慢のタフさを生かし多くの敵の前に立ちながら得意の範囲爆発
で一度に消し去っていた。まだ余裕のある顔付きで相手取っていたので大丈夫なのだ
ろう。

キツイのは地球人組である。あれから修行を重ね、予想以上の成長を見せたがせいぜ
い戦闘力は5,000程だ。ナツパが多く of 兵士を葬ってはいるが、より強い兵士が向
かったとすれば幾ら何でもやられてしまうだろう。

ベジータはこれを引き連れてきたキュイと何処かに飛んでいつてしまった。キュイ
は何かとベジータに突つかかって来たので、今回もそれだろう。確かベジータとキュイ
の戦闘力はほぼ互角だったはず。負けはしないだろうが、タダでは済まないだろうと予
測する。

ラディッツがそう考えていると、死角からの攻撃がラディッツを襲った。考え事をし
ている暇も無い様だ。

先ずはこの戦闘に集中するのみ。ラディッツは唸り声を上げて複数の兵士に立ち向かって行った。

~~~~~

「ようベジータ。久しぶりだな」

「俺は貴様になど会いたくは無かったがな」

「俺もそうだが、しかしフリーザ様の御命令で堂々と貴様を殺せる訳だ。やっとライバル同士、決着をつける時が来た様だな」

「ライバル同士だと?」

ラディッツたちの居場所からは流れ弾も来ない程離れた場所で、二人は相見えていた。

キュイはニヤニヤしながらスカウターのスイッチを押す。

「お? ククク、衰えたなベジータ。戦闘力が僅かに俺様の方が上向いてるぜ?」

「そう思うならそのままスカウターの数値を見ているがいい」

ベジータがそう言うと、自分の気を集中させ上昇させていく。

キュイはニヤついた顔を止めずにそれを見ていた。しかし、数値がみるみる内に上昇していき、表情が変わる。

「キュイ、フリーザの元でぬくぬくとしていた貴様と、いつまでも互角だと思っかア！」  
「21, 000……23, 000……馬鹿なツ!? まだ上がっていく!?」

恐れ戦くキュイ。

直ぐにでも殺しにかかろうとするベジータを前にして、スカウターが壊れて隙だらけだ。

しかし、ベジータは敢えてそれを見逃しキュイに詰め寄る。

「どうだ分かったか？ 実戦を繰り返し、より強くなっていくのがサイヤ人だ。今の俺と貴様とは天と地の差があるのだ」

腕組みをしながらベジータは言う。

だが、キュイは信じない。スカウターを投げ捨てベジータを睨み付ける。

「せつかく部隊のリーダーとして仕事を引き受けてやったのに、こんな故障品を渡しやがって……！ どうせスカウターの故障だ！ 出鱈目だ！ こんな……こんなのがあ  
るはずが無いッ！」

キュイはそう言うと、不意打ち気味に気弾をベジータ目掛けて撃ちまくる。連続して

撃ち出されたエネルギー弾は、何回も爆発を起こし地形を変えていく。

トドメを刺さんとはかりの駄目押しのエネルギー弾。巨大なエネルギーがキュイの上で形作られ、それを最後に投げ付けた。大爆発が起こり、光が辺りを包む。

爆発が止むと、そこには荒れ果てた地面しか残っていないかった。

「は、ハハハ……馬鹿めがッ！ 粉々に砕け散りおったわ！」

そう判断したキュイは大声を上げて笑った。

しかし、それは直ぐに乾いた笑い声となる。

「間抜けめ。その程度で本当に俺を殺せるとでも思ったのか？」

背後からかけられた声の持ち主は、嫌でも理解出来た。

「べ、ベジータ……!?!」

冷汗が止まらない。キュイは先程のスカウターの数値が本当だという事を悟った。もはや戦う意思など無く、脱兎の如く逃げ出す。

しかし、時既に遅し。

ベジータは気弾を放ち、キュイのスピードを上回って頭を撃ち抜いた。頭を撃ち抜かれた胴体は真つ逆さまに地面に落ち、ベジータの足元に叩きつけられる。

「ふん、最期がこんな結末とは、何とも貴様らしい馬鹿な最期だったな」

ベジータはそう言うのと、かつてキュイだった物を持ち上げて上に放り投げる。

更に、先程撃ち出した気弾とは比べ物にもならない大きさのエネルギー波を撃ち込み、それは遙か上の空で爆発。塵も残さず消し去ったのだ。

それを見たベジータは、

「へ、汚ねえ花火だ……」

そう言つてその場を後にするのだつた。

~~~~~

その頃、フリーザが乗つた宇宙船では――

「ス、スカウターの故障じゃ無かつた……ベジータの奴、あつさりとキュイを殺しちまいやがつた……」

「という事は、ベジータは我々の戦闘力を上回ると言うのですか？」

ベジータとキュイが戦闘を行う前、ザーボンはスカウターをベジータにセットしていたのだ。しかし、急激な戦闘力の上昇により旧型であつたザーボンのスカウターは耐え

切れず爆発し、それに気付いたドドリアが戦闘力を測っていたのだ。

それを聞いたフリーザは、

「ふむ、地球で何かコツでも掴んできた様ですね。戦闘力30,000とは……」

その数値は、ザーボンやドドリアを上回る数値の様だ。

これではもしベジータが願いの球を奪いに来た時、この二人では太刀打ち出来ない。

ザーボンは更に報告を続ける。

「フリーザ様。ベジータの反応の他にも、高い戦闘力を四つほど確認しました。戦闘力は二つは5,000前後のモノであり、もう二つは10,000を超える戦闘力の高さでした。今、キュイが引き連れていた軍と一戦交えております」

「何ですって?」

さほど驚いては無いが、フリーザが反応する。しかしその表情は、不老不死の願いを前にしていた笑みが消えていた。事が思うように運ばず、不機嫌になってきている様だ。

「何者かは知りませんが、態度が良くありませんね……」

フリーザは少し考えた後、一つの案を口にした。

「ギニュー特戦隊を呼びましょうか」

それはフリーザ配下の全宇宙から集められたエリート集団の事である。

戦闘力は側近である二人を遥かに超える程のものであり、積極的に動かないフリーザとは違い、明確な恐怖が全宇宙に噂となつてばら撒かれていた。

この言葉にザーボンとドドリアは驚く。

「ザーボンさんとドドリアさんは軍と合流し、その邪魔者を消しなさい。くれぐれも、ベジータに御気を付けなさいね」

フリーザの命令に答えると、直ぐ様目的地へと飛んでいく二人。

ギニュー特戦隊を呼ぶ為に下級兵士に命令をかけるフリーザは、ふと思いついた様に一言付け加えた。

「ああ、あの兄弟も呼びなさい。戦力は多いに越したことはありませんからねえ」

~~~~~

「一通り片付いたか……」

兼並み戦闘力の高い兵士は片付いた。これならば、地球人組に向かっていく強い兵士はもういないだろう。

ナツパは余裕の表情で残り少ない兵士を蹂躪していた。一応顔見知りの兵士もいたというのに、戦う事にほんの少しも躊躇していない様に見える。

肩で息をしてはいるが、クリリンとヤムチャも無事な様だ。多くはナツパが受け持つてくれているので、余程の事が無い限り死なないだろう。

兎に角疲れた。

ラディッツはこんな量の敵と戦うのは久しぶりであった為、顔には隠せない程疲労の様子が見える。

だが一先ず大丈夫だろう、そう思った。

気を抜くのはまだ早い。

迫り来る二人の高い気を持ち主。高速でこちらに向かって来ているのが嫌でも理解

出来た。

大した時間もかからず到着する。それは、ラディッツがよく知っている者たちだった。

「誰かと思えば、死んだと思っていた猿野郎が二匹ですか」

「けつ、テメエらもフリーザ様を裏切るつてののか？ 馬鹿な野郎ばかりだな、サイヤ人てのは」

それは、フリーザの側近であるザーボンとドドリアだった。

ナツパもそれに気付き、ラディッツの横に立つ。

「おうおう、お次はフリーザの金魚の糞か？ こりゃあ御丁寧なこつて」

いつになく強気である。いや、ベジータにやられた後なので気が立っているのだろうか？

ラディッツは体力の減った今を狙われては中々に厳しい状況では無いのかと思っただが、消耗している事がバレれば相手を勢いに乗らせてしまう。そう思つて何とかラディッツもナツパの様に強気に構えていた。

「へへ、お前らの様なゴミが俺たちに勝てると思つてんのか？ ベジータにも遥かに劣るお前らがよお？」

ドドリアが挑発する。しかし事実だ。

こいつらの戦闘力は20,000を優に超える。今はどうかは知らないが、かつてのベジータの戦闘力より上なのだ。腐ってもフリーザの側近、そう簡単にはいかないだろう。

ドドリアの口は更に悪くなっていく。

「それにお前からこそベジータのオマケみてえなもんじゃねえか？ 下級戦士のラディツ

ツに、そんな戦闘力でエリートの名ツツパがだぜえ？ ハハハツ、傑作だア！」

下品に声を上げながら笑うドドリア。隣ではザーボンも口に手を持っていきながらクスクス笑っている。

ここまで言われっぱなしでは、今まで堪えていたが流石にムカついてくる。

ラディツツは言い返そうとした。しかし、すぐ横の気が上昇している事に気付き口を噤む。何だか変な汗が流れ、横に恐る恐る視線を向けると、

「くけ、かは、ぐい、言ってくれるじゃねエカツツ!!」

爆発寸前である。

頭の血管を疼かせて顔を歪ませるナツツパが、ラディツツの肩に手を置く。

「ラディツツ、ドドリアは俺に寄越せ。瞬殺して直ぐ加勢してやつからよお……」

戦闘準備が万端なのは言わずとも分かる。

肩に添えられたナツパの手がいつの間にかガツチリと搦んでいるので地味に痛い。

「大口を叩けるのも今の内だけだ。軍と戦った後の体力でどこまで保つかな？」

ザーボンが言う。

やはりお見通しだったようだ。改めて考えると、幹部級との戦いに消耗した今では分

が悪いどころでは無いだろう。

しかし負けられない。

ここで負けたら何をしにここまで来たのか分からなくなるのだから。

## 恐ろしきはサイヤ人

幹部と言われる彼らはやはり強い。

ラディッツはザーボンとの拳や蹴りの打ち合いでそう感じた。先程殺していった上級の兵士とは違う、得体の知れない何かを隠し持っているような強さを持つ相手は、宇宙から選ばれたエリートなだけはある。

ナツパも瞬殺とは言っていたが、やはり体力は消耗していた様で決着はまだついていない。

空中で互いの蹴りが決まり、吹っ飛ばされる二人。ラディッツは受け損なって顔面に真正面から食らう。ザーボンへは横腹に決まって、そこを押さえていた。

「相当に腕を上げた様だなラディッツ。あそこからここまで強くなつた事は評価してやる」

「けつ、テメエなんかに褒められても嬉しくなんかねえんだよ」

口から血を流し、それを吐き出すラディッツ。

ザーボンはまだ余裕がある様に見えた。長引けば長引く程ラディッツは不利になつ

ていくだろう。

ふと、ヤムチャとクリリンの姿が目に入る。他に兵士がない所を見ると、何とか全ての兵士を倒したのだろう。今は立ち止まっており、参戦しようか迷っている様だ。しかし、彼らはラディッツとナツパ以上に疲労している。今のままでは完全に足手纏いになつてしまふだろう。

ラディッツはクリリンとヤムチャに向かつて叫んだ。

「お前らは来るなツ！」

「成る程、やはり彼らもお前達の仲間だったか。そちらに余所見とは随分と余裕だなラディッツ!!」

視線が逸れたラディッツ目掛けて、ザーボンは膝蹴りをかます。それは土手つ腹のド真ん中に入り、肺の空気が押し出される。

だが、ラディッツは仰け反らない。我武者羅に気弾を撃ちまくり、ザーボンの視界を妨げる。一つ一つは威力の少ないモノだが、ザーボンはそれを全て避けてみせた。

その隙を見て、クリリンとヤムチャは飛んでいく。ラディッツの言葉が届いていたのだ。

兎に角遠く、ここでは無い遙か遠くへ。

それを見たラディッツはニヤリと顔を歪ませ、撃つのを止める。

「どうした？ 無駄な抵抗はもう終わりにして、やっと降伏する気になったのか？」

「そんな訳ねえ、邪魔者がいなくなつて清々したつて所だ。これで思う存分暴れられるぜエ……」

先程まで無かつた獯猛な闘争心が、ラディッツから発せられる。

今まで冷静に動いていたが、サイヤ人であり、その闘争本能は他のサイヤ人と変わらない。いや、ストレスに耐えてきたラディッツだからこそ、その爆発力はより大きいのかも知れない。

この時初めて、ザーボンにはラディッツに恐怖を感じた。

~~~~~

「なあ、本当に戻つて良いのか？」

「だけど俺達に出来る事はもう何もありませんよ」

武空術で空を飛び、逃げる事に成功した二人。

残つてはいたかつた。しかし、あのままでは足手纏いなのは火を見るよりも明らか

のは確かだ。

何より、あの戦闘を見て……

「……レベルが違うな」

「そうですね、特にナツパの所なんか」

近寄れなかった。いや、近付きたくも無かったが、それ程激しい戦いが起きていたのだ。

それにナツパが、

「正直怖かったぜ。よくあれと戦えたなクリリン」

「まあ、あの時は必死でしたから。今までは無理ですね、あんなに血走って……」

敵よりも、味方であるハズのナツパが恐ろしく、戦慄してしまっただ。あれこそがサイヤ人の本能なのだろう。思い出すだけでも武者震いでは決して無い震えが、身体を襲うのだ。

兎に角、今は戻って態勢を立て直す事が先決だ。サイヤ人の二人は大丈夫だと思う。二人の無事を願いつつ、その場から離れるのであった。

~~~~~

ラディッツとザーボンが激闘を繰り広げる中、ナツパの方では――

「どうしたア!!? 俺様はまだまだこんなもんじゃねエぞドドリアアアツ!!」  
「がはッ!!? グフッ!!? ……お、おのれッ!!」

ナツパがドドリアを圧倒していた。

今の状況を三行で説明すると、

ナツパが

ドドリアを

パワーで圧倒。

これ以上無い程単純な理由だ。

ドドリアはパワーで相手を殲滅する戦闘スタイルなのだ。姿を見ればそれが分かるだろう。

それを、一番の長所をナツパは力尽くで抑えたのだ。勿論ドドリアは必死で、先程ま

で見せた余裕の笑顔はとうの昔に消え失せている。

何がここまでナツパを強くしたのか。その理由は、ラディッツと似てストレスであった。

これまでの短期間で、ナツパは敗北を重ねた。これまでサイヤ人として勝利して来た彼は、此れ程までに無い屈辱を味わったであろう。

下級戦士のラディッツに負け、

自らを下級戦士と言う女サイヤ人に負け、

何もしなくても強かった自分が修行して、それなのにベジータに文字通り一蹴された。

もはや怒りのボルテージは最高潮に達し、今彼を馬鹿にした者は漏れ無く死のプレゼントが待ち受けているだろう。

その記念すべき一人目選ばれたのがドドリアであっただけの事。何も可笑しくは無い。

「可笑しいだろオ〜!? 何で猿野郎のテメエがここまで強くなりやがったツ!」

いつの間にか地面に叩きつけられ、埋もれていたドドリアが這い上がり叫んだ。

それに対し答えたのはナツパの拳。受け構えの姿勢が出来ていなかったドドリアはボールの様に弾んで跳んでいき、その先にあつたのは岩壁。ドドリアは何も出来ずにその岩壁を砕き、その身を突っ込ませた。

「く、クソがアアア!!」

砕けた岩を吹っ飛ばしながら、ドドリアは立ち上がった。

しかし、ナツパの追い討ちには気付かず、首を掴まれ引き摺られる。

「ぐ、ぐぎゃ……」

「ハーハツハアツ!! テメエのパワーはその程度か?!!」

ナツパの腕を引き剥がそうと、ドドリアは両手で掴む。更に反撃に出たドドリアは足蹴をナツパに食らわせ続ける。

だが、ナツパは怯まない。持ち前のタフさか、脳内麻薬が溢れる程に出ているのかは知らないが、全く効いていないのだ。

上空まで持ち上げ、一気に叩きつけるナツパ。ドドリアの口から血が出る。

だが、フリーザの側近としての意地か。握る力が若干緩くなつた所を見計らつて脱出し、距離を取った。

「こんなの間違つてる……間違つてるぞオツ!!」

残り全てを込めたエネルギーを口の中に溜めて、ドドリアは撃ち放った。地面を削

り、ナツパに向かっていく。

だが、ナツパは避けようともせず、ただ突っ立っているだけだ。

「痛め付けるのも飽きたぜ……」

そう言つて、ナツパも口を広げる。撃ち出されるのはナツパの大技。顎が外れる位に大口で、ドドリアのエネルギーを簡単に撃ち破つた。

「ぐおおお……」

ドドリアは手で抑える。撃ち負けてもなお、諦めていないのだ。

だが、そんな足掻きも虚しく光に呑み込まれるドドリア。こうしてこの勝負、ナツパの余裕の勝利で決着がついた。

「さて、ラディッツは死んでねえだろうな……」

~~~~~

(……！ ドドリアの気が……消えた……?)

ザーボンとの戦いの最中、ラディッツはドドリアが死んだ事を気で感じていた。ドド

リアが死んだという事はつまり、ナツパの勝利だという事。

ならば、此方もさっさとケリをつけよう。

「くっつ、ラディッツ如きがちよこまかと……ッ!!」

ザーボンの連撃を紙一重で避けるラディッツ。あれから大してダメージも受けていないラディッツは、ザーボンの体力を削る作戦に出た。

威圧感からのプレッシャーにより相手の精神を削り、隙を見つければ鋭い一撃を与え、防御では無く無防備な構えになる事で攻撃を誘い、それを避けるのだ。

プレッシャーに吞まれ、下級戦士に圧倒されるエリートを否定したいザーボンの攻撃には焦りが含まれており、躲すのは容易であった。

「いい気になるなよオ、私を怒らせた事を後悔させてやるッー」

一旦動きを止め、ラディッツに向かつて怒鳴り散らすザーボン。余りの怒りに、彼の美形の顔がいつものそれでは無く、更に血と唾液を入り混じらせたものを吐き出していた。正直言つて、こんな姿は色々な意味で見たくない。

と、その時ザーボンの身体が変わり始めた。

身体が膨張し、細身であった先程のザーボンの面影は無く、ドドリア以上の太さになる。顔は人の形よりも爬虫類に近い姿に変化し、元の美顔は消え失せた。更に、全身を余す事無くイボイボの粒が出てきて、此れではまるで別人だ。

「こんな姿は見せたくなかつたのだ。醜いからな……だから、この姿を見せた相手は誰であつても殺してきたツ!! 貴様も、殺してやるぞラディッツ!!」

戦闘力も段違いに上がり、あつたハズの焦りが消える。

そしてザーボン、ラディッツに掴み掛かった。反応出来ず、抵抗も出来ずに捕まってしまう。

「ぐお、離せツ!」

「グフフ、離さんぞオ……」

物凄い力で押さえ付けられる。

ザーボンの両手がラディッツの頭を掴み、そのまま頭突き。何度も何度もカチ割る位に全力で、ラディッツの額には血が滲む。

お次は胴体ごと抱きつく様に。そして一気に無理矢理上空へ引つ張られた。ザーボンの拘束から抜け出せ無のまま、天高く身体を持つていかれ、そして一気に急降下した。突然だが、地面と水面は、叩きつけられたら何方が衝撃が強いだろうか？

答えは水面である。

何故かと言うと、例えば水面に物体を時速80kmで叩きつけると、水面の硬さは鋼鉄を超えると言う。

土や岩の地面と、鋼鉄では何方が硬いかと問われたら一目瞭然である。

最早人外の速さの彼らはそれを遥かに超え、ザーボンはラディッツを水面に叩きつけた。

人を打ち付けた音とは思えない鈍い音が着水と共に聞こえ、湖が干上がる程に膨大な水飛沫が吹き上がり、辺りに降り落ちた。

「ハハハ、これではひとたまりもあるまい……」

ザーボンは勝利を確信していた。

変身前とは比べ物にならない戦闘力で不意打ちの連打、からの今の今の大技である。

あの威力では良くて戦闘不能。最悪の場合、身体が粉々になっても可笑しくは無いのだ。

「さあ、ドドリアの方はどうなったかな？ あの大口で死んでいたらお笑い者だが……」

ザーボンはもう片方の戦場へ飛ぼうとする。その時、スカウターが小さいエネルギー弾に破壊された。

ザーボンは警戒する。まさか、ラディッツが無事だということなのか？

そしてその予感、現実へと変わる。

「変身するとは、聞いた事も無かったぜ。だが、スカウターは破壊出来た様だな」

戦闘服はボロボロになり、身体中が傷だらけになりながらも、ラディッツは生きていた。

ザーボンに驚愕する。

「あ、あり得んツ！ 何故無事なのだ!？」

「はっ、何でかねえ……」

ラディッツははぐらかす。

ザーボンは確かにボロボロになっているラディッツの身体を見て攻撃は当たっているのだと思った。しかし、サイヤ人の肉体が強靱でタフさを兼ね備えているとしても、あり得ないのだ。

「さて、本来なら使うハズでは無かったんだが、この戦闘力差では使わざるを得ないな」
そう言うと、ラディッツが纏ったのは紅いエネルギー。肉体が膨張し、輝き始める。
少なくともザーボンはこんなものは知らなかった。眼中に無かったラディッツが、ここまで脅威の存在になるとは。

「そ、そうだラディッツ！ 俺もフリーザ様……いやいやフリーザには嫌気が差していったんだ！ 手を組もうじゃあないかつ！」

「お前程の奴が命乞いとは。プライドまで捨てたか」

それ以上は何も言わず、ラディッツはザーボンを見据える。

ザーボンは恐怖し、逃げ出した。

「逃がさん」

「何ッ!？」

しかし まわりこまれてしまった!

ラディッツは腹にポディブローを食らわせる。その威力に、戦闘服ごとザーボンの腹は貫かれ、オマケとばかりに気功波をそこにぶちかました。

宙を舞い、地べたに落ちるザーボン。

言うまでもなく、即死。

二度と動かぬ屍と化したその姿に、かつての美しさは無い。

その頃――

「これで三つ目か……ドラゴンボールとやらは」
各地の村を襲い、己の願いの為だけに動くサイヤ人が、そこにいた。

最長老宅にて

側近の二人をそれぞれ倒したラディッツとナツパは合流し、一度ブルマのいる宇宙船を止めた場所へ走っていった。

例によって、気は抑えたままだ。

到着し、待っていたのはブルマとヤムチャ、クリリンの三人。皆それぞれ無事であった事に安堵する。

ナツパに至っては、無事どころか機嫌が良いが。

「ガハハ！ ドドリアの野郎、ザマア見ろってんだア！」

「さつきからずっとこの調子ねえ……一体何があつたの？」

ドラゴンボールも手に入れてないのに、ブルマはその様子を不思議に思った。

しかし、誰かに聞こうとするとヤムチャとクリリンは知らんぷりをするし、ラディッツは「分からん」の一点張りだった。

誰も知る由も無いだろう。ナツパのストレスが最高値であり、それを発散したばかり

だという事は。

取り敢えず、今回の出来事を伝えてこれからの行動を話し合う事にした。

ヤムチャが一つの提案を出す。

「な、なあ、今回は奴らにドラゴンボールの願いを譲る事にして、一度帰らないか？」

ヤムチャの提案に、クリリンも賛同する。

しかしブルマは、

「神龍を、ピッコロ大魔王の時みたいに殺されなきゃ良いけどね……」

「まず、フリーザに願いを叶えさせた時点でこの星、いや全宇宙が奴の手に渡るだろうかな」

シヨンボリとするヤムチャとクリリン。何でこうも行く先々には困難が伴うというのか。しかも今回は全宇宙を巻き込む程の規模で、既に死に掛けた程危険であった。

これからもそんな危険、否、それ以上の危険がドラゴンボールを集める際に付き纏うのだ。

「まずは、ドラゴンボールを一個でも回収する事を考えるべきだ。最悪、フリーザの願いを防ぐ為だけでも意味がある」

「ドラゴンレーダーみたいな機械はあるのかしら？」

「奴らはドラゴンボールの事を知り、しかも回収していない状態だ。恐らくはナメック

星人を探し出して聞き出すのだろうか」

ブルマはラディッツからの数少ない情報を頼りに、頭の中で色々と考えを構築していく。

そして出た結論は、

「ドラゴンボールを一個だけ、探してもらおうわ」

ラディッツとナツパは「ほう……」と声を出し、ラディッツが質問する。

「何故一個だけなのだ？」

「ドラゴンボールを探すにしろ、逃げ出すにしろ、貴方達は顔を知られ過ぎちゃったのよ。もし逃げて地球にそんなヤバイ奴らがやって来たらお終いだし……どうせフリーザっていうとこの軍はドラゴンボールを集めるでしょう？ だから一つだけ探し出して、何処かに隠すのよ。うまくいけば、奴らがそれを探す間に集めた残りを奪える訳だしね」

元々、この宇宙船はそのフリーザ軍の船を改造した物だ。そうなれば直ぐ追いつかれるだろうし、ベジータやナツパもこの地球に行った事をそのフリーザは知っているだろう。それで地球に来られたら、ブルマの言った通りお終いだ。

「さっきそのフリーザ軍の船が到着したって所から、まだ集まって無いハズよ。そこと反対の方向に行つて、まだ回収されてないドラゴンボールを探して、もし会えるならばナメック星人にもそれを伝えると良いかもしれないわね。もしかしたら、手を貸して貰えるかもしれない」

「成る程なあ……」

ベジータはナメック星人を殺してドラゴンボールを手に入れていた。フリーザ軍も同じ事をするだろう。

「それでは急ぎましょう！」

吹っ切れたクリリンが立ち上がる。

それに続き、ラディッツとナツパも立ち上がった。

「はあ……行くつきやねえか……」

不貞腐れつつも、ヤムチャも立ち上がり渋々後をついていくのだった。

~~~~~

フリーザ軍の目を掻い潜り、やっと一つ目のドラゴンボールの反応地点に到着した四人。

「まさかもう此方にまで探索範囲を拡げているとはな……」

「奴の事だ。先に下見の下級兵士でも回したんだろうよ」

ナツパの推測は当たっていた。

キュイが引き連れていたのとは別の軍が、ドラゴンボール搜索の為に母船が来る前から到着し探し回っていたのだ。

「だとしたらフリーザの所にもドラゴンボールがあるかも……」

「それは無い」

ラディッツは即座に否定する。

皆は言い切ったそれに疑問を持つと、直ぐにラディッツは説明し始めた。

「ドラゴンレーダーをよく見ろ。ドラゴンボールの反応は3つを除き全く動いていない。動いてる反応は、恐らくベジータだろう。あいつはドラゴンボールを盗まれる程間抜けでは無いし、フリーザの手下なら真っ直ぐにフリーザに届けるだろう」

誰の手にあるよりも、奴の手にあるのが一番安全であり、危険だ。

取り敢えず、全て揃わなければ神龍が出て来ることは無い。早速彼らはドラゴンボールを手に入れるべく、独特の形をした家らしき物に入ろうとすると、

「待て！」

一人のナメック星人が此方に声を掛けてきていた。  
その姿に、クリリンとヤムチャは驚く事になる。

~~~~~

「残念です。まさかあの二人が、殺されてしまうなんて」

悲しんではない。

哀しんではない。

しかし、不機嫌ではあつた。

事が思うように運ばず、冷静でいながらも怒りを露わにするそれに、下級兵士達は恐れ戦いていた。

フリーザはグラスに入れられた赤い液体を一気に流し込む。それは人間の血の様に

赤く、色が艶めいていた。少しでも今の苛立ちをマシにする為に飲み干したが、喉は潤っても心は乾いている様だ。ちっともマシにならない。

失態に次ぐ失態。

ザーボンとドドリアに気を付けろと言ったのに、死んでしまった。それに上級兵士で組んだ部隊も、愚かで無能な者に任せただけに失った。更に、並みの下級兵士ではこの若いナメック星人を倒す事は出来ず、返り討ちにあつてしまふらしい。碌碌にドラゴンボールも集められず、ただ兵力を減らされるばかり。

これで苛立つなど言われるのは無理があつた。

「ここにいる全てを、皆殺しにしてやりましょう……」

空になったグラスを砕き、彼は言う。

くくくく

「ピッコロ!」

クリリンとヤムチャは声を揃えて叫んだ。

それはここにいるナツパに殺されたハズの、ピッコロの姿と瓜二つなナメック星人がここにいたからだ。

「私はネイルという者だ。そのピッコロという者では無い」

ネイルと名乗るナメック星人は自身がピッコロである事を否定する。

当たり前ではあったが、ピッコロは死んでいる。生きていれば、ここに来る必要も無かったのだから。

「聞くが、貴様らが私たちの同胞を虐殺している連中ではあるまいな?」

どうやら既にナメック星人が殺されている今の状況を知っているらしい。

それならば話が早い。取り敢えず今の返答をしようとクリリンが口を開くと、
「だしたらどうする?」

ナツパがそう言ったのだ。

クリリンとヤムチャは大慌て。ラディッツも呆れ顔でナツパを見たのだが、ネイルのその答えはというと、

「今ここで根絶やしにする」

内に秘めた気を解放した。

その感じ得るパワーは、あのフリーザの側近二人よりも大きく、怒りに満ちた気を纏っていた。

皆の顔色が変わる。

クリリンとヤムチャは、もう誤解を説くどころでは無かった。戦闘準備に入ったネイルには何を言っても通用しない程に此方を敵視している。

しかし、ラディッツはネイルの眼前に立ち、構えもせず就这样言った。

「俺たちは敵では無い。これから来る輩が敵だ……」

「何?」

何を言い出すかと思えば、此方にもう直ぐ敵が来るとラディッツは言い放ったのだ。

次にラディッツはナツパに向かって、

「本当に単細胞かつ! 今まで気を隠して移動してきたのがパーでは無いか!」

とナツパの肩を掴みこれでもかと揺らす。

ナツパはハツと表情を変え、「ヤベエ……」とだけ言い汗を流した。

ネイルが発した気がフリーザ軍のスカウターに拾われ、その戦闘力は側近よりも上だと見れば、フリーザ自身が出陣してもおかしくは無い。ここがドラゴンボールのある場所だと分かれば尚更危険になるだろう。

ラディッツは挑発するナツパを止めておけばよかったと額に手を当てる。ナツパも、反省の色を浮かべてだんまりになってしまった。

案の定敵がやって来たが、フリーザはいなかったので戦闘内容は割愛する。

反省の色を出したナツパと、元から戦う威勢を示していなかった三人にネイルは納得し、念の為ナツパを外に出しておいて、他の三人は家の中に入れて貰えた。

ナツパは不貞腐れつつも、反論など無く胡座をかいて待っている事にした。

中に入り、居たのはネイルとは比べ物にならない程の巨体を持つナメック星人の姿であった。そして、その人こそがこの星に住むナメック星人の親である最長老であった。そのナメック星人がゆっくりと口を開く。

「悪党達の手によって、我が子を見る見る内に減ってきている。無念です」

ネイルは俯く。

「彼らはドラゴンボールを狙って来ている。そうですかね？」

「はい……」

「悲しい事だ。ナメック星人の知恵と力の結晶であるドラゴンボールが、まさかこの様な事を……しかしどうしてドラゴンボールの事を知ったのでしょうか？」

自問するかの様に言ったそれに、クリリンは返答する。

「それについては、地球にもドラゴンボールがあり、そこから漏れてしまったのだと思います」

「何ですと？」

最長老は驚く。

クリリンは説明した。地球に逃れて来たナメック星人がいて、そこでは神様として存在していたと言う事を。

最長老は納得する。

「そうか思い出したぞ。カタツツの子だ。驚いた。あの子は龍族の天才児だった」

「そのナメック星人も激しい戦闘に力尽きてしまい、ここで生き返れないかこの星に来ました」

「……そうですか。もつと探らせて下さい」

最長老はそう言うのとクリリンとヤムチャの頭を掴む。

するとどうだろうか。最長老は驚き、そして納得した。外から見ている者にはその意味が分からず、ただ勝手に驚いている様にしか見えなかった。

最長老は言う。

「しかし不思議だ。そのピッコロは今外にいるナツパというサイヤ人に殺されたのに、何故同行を？」

「戦いにも色々あるのだ」

ラディッツが答えた。

しかし仲間であるナメック星人を殺した張本人がすぐそこにいるというのに、最長老は何とも穏やかな顔だ。そこまでの元気が無いのだろうか？

「戦いに身を置く者にしか分からない事ですか。やはり理解し難い」

「最悪、奴に願いを叶えさせるならば、最後の手段としてドラゴンボールは破壊する。また、作り直せるのだろうか？」

ラディッツの質問に、ネイルは拳を握りしめた。やむを得ないとはいえ、ナメック星人の知と力の結晶を破壊されるのだから。

しかし最長老は言った。

「残念ながらそれは無理です」

「な、何故だ!？」

「ワシの命はもう直ぐ消えてしまうからです。寿命もあり、殆ど力は残っていない。どちらにしろ、望みは薄いでしょう」

そう言つて最長老は咳をする。何回も咳き込み、苦しそうに唸つていた。

ラディッツが一人考えていた望みは簡単に破られる事となつた。しかし、ドラゴンボールを狙う相手がこれまでに無い程強大で、多過ぎた。

クリリンは慌てる様に言つた。

「た、単刀直入に言います！ その頭の上にあるドラゴンボール、僕達に預けて貰えないでしょうか!？」

最長老は黙る。

身体はピクリとも動かないまま、悩む様な唸り声を漏らすのみ。

そして、

「よろしいでしょう。願ひは純粹な物ですし、此れまでの勇氣は大きく評価されます」

最長老の腕がゆつくりとドラゴンボールの方へ伸びて行き、それを掴むとクリリンとヤムチャの目の前に差し出す。

クリリンとヤムチャは御礼を言い、それを貰おうとすると、最長老からの言葉がそれを遮つた。

「頼みがあります。この星のナメック星人を、どうか助けて下さい。そして、どうかドラゴンボールを悪党達の手に渡すのだけは阻止して下さい」

最長老はそう言つてドラゴンボールを渡すと、又クリリンとヤムチャの頭を掴む。

「貴方達は飛び抜けた力をお持ちの様です。だが勿体無い事にまだ眠っている力があ
る。正義は強い方が良い。その力を起こして差し上げよう」

最長老は強く念じる様に黙りこくる。

すると、白い靄の様なものが二人を包み込み、そして二人は驚いた。

「うひゃーあつ！　ち、力が吹き出して来たあ!？」

「何だこれは!?　凄い、凄いぞっ!」

それぞれ喜ぶ二人。

最長老は一息すると、咳き込んだ後言った。

「どうか、逃げ延びて下さい。どうか御無事で」

そう言われ、一行はその場を後にする。

こうして、クリリン達は一つ目のドラゴンボールを手に入れる事が出来たのだった。

来るべき

「お、おのれ……」

年老いたナメック星人の一人、ツーノが腕から流れ出る血を抑え睨み付ける。

その先にいるのはフリーザ軍の兵士達。命令であるドラゴンボールの回収と、彼らの気晴らしの為にナメック星人の村を襲い、鬱憤を晴らしていたのだ。

「おいテメエ、ドラゴンボールを早く渡さねえか!」

「そうだそうだが、命が惜しげりやなあ……」

如何にも悪者らしい卑下た笑い声を上げながら、ナメック星人を取り囲む。

今、この村には若いナメック星人がいないのだ。

野良仕事に行つたばかりなので、残るは小さい子供と老人のみ。しかも相手側には上級兵士が数人固まっている。

戦闘タイプでは無い彼らにとって子供がいる以上、無理に逆らう事は出来なかつた。しかし、ドラゴンボールは渡してはいけない。

「殺されてえのか!」

気の短い兵士の一人が、腕の武器を突き付ける。

先程それを放ち、こちらが回避しなければ確実に当たり殺されていただろうと考えると、これは脅しでは無いのだろう。

狙いはまだ年端もいかぬ子供。下手に動くとは皆殺しにされるかも分からない。だとすればその子を生かす為を取るべき手段は一つしか無かった。

「待てッ！ ……ドラゴンボールを渡す。だから、その子を撃たないでやってくれ」

それを聞いた兵士達は皆ニヤリと顔を歪ませ、子供に狙いを定めた兵士も武器を下ろす。

「それでいいんだよ。つたく、手間かけさせやがって……」

ツーンはドラゴンボールを兵士の一人に渡す。

「さあ、これを持ってどこへなりと消えてしまえ……」

ツーンがそう言うのと、兵士のリーダー格が「はい撤収」と言うのとナメック人に背を向け歩き出した。

これで村人の命は守られたが、ドラゴンボールを奪われてしまった。「済まぬ」と顔を俯かせるツーン。しかし仕方のない事だったのだ。

「あゝっ！」

兵士の一人がワザとらしく大声を上げると、兵士全員が立ち止まる。

「そういえばフリーザ様の御命令で、この星の生き物を皆殺しにするって事、すっかり忘れてたー」

極悪の笑みを浮かべ、全員がナメック人の方へと振り向く。

先程のあれは全て演技だったのだ。

まさに外道。

兵士全員が襲い掛かってくる。

ナメック人全員は死を覚悟した。その時、

一筋の、いや、二筋の光が兵士達に向かっていった。

十数人いた兵士達が、一瞬にして半数以下になる。

突然の攻撃に彼らは怯み、周囲を見渡す。見る方向は攻撃が来た方向。しかし、その方向には誰もいない。スカウターも反応しない。

そんな訳が無いのだ。

仮に今の攻撃がナメック星人のものだとしたら何故今まで反撃しなかったのだ？
ドラゴンボールを奪われる前に、彼らを撃退できる程のパワーを持つ者が返り討ちにし
てしまえば良い。

彼らは困惑する。

実はまだこの中に実力派が混じっているのではないのか、と。

隙を狙い、又攻撃を加えるのではないかと。

「ぐわっ」

又一人倒された。今度はエネルギー波では無く恐らく打撃。

確証が無いのだ。スカウターにも映らず、兵士を倒していく。まさか、戦闘力が皆無
の者が敵だというのか。まさか、敵は亡霊的な何かだというのか。

それとも裏切り者がこの中に……？

「おい、お前どうにかしろッ!？」

「どうにかって何だよ!？」

「クソ、どこからだ!？」

疑心暗鬼に囚われる。

互いが互いに疑い始め、チームワークもクソも無い。そうなったら、もうお終いだ。

兵士は皆、意識を刈り取られた。

~~~~~

「上手くいきましたね」

「だな。これも最長老様のお陰か」

クリリンとヤムチャは兵士達を片付けてそう言う。勿論スカウターは破壊した。

ラディッツから聞いた様に、通信を通じて他の兵士達に自分達の居場所をバラされると厄介なので、バレーずに兵士達を倒した訳だ。

しかし、最長老と会う前の彼らでは出来なかつただろう。これも最長老が二人の隠されたパワーを引き出したお陰だ。

その証拠に、以前ならば苦戦したハズの上級兵士達が苦にもならなかつた。

「でも、なんかズルくありませんかね?」

「仕方がないだろ、こんな状況だし。しかもこの力は元々俺たちが持つてたもんだぜ?」

大丈夫だつて」

クリリンはいきなり手に入れた力に困惑していた。喜びもあつたが、今の様に戦つてみないと自分の全力がどれ位か分からない程に持て余していた。

今までは長きに渡る修行をこなし、努力の末に手に入れてきた力だというのに、隠された力があると見定めされ、それを引き出してもらつた。特に苦痛も無く手に入れてしまったので素直に喜んで良いか分からないのだ。

ヤムチャはそこら辺は割り切っており、この間から新技を使う為に必要な気が足りないと思つていたので、今回の最長老からのこれは嬉しい誤算だつたのだろう。あまり気にしてはいなかつた。

「おお……旅の御方、危ない所を助けていただきありがとうございます」

その声に二人はその方向を向くと、ナメック星人一同が頭を下げ御礼を言つてくれた。

「いいですよ」とクリリンが。

「当然の事をした迄です」とヤムチャが。

最長老に言われたのもあるが、二人は理不尽な暴力に遭うナメック星人を助けてあげたいと思つていた。

単なる同情かもしれない。だからと言つて見過ごす事も出来ない。亀仙流にもある

『弱きを助け強きを挫く』、この習わしが骨身に沁みているのだ。

見返りを求めているのではない。唯助けたい一心で、彼らは動いているのだった。

~~~~~

「しかし、地球の人間ってのはお人好しいもんだ」

「全くだ。……ま、だからこそ俺たちは今生きているのだがな」

少し離れた所でラディッツとナツパは地面の段差に腰掛けながら言っていた。

彼らは助けるという行為をした事が無かった。仲間がピンチの時に、もしかしたら自分にも被害が及ぶと思い加勢するくらいのものだ。だからこそ、自ら進んで助けに行く二人を見ていると、自分達サイヤ人との違いがよく見て取れた。

それは兎も角、何故二人は戦闘に参加しないのかと言うと、助ける事に疑問があるのもそうだが、単にフリーザに見つかるのを恐れているからだ。

クリリンとヤムチャは気の使い方がとても上手く、その点はラディッツもナツパも足元にも及ばない。最初から気の使い方を知っている地球人と、希少な戦闘力のコント

ロールが出来る種族に驚いた彼らでは学ぶ時間が違い過ぎる。

クリリンとヤムチャは気の隠し方がきめ細かく、違和感無く消す事が出来るので、そこから辺の兵士達ならば十分だと思いい人に任せていた。

それともう一つ。

「な、何故貴方たちは襲うのでは無く、た、助けてくれるのですか?」

小さいナメック星人、デンデが身体を震わせながらサイヤ人二人に聞く。このナメック星人はこの村を救う前に助けた村の子供であり、道案内の為について来たのだ。

その子供の問いに、二人は無言だ。デンデはシュン……と顔を下げる。

まあ、無言の理由はナツパが面倒臭いから、ラディッツはドラゴンレーダーを見て難しそうな顔をして考え事をしているからなので特にその理由を考えて無かったからなのだが。

ラディッツの考えていた事は、集まっているドラゴンボールの事である。

自分達以外に集めている人物といえば、ベジータ一人である。しかも、ベジータらしき反応には既に三つのドラゴンボールが集まっており、今も高速で移動している。他に確認しているドラゴンボールはブルマの所に置いて来た一つにここにある一つだ。兵士からの情報によると、まだフリーザ軍にはドラゴンボールは集まっていないらしい。ならば……

「なんで、二つのドラゴンボールが動いてやがる……」

ドラゴンレーダーには、ベジータと思われる反応と同じ位のスピードで移動している。二つのドラゴンボールの反応があった。

意外にも、それは結構近くを移動している。近付いて確認出来ればその正体を掴めるのだが、危険である事は間違い無い。

取り敢えず、全員が揃ったら話せば良いと思い、クリリンとヤムチャが戻って来るのを待つ事にした。

が、その瞬間とても大きく、邪悪な気を感じ取った。

「ま、まさか、この気は……!?!」

~~~~~

フリーザの母艦近くに降り立った7つの宇宙船。それはフリーザが呼んだギニュー特戦隊とある兄弟だった。

それを待つていたのは他ならぬフリーザ。宇宙船から出てくるのを見て口が三日月の様に吊り上がる。

「来てくれましたか。待っていましたよ？」

フリーザの声が屋外だというのにはつきりと伝わってくる。まるで耳元で囁きかける悪魔の様に。

しかしその言葉を受けた者達は、恐怖を感じる所か人を食った様な顔で笑みを浮かべ整列している。

「今回貴方達を呼んだのは、ベジータとその他の邪魔者の排除、及びドラゴンボールの回収をお願いしたいのです」

その言葉にギニュー特戦隊の隊長であるギニューが答える。

「ハッ、貴方様の御命令とあらば何なりと……それにしてもベジータはやはり裏切りましたか」

「ええ、命令を無視して勝手に動き回り、あまつさえドラゴンボールの願いを横取りしようとする様です。願いは勿論永遠の命でしょう。流石に命一つで、この私に挑む様な愚か者ではありませんからねえ」

フリーザの表情は段々と怒りを含み、さっきの笑みとは全く違う顔となっていく。

「私は怒っているのですよ。大切な兵士を殺され、願いを邪魔され、そして、私に歯向かって来るような愚かな彼らに」

大気が震える。

殺気を振り撒き、ぶつけようの無い怒りが昂ぶっている様だ。

流星のギニュー特戦隊の様な宇宙のエリートでも、宇宙の帝王たるフリーザの膨大な強さに背筋が凍る。

しかし、ギニューは少しの動揺もせずに、

「お任せ下さい。必ずや、フリーザ様の目の前にドラゴンボールを7つ全て献上致しますよう」

と言った。

それを聞いたフリーザは先程までの殺気を嘘の様に拡散させた。

ギニュー特戦隊とその兄弟は頭を下げ、目的を遂行する為にエリートの名に恥じぬスピードで飛び去った。

「期待してますよ。ギニューさん」

フリーザは、笑った。  
何かを孕んだ恐ろしい笑顔で。

## 止められない怒り

「オイ、不味い事になったぞ」

全員が集まった所で、ラディッツが口を開く。早急の事態に焦っているのか、いつもより早口になっていた。

「手短に話す。ギニュー特戦隊とアボカド兄弟がこの星に到着した……！ ナツパは知っているだろうが、奴らはフリーザのお気に入りのエリート達だ。他にはベジータと思わしき反応と、俺達ともフリーザ軍とも違う奴がドラゴンレーダーに反応している」「オイオイ、フリーザの野郎も本気だなッ！」

ラディッツの報告に、ナツパも冷汗を出しながら眉間にシワを寄せる。

この焦りよう、サイヤ人の彼らでも恐れる程の脅威がこの星に降り立ったというのか。

「その特産品だか特産物だか知らねえが、ヤベエ奴が来たって所は何となく分かった。けどベジータとは別の反応って奴が気になるな。フリーザ軍とも違うってのはどういう事だ？」

ヤムチャが疑問をぶつける。フリーザ軍では無いと断言している所に違和感を感じたのだ。

するとラディッツは、

「この気の大きさはフリーザの所でも幹部クラスの奴が持っているデカさだ。そんな戦闘力の持ち主なんか、側近の二人を除くとギニュー特戦隊や例外のエリートだけが、フリーザの近くにはこれ程の戦闘力の奴はいなかった。それに……」

臆病なラディッツだったからこそその情報。最後に意味深な言葉を残してはいたが、しかしその情報に対して同僚のナツパも納得していた。

「ああ、ラディッツの言うとおりだ。こんなのがいたら特戦隊の様に優遇されていただろうな。しかし、なんだ？ この気はなんだか腹立たしいぞ？ ムカムカしやがる

……」

ナツパの頭に青筋が浮かぶ。

これを見て幹部戦の事が思い出されたのか、クリリンとヤムチャは一步下がったのだった。

~~~~~

取り敢えずクリリンとヤムチャはこのままドラゴンボールを持っていたら危険だと思ひ、ナメック星人にどうにかドラゴンボールを譲ってもらえた。後はこれを守るなり隠すなりすれば良いのだが、その時ふとクリリンが疑問に思った事を口にした。

「なあデンデ。お前の村にはドラゴンボールが無くて、その腹いせに襲われそうになつてたよな？ ベジータやフリーザ軍が襲つた村は……皆殺しにされていたし、何でドラゴンボールだけ無くなつていたんだ？」

それを聞き、確かにそうだと思つた他三人も顔をデンデに向ける。

すると、デンデは少し縮こまりながら話し始めた。

「そ、それはですね……その方はサイヤ人なんですけど、そのベジータって人では無くて、普通にドラゴンボールを渡してくれれば何もしないう約束をちゃんと守つてどこかに行つてしまつたんですよ」

サイヤ人というキーワードに全員が反応する。そして、ラディッツは納得したかの様な顔で目を瞑り、ナツパは顔の至る所にシワを寄せながら小刻みに震え出した。

「あのアマ……ここに来てやがったのか……ッ！ ブチ殺してやるウ……」

拳を握り締め、今にもそれを叩きつけようとする怒りに震えるナツパ。

ラディッツは慌てて止めに入る。あまりの怒りにナツパの気が漏れ出しているのだ。このままではネイルの所で起きた惨事の二の舞だ。

ラディッツは幾度も言葉を投稿掛けるが、全く反応しない。このままではスカウターに反応してギニュー特戦隊やフリーザが此方に来てしまうだろう。

仕方ないと言い、ナツパの頬へ自身の拳をめり込ませた。ナツパの身体は地から浮き、近くの岩壁に吹っ飛ばされた。ナツパはその途中で我に帰った様で、ギリギリの所で自分の身を翻し岩壁との衝突を避けて戻ってくる。

「す、すまねえな。また頭に血が上っちゃったぜ……」

落ち着きを取り戻したナツパ。一度深呼吸をし、皆も一息。

「それで？ そのサイヤ人の事、何か知っている様ですか？」

クリリンが知っている素振りを見せた二人に聞く。ナツパに至っては……まあ、何も言うまい。

ラディッツがそれに返す。

「ああ、恐らくだが、そいつは……なんて言えば良いか……女のサイヤ人だ。俺らとは違う隊にいて、その存在を俺達は知らなかった。表向きはフリーザに仕えている様だが、実際は俺達と同じだろう」

フリーザに仕える、その言葉を聞いて動揺したが、フリーザにドラゴンボールを渡し

ていないのなら少なくともフリーザの味方ではない事は確か、なはずだ。

クリリンとヤムチャは女性という点を考えてそのサイヤ人を思い浮かべる。

浮かび上がるのは必ずしも良いとは言えないイメージ。乱暴に自身の五体を振るい、気が強く、此処にいるラディッツやナツパよりも恐ろしい存在を思い浮かべてしまった。

それは仕方のない事なのだ。彼らには、失礼だが女性にあまり良い出会い方をしたことはないのだから。ブルマは天才気質で頼りになる存在だが、その分気が強く我儘で男にも強く出れる所がある。ヤムチャはそれより前に出会った事があつたが、この前の天下第一武道会で知り合ったチチという女性。顔こそ美人だが悟空に「誰だオメエ？」と言われた時には酷く暴力的になり、しかも牛魔王の娘と言われた時にはその性格に納得していた程だ。他にもくしゃみ一つで変貌するランチさんなど……悪い印象は持っていないが、そういう面では苦手と言えるだろう。

どうかしたか？ とラディッツは二人に声を掛けるが、二人は無言でどう見ても良くない顔をしているのに縦に何度も首を振る様子を見て、余計な詮索はしないでおう、と思うしか無いラディッツであつた。

情報共有も終え、次の動きを考えようとした所で急に強い戦闘力を感じ取り、その方向に身体を向ける。

数は一つ。少なくとも側近の二人よりも強い戦闘力だ。まさか、ギニュー特戦隊だというのか？ 先程のナツパの気でこの場所がバレてしまったのだろうか？ そう思い、気を引き締める四人。

次第に近付き、その強さもハッキリと伝わってくる。そして、突風と共に現れたそれは……

「ほら、噂をすれば何とやら……だ」

「やっぱりラディッツ君だったか」

デンデの話していたそのサイヤ人、ターレスの姿だった。

両手にはそれぞれドラゴンボールが。ドラゴンレーダーの反応も正しかった様だ。

「デメエー！ このアマアツ！」

急に飛び出したナツパを、ラディッツが止める。しかし、ボルテージが最高潮のナツパを止めるにはラディッツ一人では足りなかった様で、クリリンとヤムチャもそれに加勢した。それでもナツパの足を止めるには精一杯な所、相当に怒りが溜まっていたのだろう。

それをターレスは何のアクションも起こさず空から見ているだけであり、それがまず

ますナツパを苛立たせる。

これでは先程の様にはいかないだろう。ラディッツはクリリンとヤムチャと共にナツパを止めながらターレスに叫ぶ様に話し掛ける。

「何の用だターレス！ 今頃俺達を殺しに来たか！」

「いやあ？ 君達のチームに入れて貰おうかと思つてね」

「な、何ッ?!」

まさかの展開に、ラディッツは驚く。その拍子に力が緩んでしまい、ナツパが飛び出していつてしまった。

「死イイねエエッ!!」

「おおっ!?!」

目を血走らせ、声を裏返す程に怒り狂うナツパに、流石のターレスもこれには空中なのに後退し、その威圧感に防御の構えを取った。

その判断は正解である。

ナツパの剛腕から放たれる大振りには、避けやすい動作をしているのに避けれない圧迫感を持ち、相手を硬直させる程までに至った。

それはターレスが防御をした腕に当たり、ナツパが飛び出した際に吹っ飛ばされて離れているハズのクリリンやヤムチャにまで届く様な、重く嫌な音を響かせてターレスを

地面に叩き落とす。

「ぐはアツ」

地面に真正面からブチ当たり、肺の酸素が吐き出される。

流石に不味いと思ったのか、ターレスは直ぐに立ち上がり体勢を立て直そうとした。

「んあ？」

しかし力が入らず、ガクリと崩れる。

おかしい。そう思い自分の身体を見ると、

片腕と片脚がイカれていた。

あ、死んだ。

目の前に迫り来るナツパを見てそう思い、構える事すら遅すぎた。

ナツパの蹴りが顔面へと迫り、死を覚悟した。

だがそれはターレスの身には届かず、直前でそれは止まった。ターレスは何もしていない。そして目の前には、

「いい加減にしろナツパ……ッ！」

紅く光り輝くラディッツがその蹴りを遮っていた。

~~~~~

「おいクリリン！ 大丈夫か!？」

ヤムチャが倒れたクリリンを抱き上げる。しかし、呻き声は上げるものの、自力で立つのは難しいようだった。

何故こうなったのかは、先程飛んでいったナツパの所為である。

ヤムチャはただその風圧に吹っ飛ばされただけだが、クリリンは重い一撃を腹に食らったようだ。ナツパが自身の腕を掴むクリリンを振り解き、そして振り回されたそれに不運にも当たってしまったのだ。

「デンデ、クリリンを頼む！ 俺はラディッツと一緒にナツパを止めに行く！」

倒れたクリリンをデンデに任せ、ヤムチャはナツパへと向かっていった。

ラディッツが界王拳を使い、ナツパの蹴りの軌道を読み、そして掴む。それは、ターレスに届く前に止められたのでギリギリ間に合ったという所だろう。

「いい加減にしろナツパ……ッ！」

そう叫びながらラディッツは回し蹴りをナツパの脇腹に叩き込む。界王拳を纏ったラディッツの蹴りは、圧倒的なタフさを誇るナツパでも流石に無視する事は叶わなかったようだ。

ゲフツとナツパはその脇腹を押さえ、標的をラディッツに移す。

「なんでそんなのを庇いやがるッ！」

「まだ何も聞き出せてねえだろうがよッ！ 少しは落ち着けナツパー！」

そう言いながら空中で徒手空拳をやり合うラディッツとナツパ。界王拳の強化の陰もあり今はラディッツは押しているが、界王拳は例えるならば諸刃の剣。時間が経てば経つほどラディッツが不利になっていくだろう。

そこに、ヤムチャが加勢に来た。

「はあああ……！」

ヤムチャも、ちゃんと自分のレベルくらいは理解しているつもりだ。

如何に最長老からパワーアップしてもらったとはいえ、単独でサイヤ人相手に足止め出来る強さに至ったとは思っていない。ここは……

「援護するぞラディッツ！」

そう言つて、ヤムチャは繰気弾をつくり出す。

しかし、それはいつものそれでは無い。その気弾はヤムチャの体長程大きくなり、やがて人の形を創り出していく。

それはヤムチャと瓜二つの形をした繰気弾となつたのだ。発光していることと色以外は全く同じ姿をしており、道着や髪などの細部に至るまでほぼヤムチャである。

「ハアツ！」

ヤムチャ型の繰気弾はナツパに向かつていき、本体のヤムチャは今度は球型の繰気弾を作り巧みに操る。

それはラディッツに向けた攻撃を逸らし、受け流し、取り押さえる。真つ向からの攻撃とはいかなくても、此方を対象としていない攻撃ならば幾らでも対処の仕方はあるのだ。

因みにこの繰気弾で創り出したヤムチャ、実は本体よりも強い。

本来の肉体で動くのならば鍛え上げた肉体の限界までの動きが可能だが、繰気弾のヤムチャは人間ではなく気の塊なのでありのままの繰気弾と同じスピードで動く事が可能なのだ。

目で追いついても身体が追いつかない、なんて事が無くなり、繰気弾のスピードでの

突きや蹴りを繰り返す事が出来る。更に視点も二つとなり、隙がかなり減るだろう。その分気の消費は多いが、直接の攻撃は食らわないので本体も余裕があれば共に動く事も可能である。

「どいつもこいつも邪魔しやがってエツ!!」

頭に血が上り切ったナツパの動きはますます単純になり、本来の動きが出来なくなる。そうなれば後はラディッツの独壇場だった。

「目を覚ませ、この単細胞ツ！」

腹にボディブローを一発、蹲った所をベアナツクルが頭に直撃。ナツパは地面に叩きつけられ、正気を取り戻した。

「すまねえラディッツ、おれは　しょうきに　もどった」

「まだ戻ってねえなコノ！」

地上に降りたラディッツはおかしなことを言うナツパの頭をもう一度殴る。

「おお!?　ここはどこだツ!？」

「取り敢えず謝れお前」

ナツパは周囲を見回すと、体力を消耗したラディッツとヤムチャ、蹲ったクリリンを見て漸く自分がどうなったかを理解し、そして頭を両手で押さえる。

「本当にすまん。俺の悪い癖だなオイ……」

ナツパは一人、項垂れる。

最早皆は怒りの言葉も慰めの言葉も無い。

一人にさせるべきだと判断し、放置しておこう。そう思ったラディッツだった。

「な、何で私を……?」

ターレスがラディッツに話し掛ける。

それに対しラディッツは、

「さっき言っただろう。お前から何も聞いて無いつてな」

しかし、と言葉が続きラディッツは界王拳を解き、頭を抱える。

「ターレス。お前、厄介な事をしでかしてくれたな」

「あれれ? 見つかったみたいだなあ」

その言葉と共に姿を現したのは、何とギニュー特戦隊とアボカド兄弟の七人である。

皆は驚きの声を洩らし、冷汗をかきながら構えを取る。こんな状況で現れたのは不幸以外の何物でも無い。

クリリンは行動不可。

ヤムチャは気を消耗している。

ナツパは暴れた後である。

しかし、何故こんな間の悪い状況下に現れたのか。いや、ナツパが暴れた所で居場所がバレていたのだろう。となると、

「貴様ら、今の状況を楽しんでやがったな……う？」

ラディッツは睨み付ける。

それに対しギニュー特戦隊の一人、グルドが答える。

「当たり前だろ？ 今では数少ない猿野郎が仲間割れしてる所なんてもう一生見れねえぜ。それに、俺達は何もしなくても死んでくれるなら苦労しなくて済むしなあ……」

憎たらしい笑い顔で言ってくるグルド。一生見られない、という所に悪意を感じるのは勘違いでは無いのだろう。

「では改めて我らの正体をご覧頂こう！ 我らギニュー特戦隊ッ！」

隊長であるギニューがそう言うと、彼らは意味不明な動きをしてくる。キャラが掴めず、巫山戯ている様に見えるが……いや、真面目に巫山戯ているのだろう。

最後の決めポーズをした後、一仕事終えた様な雰囲気を出して不気味に笑い掛けてく

る。ドヤ顔とでも言うのだろうか、しかしこちらはまったく笑えない。アボとカドも混ざり、いよいよ絶望的だ。

ロクに動ける人物が殆どいない今、戦いが始まってしまふ。

それはマトモな勝負にすらなるかどうか危うい戦いの始まりであった。

## 特戦隊十α 序

冷汗を流しながら構えるラディッツ。

それに対しギニュー特戦隊等の連中は余裕の表情で、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべるだけだ。

「手負いで悪いが、久しぶりの戦闘だ。思う存分可愛がってやろう」

「可愛がると言っても、頭を撫でたり、よしよしとかじゃ無いからな。痛め付けるって意味だ」

「わざわざ説明せんでも良いっ」

ギニューが言った事への補足を付けるジース。それはギニュー特戦隊の副隊長としてか、相手を煽っているのかはさておき、その行動は全くと言っていい程そのキャラクタ―が掴めない。これも手の内を見せない一つの行動だとしたら流石は宇宙中から選び抜かれたエリートだという事だろう。

現にクリリンも「キャラが掴めない」と言い、全くその通りだ。

「お、もしかしてあれが目的のドラゴンボールじゃねえか？」

ギニュー特戦隊の一人にして、一番大柄な青肌の男、バータが言う。  
ヤムチャが「しまった!」と言い、直ぐに回収しに行こうとしたら、

既にそのドラゴンボールは敵の手にあった。

「な……………?」

冷汗を流しながらヤムチャは相手を見る。

確かに、先程まですぐそこにあったドラゴンボールが青肌の男の両脇にある。驚きの表情を浮かべるヤムチャを見て、バータは笑う。

「ケツケ、俺のスピードは宇宙一だッ! テメエに反応できる訳ねえだろう?」

宇宙一を自称する奴は、だが確かに疾い。

ヤムチャは戦慄し、瞬きを一つした。

それだけで、自分達の手元にあったハズのドラゴンボールが、ギニュー特戦隊の一人の手元にあったのだ。

「ば、馬鹿なッ!」

思わずヤムチャは声を張り上げる。

スピードが疾いからと言って、これ程までのものか？

気を感じる事すら出来無い程、圧倒的なのか。それ程まで、この状況は覆せない位絶望的なのか。

すると、いつの間にか隣にいたラディッツがヤムチャの肩に手を置き、奴らに聞こえない位の声で囁く。

「落ち着け。今のは恐らくあのグルドって奴の超能力だ」

時間を止めたんだ、と続けるラディッツ。

そんなのどうやって勝てばいいんだ、とヤムチャは大きな声を出し掛けたが、ラディッツの視線を見てそれを押し留めた。

「グルドを良く見ろ。ニヤけてはいるが疲れた表情をしているだろう？ だから連続では出せないはずだ。そうに決まってる……！」

ドラゴンボールを奪われても冷静な判断をしているラディッツだが、現状の絶望感に焦っているようにも感じた。

打開策を考えているように見え、しかし歯を食い縛っている所を見るといい思い付きは無さそうだ。

ドラゴンボールを奪ったバータとグルドがそれを隊長のギニューに渡すと、

「ふむ、取り敢えずこのドラゴンボールはフリーザ様の所へ持つて行く」

「という事は隊長、こいつらは俺達で好きにしていいいんですね!」

「ああ、好きにしろ」

その隊長の一言に他の隊員は歓喜する。

それぞれ個性のある喜び方をし、本当にこれから戦闘を行う者達の姿なのかと困惑してしまふ程だ。

そんな姿の隊員達を見て隊長のギニューは「しかし」と続ける。

「決して油断はするな。今のラディッツ君は弱つているとはいえ、先程の40,000を超えたナツパ君の戦闘力を一時的に上回ったのだからな」

その言葉に、隊員達の顔には殺気が宿る。

だが、その殺気は戦闘者としてのものでは無い。此方を蹂躪するかの如く、一方的に痛め付ける者の、まるで『捕食者』のようだ。それに近いものを皆は感じ取った。

ギニューはドラゴンボールを気で浮かび上げ、そのまま飛んで行ってしまった。

それをお見送りする隊員達と他二名。それが終わると……

「よっしゃああああ! それじゃあ誰があいつらを痛め付けてやるかジャンケンだつ!」

なんと、おもむろにジャンケンを始めたではないか。

六人でのジャンケンは今中々終わらない。その様子を見てヤムチャは、

「おい、今の内に逃げた方が良くないんじゃないか？ 遠くへ逃げて、気を消せばスカウターに反応する事も無いと思うんだが……」

と提案するも、

「無理だ。さっきの青い奴……バータの疾さを見ただろう？ 今の俺達ではどう足掻いても追いつかれてしまう」

とラディッツが言う。

確かに倒れているクリリンを担いでいては逃げ切れないだろう。それにターレスはさておき、デンデの微かな戦闘力はスカウターで察知されてしまうのだ。

「そうだ。だから……」

「ああ、だから先ずはその……ギニュー特戦隊だっけ？ そいつらに勘付かれるような無茶な動きは出来ないって事だな。クソツ！」

ヤムチャは今動ける仲間が自分とラディッツだけだという事に歯噛みした。

漸く、という程でも無いがギニュー特戦隊達のジャンケンが終わり、前に出て来たのは緑色の肌をした、四つの目を持つグルドだった。

「そのロン毛、俺様が相手をしてやる。ベジータじゃ無いのが苛つくが、まあお前でストレスの発散でもするとするかな」

ニヤニヤと此方に迫るグルド。

先程言っていた、時を止める超能力者。対策など考えてもおらず、唯々嫌な汗が吹き出るばかりである。しかし、そんな時にヤムチャはある事に気付く。

（なんだ？ 此奴だけ馬鹿みたいに気が少ないぞ？）

他のギニュー特戦隊の隊員からは恐ろしい程の戦闘力を感じるのにも拘らず、このグルドだけは圧倒的に少ない。これならば以前に戦った上級兵士と同じ位じゃ無からうか？

しかし敵を侮るなかれ。

逆に考えれば、それ以上の戦闘経験と特殊な能力が備わっているからエリート集団の仲間入りを果たしたのだらうとヤムチャは再度気を引き締める。

（ならば……先手必勝だッ！）

こういう場合、相手のペースに乗ってしまうのが一番危険だという事を知っている。ヤムチャは直ぐさま練気弾を両手に作り上げ、それを撃ち出す。最長老により内なる力が湧き上がった今のヤムチャならば当たれば一撃で戦闘不能に出来るだろう。

……当たるならば。

「おおっと……思ったより速いなお前」

さつきまでいた場所とは正反対の所へ移動していたグルド。

それと同時に、思いがけない腹痛がヤムチャを襲う。何かに無防備な所を殴られたような、そんな痛みだ。

これはもしかしなくてもラディッツの言っていた時止めからの攻撃だろう。

「ならば……ッ!!」

ヤムチャは二つの繰気弾を混ぜ合わせ、人型のそれへと変化させる。

ヤムチャ自身は全体に気を配り、人型である繰気弾は真っ直ぐにグルドへ向かって行く。

グルドはニヤリと口を歪ませ、次の瞬間に消える。

そして、又もやグルドは後ろに回り込んでおり、今度は複数の気弾がヤムチャを襲っていた。

だがヤムチャは自身の作った繰気弾に背を任せ、囲うように迫る気弾を全て弾いている。

「ほう、よく防ぐもんだな」

連続での時止めの使用に疲れているのか、少し息切れをしているのが見える。

そんな様子を見て他の隊員達はどうと、

「おいグルドく、相手は一匹なのに随分手こずっているじゃないか？ 恥なんてかいたら二度と一緒にオヤツ囲んでやんないからなく」

そう言つて隊員達は笑う。

「ちよ、ちよつと様子見で遊んでるだけだい！ 直ぐに此奴を殺しちやうとつまんだろ!？」

グルドの視線が隊員達へと向き、ヤムチャにとつては思いがけない隙が生まれる。もしかしなくてもこれはチャンスだ。

それを見たヤムチャは間髪入れず繰り弾を突撃させた。

隙を突かれ慌てるように時を止めるグルド。咄嗟の事に息が続かず、少し離れた所でそれを解除してしまう。

「そこだッ!!」

全体に気を配り直ぐにでも動ける体勢でいたヤムチャは地を駆ける。

本来ヤムチャが得意である素早さ、その動きは狼と例えられる程疾く、最短距離でグルドに近付き蹴りを見舞つた。

蹴りを入れられ転がって行くグルド。だがしかし、グルドは何とか立ち上がってきたのだ。

「チッ、蹴りが浅かったか!？」

チャンス逃すまいと確実に当てられる様に放った蹴りは、正確さを求めるあまりパワーを損なってしまったようだ。

追撃をする為、再度地面を蹴るヤムチャ。

しかし、

「キエ〜〜ツ?!」

グルドがいきなり叫び、それと同時に動けなくなってしまったのだ。

これは金縛りなのだと瞬時に理解するヤムチャ。餃子と共に修行をした時この様な術に掛かった事があつたが、彼方は腹痛の様なもの。動きを止めるという意味合いでは同じ様に感じるが、完全に動きを止められている今の方が圧倒的にヤバイ。

「へ、へへへ……ピクリとも動けまい……」

ゼエゼエと息切れを起こしているグルド。確かに言われた通り何か縛られ、どんなに力を入れても全く動けずグルドの直ぐ近くにある練気弾すら動かさそうに無い。

「こんなヘンテコなもんでこの俺を殺せると思つてんのか？」

グルドは思いつきり拳を振りかぶり、その勢いを人型の練気弾にぶつけようとする。しかし、ぶつかると同時にその練気弾は霧散し、ドテツとグルドは転んでしまった。

それにより他の隊員達から笑われてしまう。

「き、貴様！ よくもこの俺に恥をかかせてくれたなツ!？」

ヤムチャからの意思疎通が途切れ、気も送れなかった以上消えてしまったのは仕方のない事なのだが、これが悪い方向に働いてしまった様だ。

八つ当たり気味にグルドは全く動けないヤムチャを殴りまくる。

「おいおい、随分とグルドは手こずったな」

「仕方ないだろ。一応あの男の戦闘力はグルドを上回ってたんだから」

「それにしたって金縛りまで使っちゃもうたあ、よつほど俺達の言葉に焦りやがったな」  
まるでTVを見ながら雑談するような様。

何たる残酷さか。この戦いも彼らはゲームか何かのようにしか感じていないのだろ  
う。

「ふう。俺の気も済んだ事だし、トドメを刺してやろう」

近くの木を超能力で抜き、槍のように鋭くさせる。

力も入らず、気を練ることも出来ない今の状況ではあんなのに貫かれたらお終いだ。  
ヤムチャは決死の思いで抵抗を試みるがやはり動けない。

今にも鋭くした木を突き刺されそうな時、

木諸共、グルドの首が刎ねられた。

「!?」

何事かとヤムチャは戸惑うが、兎に角その場から離れた。そしてそんなヤムチャに声を掛ける者が一人。

「大丈夫ですかっ!? ヤムチャさんっ!」

「クリリン!!」

腹部を押さえながらも、その脚でしっかりと立っていたクリリンだった。

~~~~~

「おいおい、グルドの奴やられちまったぞ……」

首を刎ねられ、どう見てももう戦う事が出来ないグルドを見て、他の隊員達は戸惑い

の色を隠せなかった。

一番戦闘力が低かったグルドとはいえ、その恐るべき超能力はあのフリーザでさえ思う所がある程の物。だからこそ他の猛者達を出し抜いてギニュー特戦隊の隊員になれたのだ。

「どうする……う？」

「どうするつたつて……」

余裕のある表情が一変し、こんな言葉を口にした。

「これでは……スペシャルファイティングポーズの美しさが損なわれるじゃないかッ
!？」

何と仲間の心配ではなく、たかがポーズの心配だった。

グルドは首を刎ねられながらもまだ微かに生きている。しかし、その命も残り僅かだろう。だがそれを助けようとする仲間意識が微塵も感じられない。

クリリンとヤムチャはそれに驚愕し、その場に立ち尽くしたままだった。

と、そこへ飛来してくるもう一つの影。これ以上の敵の増援は勘弁して欲しいのだが、それはこの場の全員が知っている人物であった。

「面白い事をやっているようだな」

そこに現れたのはまさかのベジータ。

固まったクリリンやヤムチャには眼もくれず、刎ねられ地面に転がった首だけのグルドに近付く。

「貴様、何故今頃ここに……ッ!?!」

グルドが紫の血反吐を吐きながら叫ぶようにベジータに言う。

その顔にはベジータがここに来た事による困惑よりも、沸々と湧き上がる怒りが出ているように感じる。

ベジータは笑いながら返答した。

「なあに、最新の引導くらい長年共に活動して来た俺から渡してやろうと思つてな」

「何が共に活動だッ! 貴様は……貴様はーッ!!」

そこまで言つて、ベジータが掌をグルドに向ける。

「おっと、負け犬はさっさとあの世に逝け」

やめろ！　と言いかげグルドの頭は粉微塵に吹き飛んだ。

それを見たギニュー特戦隊の隊員達はポーズに対する困惑こそあれども、グルドが死んだ事には全くの無関心であった。いや、ポーズを決めるべき一員が欠けてしまった事に対しては嘆いていたが、所詮その程度でしかない。

硬直状態が漸く解けたクリリンとヤムチャがベジータに話しかける。

「な、何でお前が…？」

「フン、勘違いするな。別に俺は貴様らを助けに来た訳じゃあ無い。何やらギニュー特戦隊とやり合っている貴様らを見て絶好の機会だと思っただけだ。

ギニュー特戦隊を潰すのにな……」

クリリンとヤムチャは長年修行して来たから理解出来た、今のベジータは以前より更に強くなっているのだと。

その身体の中に流れる隠れたエネルギーは相当の時間を費やし編み出せるモノであるのだが、あの戦いから今に至るまでの短時間にここまで強化されていたのだ。

サイヤ人は本当に可笑しいほど強くなる。友である悟空も底無しであったが、エリートであるサイヤ人の王子、ベジータはこうも強くなるのか。

ベジータはナツパとラディッツに目を向け、

「サイヤ人だというのに何てザマだ。お笑いだぜ……」

そう言うものの、ベジータの顔は笑い顔などには程遠く、真剣そのものだ。その視線は凍てつく様に冷たく、興味が失せた、失望した、などの意味が含まれている様に感じ得た。

ラディッツはベジータを睨み付けるも何も言わず、ナツパは頭に青筋を入れながらも黙ったままだ。

その事に気付いて無いのか、或いは敢えて無視しているのかは分からないがベジータは更に言葉が続けた。

「俺には関係無いが、これからが本当の地獄だぞ？」

~~~~~

「こうなれば新しいポーズを隊長に考えてもらおうしかないなあ」

ジースがそう言うのと他の隊員が首を此方に向け、順に身体も向けて来る。向ける先は

勿論、ラディッツ達の方である。

ヤムチャとクリリンが構え、ラディッツが界王拳を身に纏う。ナツパは立ち上がろうとするが、まだ無理な様だ。

「ベジータちゃんも加わった事だし、更に楽しくなりそうね〜」

「ここを片付けた後又探すのも面倒だったしちようど良いや。奴にもたつぷりと味わって貰う事にしようか」

「へへへ、そりゃあ良い」

より一層盛り上がる隊員達。

しかしそこで問題が起きた。

「ところで、誰がベジータを相手にするんだ？」

身体が大きい、パイナップル頭の男リクームが一つの疑問を口に出す。

確かに。と皆が顔を合わせ、先ずはアボカド兄弟が名乗りを上げた。

「さっきのジャンケンで勝った俺らじゃないのか？」

「それはラディッツとロン毛の奴だろお？」

「じゃあさ、ベジータは譲るから残りは俺に……」

「あ、ズリーぞー！」

と、まあ話し合い（？）は進んでいくのだが、段々とそれは言い争いになり収拾がつかなくなっていく。

チヨコレートパフェなる単語が出てきたり、言い争いが普通に拳での語り合いになったりと、かなり混沌としている。

そして……

「あー止めだ！ 止め止め！ もう早い者勝ちで良いだろッ！」

こんな事になった。

## 閑話：あの世の悟空

これは、悟空がベジータに殺された後の出来事である。

「界王様く、オラ負けちまったあ」

悟空は死んだ後、真っ直ぐに界王星まで飛んで行った。

しかし、死んだと言うのに何とも呑気なものである。

「うむ。まさかサイヤ人の連中があそこまでとは思わなかった」

界王様も、うむうむと頷き仕方の無いといった様子だった。

自分以上と言ったが、ここまで強いのは予想外だったのだろう。時間を二人分にせず、一人に注いでいたならば結果は変わっていたかもしれない。

しかし、こうなつては地球の方が危ないのう。と言つた界王様に悟空は、

「大丈夫だ。兄ちゃんが戦つてんならぜってえ負けねえ」

頭の後ろに腕を組み、笑顔を絶やさぬままそう言う。

確かに地力はラディッツの方が上であったが、界王拳での精度では悟空の方が上だった。

試しに悟空とラディッツを戦わせてみたら、界王拳の扱いが上手いかずラディッツはその力に振り回され、悟空に敗北した。両者ともまだ本気では無かったと言えども、これでは悟空の方が強いと言わざるを得ない。

「界王拳の二倍もまだ満足に扱えぬラディッツが負けない、と？」

「ああ」

その自信は全く揺るがない。

悟空は、自分の兄の勝利を確信していたのだ。

「ふむ、まあお前のその自信がどこから来るのかはわからんが、悟空。お前が負けたのは事実だ。」

しかしじやな、お前さんには見所がある。これからも強くなりたいと申すのであれば、あの世での修行場に連れていかない事もない」

「ホントかあ!?!」

グレゴリーが口を挟もうとするが、それを界王様はまあまあと抑え、再度悟空に「どうだ？」と聞く。

「そんなのこっちから頼み込むくらいだあ！ 宜しく頼むぞお！」

悟空ははしやぎ回り、その喜びを身体全体で表現していた。

界王様は早速悟空をその場へ連れて行こうと腕を引っ張ろうとすると、

「あ」

いきなり止まった悟空に逆に引っ張られ、その場に転んでしまう。

「どうしたんじゃ?」

界王様はサツと立ち上がり汗をどこからか出したハンカチで拭う。

悟空は顔だけを界王様に向けると、

「界王様、天国ってどうやって行けんだ?」

そんな事を言った。

「な、なに〜!?!」

界王様は驚く。

驚いた拍子にまた転んでしまった。

まさか、いきなり気が変わってあの世でゆつくりとしたいと思つたのか。

界王様にそれを聞くと、

「いや、ちよつと用があんだ」

そう言つた悟空の顔はいつもの笑顔のハズなのに、他の感情が含まれている様に感じられた。

この状態の悟空を無理に連れて行つても修行に打ち込めないだろう。そう感じた界王様は、

「うむ。ワシが連れていってやろう」

と、そう言う。

「どうやら訳があるようじゃな。何とは聞かんが」

「ああ、聞かねえでいてくれてありがとう」

そして、二人は閻魔大王の所まで移動するのであった。

~~~~~

閻魔大王が界王様に会い頭を下げたり、てんやわんやで時間が掛かったが一人の鬼に連れられ天国へとやって来た悟空。

その鬼に悟空は、

「直ぐ済むから待っててくれ」

と言って飛んで行った。

それを聞いた鬼は、

「まだ仕事終わってないのに……」

一人ぼつんと、待っているのだった。

気を探り、天国中を飛び回る悟空。

しかし、聞けば天国の広さは宇宙と同じ位広いのだという。

そう聞いた悟空はより懸命に探す、中々見つからなかった。

「どこにいった？ ……じいちゃん」

飛ぶ。

飛ぶ。

飛び回る。

悟空は、果てもなく続く幻想的な草原を飛んで行った。

そして、疲れ果て、その場に寝転ぶ。

「広れえ……」

ノンストップで飛び回ったので知らず知らずの内に汗がびっしょりだ。

柔らかな風が吹き、涼ませてくれる。

さやさやと草の音が聞こえてくる。

ああ、気持ち良い。気を緩ませてしまったら寝てしまいそうだ。

そう思ったなら、途端に眠くなってきた。瞼が重くて、目を閉じたくてたまらない。

やがて、睡眠欲に負けてしまいそうになった時、

「おお、悟空じゃないか」

懐かしい声が、近くで聞こえた。

まさか、

まさか！

「じいちゃんっ!?!」

意識がはつきりと覚醒し、その場で飛び起きた悟空が目にしたモノとは……
紛れもなく自身の育ての親、孫悟飯だった。

「そうじゃ。ワシじゃよお」

「じいちゃん……じいちゃん……!」

気付いた時にはじいちゃんの胸に飛び込んでいた。

わんわんと悟空は泣き、親である孫悟飯はそれを優しく抱きとめる。

身体はもうスツカリ成長し大きくなった。でも、まるで子供に戻った様に泣きつく姿が、そこにあつた。

久しく流れていかなかった涙。後から後から止めどなく流れていき、それがなんだか安心する。

今までは文字通りの死闘が繰り返されていた。かく言う自分もそうだった。

今位はゆつくりしても良いだろう。

だから。

だからさ。

ほんの少しだけこのままに……

悟空は強かった。しかし、その裏には途方も無い努力が必要であった。

恩師である亀仙人の教え。

『よく動き、よく学び、よく遊び、よく食べて、よく休む』

悟空はこれを守り、しかし修行に関しては全く妥協せず自身の身体を痛めつけた。ただ強くなりたいたい一心で。

悟空は勿論それを自身で臨み、楽しんでやっていた。更に起こる激戦や死闘なども、悟空は笑っていた。これもサイヤ人の沸き立つ血のせいか。

自分に親しい間柄の人物。

友人はいた。恩師もいた。近頃では兄も。数々の出会いが悟空を成長させ、今の悟空がいる。

しかし、誰にも甘えてはいなかった。

戦い、傷付き、尻尾という弱点も見せながら生きてきた。

世界を教えてくれた友がいた。苦楽を共にした友がいた。戦って理解し合った友がいた。

だが、その中には無い弱い自分。

弱音を吐かず、弱い自分を見せず、明るい自分を出し続けていたのだ。

今までずっとそうだった――

一頻り泣いた後、悟空は涙を拭い笑顔を見せた。

しかし、それが段々と暗くなっていき、俯いてしまう。

「じいちゃん。オラ謝らなきゃいけない事があんだ。オラ、オラ……」

そこまで言って悟飯が止める。

その顔は笑顔のまま。そして優しく語りかけてきた。

「悟空よ、それはワシが悪いのじゃ。」

お前さんの正体を教えんかったばかりに、辛い思いをさせたのう……」

満月の夜は必ず外に出てはいけない事。

悟空が起きた後、めちやめちやになった悟空と悟飯の家。

そして、踏み潰された孫悟飯。

それが、ベジータとの戦いではつきりした。理解した。

夜に出る化け物……大猿は自分なのだろうと。

自身の親を殺してしまったのは、紛れもなく自分なのだ。

失わせてしまったのは自分のせいなのだ。

「ごめん……ごめんよお」

止まった涙が溢れ出し、大声で泣き出した悟空。

何度も何度も謝りながら。

きつと、悟飯は許してくれているのだろう。それが堪らなく悔しくって、悲しくって、
そして嬉しかった。

泣いた後、悟空は生きていた時の事を話し出す。

占いババでの出来事の後、強敵と戦った事。

ちゃんと尻尾も鍛え、弱点を克服した事。今ではその尻尾は無いが。

そして、自分は宇宙人だった事。

悟飯は面白そうに聞き入っていた。

話の途中で質問もし、時には驚き、時には腹を抱えて大笑いした。

そして、

「悟空にも兄弟がいたんじやな」

元気よく返事をする悟空。

もう、寂しくはない。この再会で、一生分（死んでいるが）の涙を流し切ったつもりだ。

別れの会話を済ませ、空に浮かぶ悟空。

「じゃあな、じいちゃん！」

悟空は飛んで行った。育ての親の笑顔を受けて。

そこには迷いのあつた不安な顔はどこにも無く、とても明るい笑顔だった。

~~~~~

「ピッコロ!? オメエも来てたんかあ!？」

「ああ、納得はいかんがな」

天国から界王星まで戻ると、そこにはピッコロがいた。話を聞いてみると、どうやらベジータとは違うもう一人のサイヤ人に殺されてしまったらしい。

「ちゅーことはピッコロもあれ、やったんか?」

「……」

その返答は帰ってこない。プイツと首ごと目線を逸らし、腕を組みながらそこに佇んでいるだけだ。

と、そこへ界王様が家から出てくる。

「いや、悟空。お前さんの星には駄洒落のプロが多いのお。ぐふふ……」  
思い出したかのように口元を抑え笑いを堪える界王様。

悟空はピッコロが駄洒落など言う様子が思い浮かばなくて「意外だなあ」と言っていた。  
た。

と、目線が悟空へと移り雰囲気が一変。顔付きを変え真剣な様子で聞く。

「もう、平気じゃな？」

「ああ、もう大丈夫だ！」

界王様に言われ、返事をする悟空。界王様も納得や安心といった表情を見せて顔を緩ませる。

これからキツイ修行が待っている。悟空はまだまだ強くなるつもりだ。きつと、地球の皆も強くなっているだろう。

これから更に激しい戦いが起こるのだろう。

もう負けない。仲間を守る為に、悲しい思いをさせなくて済むように。そう心に誓った悟空であった。

## 特戦隊十α 中

全員が同時に動き出した。

ある者は地を蹴り、

ある者は気弾を放ち、

ある者は空へと飛び上がる。

目で見て、気を感じ取り、僅かな空気の流れを読む。これら全て、この場全体を把握しなければならぬ為の手段である。

集中攻撃されたならばこの戦場では一瞬の間も生き残れまい。だからこそ、全体に気を配らなければならなかった。

近寄る者を判断出来なければ仲間には誤射してしまうかも知れない。立ち位置が悪く、流れ弾を喰らう可能性もある。

目の前の敵だけに集中、なんて事は出来ないのだ。

「ハッハッ！ 俺の相手はどいつだい？」

真正面から突っ込んで来たのはリクーム。その後ろから飛び出したのはジースとバータだ。

先頭を突っ走ったリクームは固まっていたヤムチャとクリリンに狙いを定めて襲い掛かる。

「リクーム……エルボーッ!!」

戦闘力の差もさることながら、その巨体から繰り出される技は危険極まり無い。受け止めようなどと考えたその瞬間、二度と起き上がれない身体とされてしまうだろう。

クリリンとヤムチャは別々に回避。どちらも間一髪であった。

「甘いぞッ!!」

「先の事を考えて行動しなきゃなあ!」

そこへ迫って来たのはジースとバータ。

全く同じタイミングでそれぞれに蹴りを入れ、涼しい顔でリクームの横に立つ。

決してその蹴りは軽くない。ヤムチャとクリリンは地面に転がり、力を受け流せずに倒れ込んでしまう。

「はあ、こんなモンかあ? もつと足掻けッ! 抵抗してみせるッ!」

「やめろよバータ。奴らはこれでも精一杯頑張ってるんだから」

「そうそう。俺たちはエリートだぜえ? まだ生きてるだけでも奇跡的なモンよ」

強者の余裕をありありと見せつけるギニー特戦隊の三人。

今の三人の様子は、一人が欠伸をし、一人は屈伸、もう一人は指をバキボキと鳴らしている。しかし、こんな隙だらけの様子でもクリリンとヤムチャの二人に何の策も無ければ<sup>なぶ</sup>捌られて遊ばれて無惨に殺されてしまうだろう。それもごくあつさりど、だ。

「クソツッ！ クリリン！ まずは俺から攻めるぞツ!!」

そう言うときヤムチャは練気弾を創り出し、人型へと変化させる。しかし、気を大量に消費する人型の練気弾はこれで三度目になる。それは確実にヤムチャの体力を削り続け、現に今は肩で大きく息をしている。

クリリンはその様子を見てヤムチャの事を心配するものの、どうやら話し掛ける事すら害を与えかねない程不安定であるようだと感じ取る。

最早他人に意識を回す余裕も無いのだ。

クリリンも自身の事に集中し、目線を敵に合わせる。

「お、いいね。そうこなくちゃ面白くない」

リクームが笑う。そして、ヤムチャの創り出した練気弾と打ち合い始めた。

こちらを甘く見ている為か、隙だらけである身体に蹴りや突きを叩き込む。が、リクームは全く動じていない。

だが、ダメージは蓄積するものだ。

繰気弾の機動力を生かしてリクームからの攻撃を弾き、いなし、受け流す。これまで一番の動きを見せていた繰気弾が、確かにリクームを押しさえ込んでいた。

クリリンは凄い、と思わざるを得ない。遥かに上回る戦闘力の差を技術でカバーしきっていた。

「おうおう、中々粘るじゃん」

「そんじゃこつちも動くとするか」

ジースとバータが余裕の表情でゆつくりとこちらに近付いてくる。

距離を取らねば。そう思ったクリリンは場を離れようとした。

そして気付いた。

ヤムチャが、とつくに限界を迎えていた事を。

ヤムチャのその目は血走っていた。身体が小刻みに震え、鼻からは血が流れ出てい

る。これが人型繰気弾の欠点だ。人の脳で二人分の情報量を長い時間捌きさば続けるのは頭の中をフル回転させても到底足りない。

既に、ヤムチャは正常な判断が出来ていない。奴らが近付いて来るのに全く動かず、

立ち尽くしたままだ。

「おや、自殺志願者かな？ それとも、今になってブルっちまったか？」

「俺たちがこんなに近くににいるのに、全く動こうとしないぜ。こいつ」

そう言つて、ジースはヤムチャを殴り飛ばす。無抵抗のまま殴り飛ばされた姿を二人は笑つていたが、ヤムチャは立ち上がりもせずリクームの方だけを睨み付けていた。

その様子に、さつきまでニヤニヤと笑つていた二人の表情が変わる。

「おい、俺たちは眼中に無しかよ」

そう言つと、バータが寝たままのヤムチャに蹴りを食らわす。まるでサッカーボールの様に吹つ飛び、岩に突っ込んでしまった。

「まずは一人……随分とつまんなかったな」

ジースがそう言つた瞬間、円盤型の何かが襲い掛かる。

ジースはそれを首だけ動かして避け、バータは上半身をくねらせ「危なくい」とワザとらしく怖がる。そしてその円盤が来た方向を見ると、クリリンが頭に血管を浮き出しながら荒々しく息を吐いていた。

「よくも……よくもヤムチャさんをオツ!!」

怒りに震えたクリリン。不意打ちで放つた気円斬を避けられ勝機は殆ど無いのだが、そんなのはもう関係無かつた。今のクリリンは今すぐにでも奴らに突っ込んでいきそ

うな状態だ。

クリリンが玉砕覚悟で突っ込もうとする。しかしその肩を掴み、強引に止める者がいた。その人物とは……

「よせ。代わりに俺が戦ってやろう」

それは皮肉にも一番の親友を奪ったサイヤ人、ベジータだった。

くくくくく

「くツ?!」

二人同時に襲い掛かれ、後退しながら攻撃を捌くラディッツ。界王拳を身に纏ったとはいえ、幹部級が二人同時となると中々攻めに集中出来なかった。

「ハッハー! どうやら俺たち兄弟に手も足も出ない様だなア!!」

「無理も無い、俺たち兄弟のコンビネーションは無敵だツ!!」

そう、ラディッツはアボカド兄弟の連携攻撃に苦戦していた。

隙を突く暇も与えず、互いをカバーするその動きに弱点は無い。ラディッツはただ守りと回避に身を置く事しか出来ないのだ。

暫く回避と防御をし続けるラディッツ、僅かな隙を見つけ、攻撃のタイミングに合わせてカウンターを当てようとする。しかし兄弟の動きはそのカウンターすら惑わせてしまう程である。

「チツ、ポツチャリ体型なクセして妙に疾いじゃねえか」

「まだそんな口を聞く余裕がある様だな」

「ならば、その余裕を無くさせてやろう！」

アボとカドは一旦ラディッツから距離を置き、怪しい動きをし始める。またあの変なポーズか何かかかと思つたラディッツであつたが、嫌な予感がし、感覚を研ぎ澄ませながら構え直す。

アボとカドは空中で直立不動となり、片方がもう片方の背後に隠れる。体型や身長が全く同じな為、ラディッツからは完全に隠れた状態になるのだが、次の瞬間驚くべき事が起きた。

「なッ……!?!」

なんと、数が増えたのだ。その後も何回か繰り返し、アボとカドがそれぞれ三人ずつ

に増える。

ラディッツは驚きを隠せなかった。残像拳の類では無く、天津飯が見せた四身の拳の様に気が落ちている訳でも無い。

「「「いくぞオ!!」「」」」

アボとカドの二人の……いや、六人の声が重なりラディッツに向かっていく。

それに対しラディッツは、どうする事も出来なかった。

アボが蹴りを放ち、アボが顔面へ殴打をかまし、カドが腹に膝蹴りをし、アボが……最早誰が誰だか分からない。全員の攻撃が質量を持ち、それが前後左右オマケに上下に至るまで徹底的に攻めてくるのだ。

こんなのどうやって防御すればいいのだ。冷静さが削られていくラディッツは相手の攻撃を無視し、強引に攻める作戦に出た。攻めなければジリ貧で負ける。少しでも奴らの体力を削り取らなければ、と。

しかし、消える。

突きを、蹴りを、頭突きを食らわせたハズの相手が、まるで幻影を殴っている様だ。

「ずりいだろ……」

戦場にズルい、汚いなんて言葉は存在しない。しかし、この理不尽な状況が怒りの炎に油を注ぎ、言葉となって表れてしまうのだ。

ゴガアッ!

そして油断。イイのを貰ってしまふ。

顔面に思いつき入り、その後の光景はドロドロだ。映像が歪み、マトモに飛ぶ事すら出来なくなり、底に落ちる。

何か、覆す作戦とかは無いか。

何でも良い、この状況を変えられるものならば。

(こういう時、親父ならどうすつか……? ベジータなら、ナツパなら……カカロットなら)

ラディッツは考える。奴らの声が五月蠅いが、恐らく嘲笑っているか罵っているかなので無視だ。

奴らが来るまでの僅かな時間、頭の中をフル回転させる。

「だあく!? 思いつかねえッ!!」

ラディッツは吹っ切れたかのように復活した。

その様子に、そろそろトドメを刺そうとしたアボカド兄弟もギョツと目を見開き驚愕する。

「な、中々タフじゃねえか」

「実に壊し甲斐があるつてもんだー！」

しかし、流石は宇宙のエリートと言ったところか。動じはするものの直ぐにいつもの調子を取り戻し再度トドメを刺そうと向かっていく。

一方、ラディッツは先程とは全くの別人の様に余裕の笑みを浮かべていた。

「さっさと来いッ！ このラディッツ様が相手をしてやるー！」

その直後、先程と同じ様にアボカド兄弟がラディッツの周りを取り囲み、一度に突っ込んで行った。これでは逃げ場など無く、全方位からの攻撃である為防衛も不可。どう足掻いても絶望的な状況であるハズなのに、それでもラディッツは笑みを消さなかった。

ドゴオツ!!

肉体を叩いた音とは思えない程の鈍い音が辺りに響く。明らかに今までとは違う一撃が繰り出された証拠だ。叩き込まれた部位によっては、相手は悶絶するどころでは無

いだろう。実際その一撃は、今着ている戦闘服など簡単に穿つのだ。

しかし、それはラディッツのでは無いのだが。

「ボワアツ!?!」

ラディッツの両足の蹴りがアボカド兄弟の本体の腹に突き刺さる。堪らずアボカド兄弟はその衝撃の余り顔を醜く歪ませ、口から空気と共に体液を吐き出した。

そんな様子を見たラディッツは、

「よく聞けよ卑怯者共。サイヤ人は戦闘種族だ、この戦闘の最中でも成長するんだよツ  
!」

余裕の笑み、それでいて獰猛なソレを浮かべたサイヤ人が、そこにいた。

馬鹿な!?! と驚く二人。その様子に冷静さなど無く、驚きの色を隠せていない。その姿にエリート風の風格はあつただろうか。

~~~~~

「ん、よっ、ほっ」

大柄な男、リクームがヤムチャの造った人型の気の塊と打ち合う。その強さはリクームを打倒とはいかないものの、確実に押し留めていた。

長年に渡った武術の理想、その理想が生み出すヤムチャの最大の動きを繰気弾が体現していた。

しかし、地力が余りにも足りない。

戦闘力の差、というものはとても残酷だ。

ヤムチャの作り出した繰気弾。それが生み出せる最大の動きであっても、宇宙のエリアートであるリクームには届かない。

現にリクームが戦闘を楽しむべくある程度の加減をしていなければ、たちまちヤムチャが決死の思いで生み出したこの繰気弾であっても霧散させられる事だろう。

「ん？ やつとベジータちゃんも動き出したか」

余所見をしながら打ち合うリクーム。それだけでどれだけ余裕なのか窺い知れる。

このままではジースかバータに最高級の獲物を横取りされてしまう、そんなのは面白く無い。例えそのお詫びに食後のデザートを渡されても納得がいかないであろうリクームは、早々にこのよく分からない気の塊を片付けてベジータの方へ向かっていこう

と思った。

「それおれッ!!」

バータが宇宙一のスピード、グルドが超能力であれば、リクームはパワーであった。筋骨隆々なその身体からは今まで以上のエネルギーが満ち溢れ、一撃一撃が重くなる。それが打ち込まれるのは言うまでもなく目の前の繰気弾だ。

人型である繰気弾は勿論人と同様の動き方をする。それならば攻撃方法も同じ、受ける構えも同じだ。

「??????」

ぞして、ダメージを受けた後の行動も同じだ。

リクームの拳を防御した繰気弾は、それを打ち破られて腹に直撃する。瞬間、その身体はくの字に折れ曲がり、更に拳が貫通する。

気で造られたモノであっても、その拳を受けたまま反撃に出る事は不可能だ。人型だったそれは貫通した部分から徐々に形が失われていき、消えていった。

「さて、ベジータちゃんの為に急ぐとするかア!」

まだあつちちは戦いを始めていない。なら間に合うな、とリクームは笑う。

そうやってリクームが飛んで行こうとした時、

「待てよりクーム。先ずは俺と遊んでいけや」

その声と共に何かお腹に突き刺さり、堪らず後退するリクーム。

この重さ、先程の変な気の塊では無い。そしてこの声、聞き覚えがある。記憶にもそう遠くない。しかしその声の持ち主はダウンしたはずだ。そう思い顔を上げると、

「驚いたか？ 俺はタフさが売りなんでね」

ナツパが、そこに立っていた。